

問題児と共に行く世界の破壊者

英雄に憧れた一般人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の破壊者である仮面ライダーディケイドこと門矢士の元に一通の封筒が届いた。

その中の手紙の内容を大体把握した士は光に包まれ、目を開ければそこは見たこともない世界であった！

新たなる異世界、新たなる出会い。

門矢士の新しい旅が幕を開ける。

目次

| | |
|------------------------|-----|
| プロローグ「世界の破壊者、新たなる異世界へ」 | 1 |
| 猛虎と英雄退治編 | |
| 第1話「箱庭の世界」 | 4 |
| 第2話「少年と虎と夜叉と怪盗」 | 10 |
| 第3話「白き夜の魔王」 | 20 |
| 第4話「通りすがりのコミュニティ」 | 33 |
| 第5話「魔王」を倒す者達」 | 42 |
| 第6話「狂想曲#狂える虎と吸血鬼」 | 53 |
| 第7話「猛虎への鎮魂歌」 | 66 |
| 第8話「箱庭の騎士」 | 80 |
| 第9話「仲間」 | 90 |
| 第10話「伝説への挑戦」 | 100 |
| 第11話「悪魔は泣き、英雄は嘆く」 | 112 |
| 第12話「英・雄・退・治」 | 129 |

プロローグ 「世界の破壊者、新たなる異世界へ」

全てを破壊し、全てを繋げる世界の破壊者、デイケイド。
いくつもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

*

門矢士様へ

そう書かれた封筒が世界の破壊者、仮面ライダーデイケイドこと門矢士の元へと空から降ってきた。

それを受け取った士はまず怪しいところがないか、誰から自分に宛られた手紙なのかを確認した。

夏海「士くん、それどうしたんですか？」

ユウスケ「士宛に手紙？まさか鳴滝さんか？」

士「あいつはこんな手紙も門矢士様へとも書かないさ」

そう言つて光写真館から出てきた2人、仮面ライダーキバと光夏海と仮面ライダークウガこと小野寺ユウスケと共に封筒を開ける。

中には1枚の手紙が入っており、そこにはこう書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能^{ギフト}を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの“箱庭”に来られたし』

夏海とユウスケの2人は首を傾げ、お互いに顔を見合わせた。全くもって内容を理解できなかつたからである。

ユウスケ「何だこれ？」

夏海「“箱庭”とは何でしょうか？」

士「さあな。だが、向こうはもうお呼びのようだ」

夏海「へ？」

ユウスケ「とうか士が少年とかそんな歳じゃないだろうってうわっ！士が光ってる！」

士「そういう訳だ。じゃあな」

士がそう言うのと光に覆われ、そして消えた。

いつもは銀のオーロラのようなカーテンを出して異世界へ行く士だが、今回は光に包まれるという新たなパターンなため、残された2人は啞然とするしか出来なかった。

栄次郎「おーいみんな。お茶入ったよ〜って、あれ？士くんは？またどっか行っちゃった？」

夏海「そ、そうみたい？」

ユウスケ「今度はどんな世界なんだよ…」

とりあえずはまたいつものように適当に戻ってくるだろうと考え、3人は光写真館の中へと戻った。

その光写真館の絵が、今回は修羅神仏や魔王のような存在が描かれた絵に変わっているとは露とも知らず……………。

*

士が目を開けると、そこは空であった。

士「おいおいおい、流星にこの展開は無いだろ」

士は少し驚きつつもまずは今の状況を確認し始めた。

見たことのない風景。

世界の果てのような断崖絶壁。

巨大な天幕に覆われた未知の都市。

そしてただいま落下中の士。

士「とりあえず1枚撮つとくか」

パシャ

そうしていつも使っている愛用のマゼンタカラーのカメラで写真を撮る際に下を見ると、そこには湖があった。

カメラ⇨電子機器。

湖ということは水。

電子機器は水に濡れると壊れる。

そこまで思考が回った士が発した言葉は、

士「あっ」

そこからは言うまでもないだろう。

見事な落下であった。

猛虎と英雄退治編

第1話 「箱庭の世界」

士「カメラは無事か。まさか防水機能にされていたとは、帰ったら感謝するか」

カメラが無事であったため、一先ず安堵した。

それから状況を確認するため周囲を見ると、そこは森の中であり、そして同じように連れてこられたであろう少年少女が同じくびしょ濡れでいた。

飛鳥「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺り込んだ拳句、空に放り出すなんて！」

十六夜「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

士「石の中だとまた面倒だと思うが？」

十六夜「俺は問題ない」

飛鳥「そう。身勝手ね」

とりあえず全員が湖から上がり、服の端を絞る。

耀「此処、どこだろう？」

十六夜「さあな。まあ世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

士「かもな。とりあえず写真を撮ったが見るか？」

十六夜「おう、見る見る」

飛鳥「私も見させてもらっても良いかしら？」

耀「私も」

士「ああ、別に良いさ」

4人が士の撮った写真を見たが、その写真はいつものように歪んでいる。

飛鳥「……………何これ？」

耀「写真、下手」

十六夜「お前才能ねえな」

士「この世界が俺に撮られたがついていないらしい」

十六夜「クハハハハ、お前おもしれえな」

とりあえず4人は写真から顔を上げ、それぞれの顔を見合わせた。お互い考えてることは同じらしく状況整理を始める。

士「ところでお前らにも変な手紙が来たのか？」

飛鳥「そうだけど、あなたもその彼もまずは“オマエ”って呼び方を訂正して」

士「了解した」

飛鳥「なら良いわ。私は久遠飛鳥よ。その猫を抱えてる貴方は？」

耀「春日部耀。以下同文」

飛鳥「そう。よろしく春日部さん。それで、野蠻で凶暴そうなその貴方は？」

十六夜「高圧的な自己紹介ありがとよ。見たまんま野蠻で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれるお嬢様」

飛鳥「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君。で、最後にその貴方は？」

士「門矢士だ。写真を撮ること以外なら何でも出来る世界の破壊者だ」

十六夜「へえ、なら俺とどっちが強いか試さねえか？世界の破壊者さんよ」

士「相手はまたいつかしてやる。とりあえずはその茂みに隠れてる奴に話を聞いてみないか？」

このままでは本当に戦いに発展しそうになるため、とりあえずはこの状況を最も説明できるであろう人物に声をかけた。

黒ウサギ（ギクツ！）

十六夜「何だ、気づいてたのか」

飛鳥「あら？貴方も気づいてたの？」

十六夜「当然。そっちの猫抱いてる奴も気づいていたんだろ？」

耀「風上にたたれたら嫌でもわかる」

十六夜「……………へえ？お前も面白いな」

士「とりあえず出てきて挨拶ぐらいしたらどうだ？」

そう言われ、黒ウサギは気まずそうに4人の前に姿を現した。

その視線はとて冷ややかなものであることもあり、殺気すらも感じてしまっていたためであった。

しかし、その視線は黒ウサギを見るや否や、一転して興味津々な視線へと変わった。

そう、黒ウサギの姿が自前のウサ耳と尻尾、そして服がバニー服であるからである。なお、黒ウサギ自身は獲物を見るような目で見られているため彼らの心の中など分かるはずもないのだが。

黒ウサギ「や、やだなあ皆様方。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便にお話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

十六夜「断る」

飛鳥「却下」

耀「お断りします」

士「結構だ」

黒ウサギ「あつは、取りつくシマもないですね♪」

その後、耀、十六夜、飛鳥の3人が黒ウサギの耳やら尻尾やらを掴まれ、その様子を士はカメラで撮るといいういかにもカオスな状況であった。

*

黒ウサギ「あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは」

士「撮った写真いるか？」

耀「これも下手。でも貰う」

飛鳥「私もいただくわ。まあ記念にとでも思えば良いものね」

十六夜「俺も貰っておくわ。こんなのもこの世界でも需要はあるだろ」

黒ウサギ「皆様話を聞くのですよ！というか黒ウサギの写真を手勝手に撮って勝手に配らないでくださいー！」

士「それは無理な相談だ。それよりもさっさと進めろ。長い話は嫌いなんだ」

耀「右に同じく」

飛鳥「同意見」

十六夜「以下同文」

黒ウサギは涙目になりながらも問題児な彼らに「箱庭の世界」について説明を始めた。

「箱庭の世界」

修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた「恩恵」^{ギフト}を用いて『ギフトゲーム』にて競い合うためのギフト保有者がオモシロオカシク生活できる為の造られたステージなのだ^と黒ウサギは言う。またギフト保有者は箱庭で生活するに辺り、「コミュニティ」に必ず属すること。

『ギフトゲーム』の勝者はゲームの「主催者」^{ホスト}が提示した賞品を獲得出来ること。

「主催者」は様々な存在がおり、また参加するためにもチップを用意する必要があること。

負ければ、そのチップが奪われること。

十六夜「俺も質問していいか？」

十六夜の顔からは軽薄な笑顔は無くなり、威圧的な声を上げた。

黒ウサギもそれに気づき、構えるように聞き返す。

黒ウサギ「……………どういった質問です？ルールですか？ゲームそ

のものですか？」

十六夜「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。俺が聞きたいのは……たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

思わず黒ウサギは冷や汗をかきながらも十六夜の言葉を待った。ここで彼が何かとんでもない発言をする可能性が高く、外面は平然を装っているが、内心は気が気でいられないのだ。

だが次の言葉でそれは杞憂だったと納得する。

十六夜「この世界は……面白いか？」

その質問を聞き、黒ウサギは確信した。

彼らならきつと、私たちの「コミュニケーション」を救ってくれるに違いないと。

だからこそ、黒ウサギは満面の笑みで答えた。

その中に含まれている不安も、恐怖も押し殺して。

黒ウサギ「――YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界よりも格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

その解答に、十六夜、飛鳥、耀は笑みを浮かべる。

そこには未知に対する不安よりも、新しき世界に対する期待のが10割であった。

ただ1人、世界の破壊者たる士はこの世界を破壊すべきか否か、1人見極めている。

修羅神仏が集い、命すらもかける『ギフトゲーム』がある「箱庭の世界」。

だが、そんな世界に士自身も心の奥底で期待を感じていた。

この世界なら、世界の破壊者すらも受け入れるのではないかと。

士「そうか、大体分かった。ならまずはあんたの「コミュニケーション」とやらを紹介してもらおうか」

黒ウサギ「YES♪では我らがリーダーの元まで案内するのですよ」

そうして彼らは歩き出した。

先に待つ、道に心躍らせながら。

ただ1人、十六夜だけがとある1つの存在に気づいた、がそれよりも世界の果ての方が気になったため黒ウサギに気づかれないように駆け出していた。

他の3人には口止めをして。

第2話 「少年と虎と夜叉と怪盗」

黒ウサギ「ジン坊ちゃん！新しい方を連れてきましたよー！」

ジン「お帰り黒ウサギ。そちらの御三方が？」

黒ウサギ「はいな、こちらの皆様方が——」

クルリ

カチン

黒ウサギ「……………え、あれ？もう1人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放ってる殿方が」

飛鳥「ああ、十六夜君のこと？彼なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』と言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」

飛鳥が何気なく答え、十六夜の行き先に指を差す。

呆然とした黒ウサギはすぐさま3人に問いただし始めた。

黒ウサギ「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

士「『止めてくれるなよ』って言われたからな」

黒ウサギ「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか！？」

耀「『黒ウサギには言うなよ』と言われたから」

黒ウサギ「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかつただけでしょう

御三方！」

飛鳥「うん」

耀「うん」

士「ああ」

ガクリ、という音が聞こえ前のめりに倒れる黒ウサギを士はカメラでまた撮る。それも歪んでいるが、その歪みが黒ウサギの悲壮感を感じさせていた。

そして、ジン坊ちゃんと呼ばれた少年の方を見ると、蒼白になって叫んでいた。

ジン「た、大変です！『世界の果て』にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

耀「幻獣？」

ジン「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に『世界の果て』付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

飛鳥「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」

耀「ゲーム参加前にゲームオーバー？………斬新？」

士「短い付き合いだったが、まあいい奴だったな」

黒ウサギ「冗談を言ってる場合じゃありません！」

その後、黒ウサギは黒い髪を淡い緋色に染めていき、恐るべき速度で跳躍しながら十六夜が向かったであろう方向へ向かって行った。

飛鳥も耀も素直に感心し、とりあえずは箱庭の中をジンに案内してもらおうこととなった。

ジン「ジンⅡラッセルです。年齢11になったばかりの若輩ですがよろしく願います。三人の名前は？」

飛鳥「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

耀「春日部耀」

飛鳥「で、そっちでカメラを持ってるのが」

士「門矢士だ。まあよろしくな、ジン坊ちゃん」

ジン「はい。皆様よろしく願います」

飛鳥「それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

そうして4人は箱庭の中へと入って行った。

それぞれの想いを抱えながら、これから起こるであろう様々な摩訶不思議に心躍らせるのであった。

*

中に入り、ジンの説明を聞きつつ辺りを観察する3人。耀はちよく

ちよく独り言のようなことを呟いており、飛鳥はジンに色々と質問をしていた。

士は耀の様子が気になり、そのことを耀に直接聞くことにし話しかける。

士「お前は猫と話せるのか？」

耀「っ！ど、どうして？」

士「どうもその猫に向けて話しかけてるからな。そうじゃないかと思っただけさ」

耀「……………うん、でも三毛猫だけじゃなくて多分どの動物とも話せる」

士「ほう、それは興味深いな」

耀「話せるようになったのは、お父さんのおかげ。それに、動物たちと友達になったから」

カフェに着くと猫耳の少女が注文をとりに来た。

その際、先ほど士と耀が話していたような話となり、飛鳥はそのことに驚きを隠せないでいた。

またジンの説明により、幻獣との意思疎通が困難であり、黒ウサギでも全ての種とはコミュニケーションをとれないこと。

飛鳥「そう……………春日部さんは素敵な力があるのね。羨ましいわ」

耀「久遠さんは」

飛鳥「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

耀「う、うん。飛鳥はどんな能力を持っているの？」

飛鳥「私？私の力は……………まあ酷いものよ。だって」

???「おんやあ？誰かと思えば東区画の最底辺コミュ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒にやないんですか？」

全員が品の無い上品ぶった声のする方を見ると、そこには2mを超える巨体をピチピチのタキシードで包む変な男がいた。

ジンはその顔を見るや否や顔をしかめる。

ジン「僕らのコミュニティは〃ノーネーム〃です。〃フオレス・ガロ〃のガルド〃ガスパー」

ガルド「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなど出来たものだ——
—そう思わないかい、御三方」

その後ガルドとジンが一悶着ありながらもガルドが異世界から来た3人に「コミュニティ」の説明を行なった。

「名」と「旗印」について、そして、現在のジンがリーダーを務めている「ノーネーム」について。それに

「魔王」について。

士「魔王ねえ」

かつて、最低最悪の魔王と呼ばれた少年がいた。

彼は己の未来を聞き、最高最善の魔王になると宣言した。

色々あつて士も何度か関わり、最終的には魔王となった彼だが、そんな彼に似たようなものかと当たりをつける。実際は多少異なっているのだが、ガルドの長い話を聞き飽きた士にとってはどうでもよかった。

士「そうか、大体分かった」

いつもの言葉で返事をする。もはやガルドに一切の興味はなく、目の前に出されている紅茶を啜る。

ガルドはというとジンを罵り、そしてジンとジンの所属するコミュニティに対しての評価をかなり下げたところで士たちを勧誘する。

だが、彼らはすでに結論を出していた。

飛鳥「結構よ。だってジン君のコミュニティで私は間に合っているもの」

ガルド「は？」

飛鳥「春日部さんは今の話をどう思う？」

耀「別に、どつちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけだもの」

飛鳥「あら意外。じゃあ私が友達第一号に立候補していいかしら？ 私達って正反对だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」
耀「……………うん。飛鳥は私の知る女の子とちよつと違うから大丈夫

かも」

士「なら俺も友達第二号として立候補してやろう」

飛鳥「なんでそんな上からなのよ」

士「別に？特に理由はないさ。強いて言うなら、俺だからだ」

飛鳥「呆れたものね」

耀「でも士も良い人だと思う。だから、大丈夫」

ジンとガルドをそっちのけで話している3人に対し、ガルドは精一杯のハリボテの笑顔で理由を尋ねた。

耀は友達を作りに来たため。

飛鳥は裕福だった家や約束された将来など人が望みうる人生の全てを支払って箱庭に来たため。

士は世界を旅するという性分なため。

ガルド「お……………お言葉ですがレデ

飛鳥「黙りなさい」

ガチンツ！

ガルドが喋ろうとしたその口は飛鳥の一言により強制的に口を閉ざされた。その事実にはガルドだけでなくジンも困惑していた。

ガルド「……………!?!……………!?!」

飛鳥「私の話はまだ終わってないわ。貴方からはまだまだ聞き出さなければいけないことがあるのだもの。貴方はそこに座って、私の質問に答え続けなさい」

飛鳥の質問により、ガルドがどうやってコミュニティをかけた『ギフトゲーム』を行なったのかを聞き出した。

そして、人質はすでもう殺されたということ。

飛鳥の強制力がなくなればガルドは本性を現し、今にも飛鳥に掴みかかろうとしたが、それを耀が腕を掴み、腕を回すようにしてガルドの巨軀を押さえつけた。

士「まあお前の上に神だろうが魔王だろうがいようと、その俺達のリーダーの最終目標はコイツらのコミュニティを潰した『打倒魔王』なんだ。つまりは、お前はもうゲームオーバーってやつだ」

ジン「……………はい。僕達の最終目標は、魔王を倒して僕らの誇りと

仲間達を取り戻すこと。今さらそんな脅しには屈しません」

ジンは魔王という恐怖に負けそうになったが、今は心強い仲間がいる。そして自分達の目標を問われ、その瞳には覚悟を灯している。

“打倒魔王”

それが自分達の為すべきことである。

飛鳥「私達と『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の“フォレス・ガロ”存続と“ノーネーム”の誇りと魂を賭けて、ね」

飛鳥はそう言っただけで楽しそうな笑みを浮かべた。

*

十六夜と黒ウサギと合流後、4人は黒ウサギに叱られていた。

“フォレス・ガロ”相手に『ギフトゲーム』を挑んだことに対してである。

しかし、その理由についても理解は示している。

だからこそ一概に駄目だったとは言えないのだ。

“フォレス・ガロ”の悪事をここで見逃せば必ずまた襲撃される。今ここで潰す必要があるのは確かなのだ。

黒ウサギはその矛を納めたが、『ギフトゲーム』に参加するのは飛鳥、耀、ジンの3人であることにまた黒ウサギは叱り始めた。

黒ウサギ「とりあえず十六夜さんの理由は分かりました。ですが士さんはどうして参加されないのですか？」

士「そんなもの決まってるだろ？俺が参加すれば確実に勝つてしまいうからだ。それじゃ面白くない」

黒ウサギ「そんな理由ですかあ!？」

士「まあどうしてもってなら参加するが、お嬢様方は嫌だろ？」

飛鳥「そうね。それに男がいたから勝てたなんて言われたら気分悪

いじゃない？だから、今回は私と春日部さんとジン君で戦いたいってわけ」

黒ウサギ「ジン坊ちゃんも男の子だと思うのですが」

飛鳥「ジン君にすごいギフトがあるなら話は別だけど、そんなギフトがないから私達のコミュニティはこんな状態なんでしょう？だったら問題ないわ」

黒ウサギ「そうですか、分かりました。ギフトゲームが明日だと言うのなら『サウザンドアイズ』に皆さんのギフト鑑定をお願いしたいと」

それから黒ウサギから『サウザンドアイズ』、特殊な『瞳』のギフトを持つ者達の群体コミュニティに向かうという話となった。

ジンは先にコミュニティに戻り、5人は『サウザンドアイズ』へと足を向けた。

黒ウサギから全員が別々の時間軸から召喚されたことなど説明されていたが、士はどうでもよかったため、町並みを写真で撮り続けた。

どれも歪んでいるが、それでも町並みの様子をよく理解できた。

様々な種族が存在していることは別に士にしてみればおかしくもないのだが、他の3人にとっては珍しいものらしい。

そうして『サウザンドアイズ』に着いたが、これまた一悶着あったが、1人の闖入者によって遮られた。

???「いいいやほおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

黒ウサギにフライングボディーアタックを喰らわし、空中4回転半ひねりして街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んだ。

黒ウサギ「し、白夜叉様!?どうして貴方がこんな下層に!」

白夜叉「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろうに!フフ、フホフホホ!やっぱりウサギは触り心地が違うのう!ほれ、ここが良いかここが良いか!」

とりあえずこの光景も写真に収める士。

呆然とする女子2人。

女性店員に別バージョンを頼む十六夜。
それを断る女性店員。

ツツコミ不在とはこのことだろう。

黒ウサギは白夜叉を何とか剥がし、頭を掴んで店に投げつけたが、十六夜が飛んできた白夜叉を足で受け止める。

十六夜「てい」

白夜叉「ゴバア！お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で受け止めるとは何様だ！」

十六夜「十六夜様だぜ。以後よろしくな和装ロリ」

とりあえず白夜叉が自己紹介を軽く済ませ、店内、それも白夜叉の私室へと案内された。

その後改まって自己紹介をした白夜叉に外門についても説明する。

耀「……………超巨大タマネギ？」

飛鳥「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

十六夜「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

士「タマネギでも合ってる気はするがな」

そんなボケをかます4人を置いておいて、水樹の話となり、十六夜が直接的に倒したことに白夜叉は驚愕していた。

自身が神格を与えた蛇神が神格を持っていない少年にやられたのだから驚いて当然である。

だが、4人も興味深々と白夜叉を見る。

目の前にいるのは、東側の『フロアマスター階層支配者』。

東側においては4桁以下にあるコミュニティに並ぶものがない『最強の主権者』というのだから、目を輝かせないわけがない。

士「『最強の主権者』っていうことは、アンタを倒せば俺達が最強のコミュニティとなるわけだ」

白夜叉「無論、そうなるのう」

十六夜「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」

白夜叉「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと？」

黒ウサギ「え？ちよ、ちよつと皆様方!？」

白夜叉「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には飢えている」

飛鳥「ノリがいいわね。そういうの好きよ」

白夜叉「ふふ、そうか。しかしその前にもう1人呼ぶべきじやろ。のう、コソ泥よ」

白夜叉がふすまを開けるとそこには1人の青年が立っていた。

黒ウサギ達が驚く中、士はその人物を知っていた。

士「海東。お前なんでここにいる」

大樹「やあ士。もちろん、僕のところにもこの手紙が来たからだよ。この世界はお宝の山みたいだし、とても興味があるんだよね」

十六夜「へえく。ずっと付き纏っていたのはアンタだったって訳か」

大樹「ご名答。君とこの小さい子には気づかれてしまっていたみたいだね」

十六夜「お前も世界の破壊者ってやつか？」

大樹「違うよ。僕は世界中のお宝を集めているだけさ。という訳で、このお宝は頂くよ？」

大樹はパツと取り出したのは、1枚のカードであった。

特になんの変哲もないシアン色をしたカードを見て、それが何なのか理解したのは白夜叉と黒ウサギだけであり、他の4人は？を頭に浮かべていた。

そして、理解している2人はまさに驚きを露わにしており、特に白夜叉からは怒りも感じられた。

黒ウサギ「それはギフトカード！」

白夜叉「何故おんしがそれを持っておる!？」

十六夜「お中元？」

飛鳥「お歳暮？」

耀「お年玉？」

士「お饞別だろ」

黒ウサギ「ち、違います！というかなんで皆さんそんなに息が合っているのです!？」

大樹「他にもたくさんお宝はあるみたいだし、これさえあれば僕と

しても助かるんだよ。というわけであと3つくれないかな？くれないなら奪うだけだけど」

白夜叉「……………よろしい。ならば1つだけ確認させてもらおうぞ」

途端に白夜叉の周りの空気が変わった。

大樹も士も他の者達もそれを感じとった。

白夜叉が着物の裾から「サウザンドアイズ」の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

白夜叉「おんしらが望むのは『挑戦』か——もしくは『決闘か』か？」

刹那、世界は和室から黄金色の穂波が揺れる草原、白い地平線を覗く丘、森林の湖畔へとかわり、そして、水平に太陽が廻る世界が辺り一面に広がっていた。

その場の全員が息を呑んだ、

空に浮かぶ星はただ1つだけ。世界を緩やかに水平に廻る、白い太陽のみ。

世界を1つ創り出したかのような奇跡の顕現を前に、改めて認識させられた。

東最強の『階層支配者』、白夜叉。

そんな彼らを見ながら、当の本人は不敵な笑みを浮かべていた。まるで、新しいおもちゃを見つけたかのように。

白夜叉「く、くく……して、他の童達も同じか？」

飛鳥「……ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

耀「右に同じ」

白夜叉「して、おんしらは？」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする2人を見て、満足そうに声を上げる白夜叉であるが、残った2人の返答はまだ返ってきていなかった。

だからこそ、少しばかりの期待を抱いていた。

彼らの導き出す答えを。

士「……そうだな。この世界を破壊しても良いなら決闘を受けてやる。だが、オマエにとつてはゲーム盤を無闇に減らされるのも嫌だろうから、今回は試練を受けてやるさ」

大樹「士と同意見だね。まあ怪盗だから盗むのが普通なんだけど、今回ばかりは見逃してあげるよ。それに、僕は巻き込まれただけだしね」

白夜叉「ほう。なら、このゲーム盤がどうなつても良いとわしが言え、おんしらは決闘を受けると？」

士「ああ。なんせ俺は、世界の破壊者だからな」

大樹「僕はお宝さえ手に入ればどうでもいいさ。でも、士が倒されるのは僕のお宝を横取りする事だからね。決闘なら士と2人で闘うよ？それでも勝てるかい？白き夜の魔王、白夜叉」

白夜叉「おんしらの覚悟、そして勇氣は認めてやる。今回はわしの氣が乗らんかったということ、で試練を受けさせてやる」

どこか楽しそうに答えた白夜叉に、うつすら冷や汗をかいていた2人は誰にも氣づかれぬように安堵していた。

まだ自身の力、ギフトを確認していないため、今の状態では確実に負けてしまうからだ。

だからこそ、今回は言葉通りに命拾いしたわけである。

大樹「感謝するよ。それと1つ提案があるんだけど、僕にあと3つギフトカードを賭けた試練を与えてくれないかい？もちろん、士もその試練を受けるよ」

士「おい海東。勝手に決めるな」

白夜叉「ふむ、よろしい。ならまずはおんしら5人のギフトゲームを行うとするかの」

やっと一息ついたところで全員（海東も含めて）黒ウサギにこつてりと叱られた。ついでに白夜叉にも飛び火し、当の本人はぬらりくりとしてている。

一頻りひとしきした時、彼方にある山脈から甲高い叫び声が聞こえた。獣とも、野鳥とも思えるその叫び声に逸早く反応したのは、耀だった。

耀「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

士「つまり、普通の世界には存在しない生き物ってわけか」

白夜叉「ふむ……あやつか。おんしら5人を試すには打って付けかもしれないの」

白夜叉が湖畔を挟んだ向こう岸にある山脈に、チョイチョイと手招きをすると、それは翼を広げて空を滑空し、風の如く5人の元に現れた。

体長5mはあろうかという巨軀に鷲のような翼と顔。鋭い爪とクチバシを持った上半身が鷲で下半身が獅子の獣。

御伽噺に出てくるその存在に、耀は驚愕と歓喜を隠せないでいた。

耀「グリフォン……嘘、本物!？」

白夜叉「フン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。力

だ” “知恵” “勇気”の全てを揃えた、ギフトゲームを代表する獣だ”

グリフォンは白夜叉に手招きをされると、彼女の元へと降り立ち、深く頭を下げて礼を示した。

大樹「グリフォンを従えるなんて、ほんと、元魔王といえど規格外だね」

白夜叉「そう褒めるでないわ。さて、肝心の試練だかの。おんしら5人とこのグリフォンで”力” “知恵” “勇気”の何れかを比べ合い、背に跨って湖畔を舞う事が出来ればクリア、ということにしようかの」

そう言って白夜叉は双女神の紋が入ったカードを取り出すと、虚空

から「主権者権限」にのみ許された輝く羊皮紙が現れる。

白夜又は白い指を奔らせて羊皮紙に記述する。

『ギフトゲーム名』 『鷲獅子の手綱』

・プレイヤー 一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

門矢 士

海東 大樹

・クリア条件 グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法 『力』 『知恵』 『勇氣』 の何れかでグリフォン

に認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなつた場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『サウザンドアイズ』印』

耀「私がやる」

読み終わるや否やピシ！と指先まで綺麗に拳手をしたのは耀だった。彼女の瞳はグリフォンを羨望の眼差しで見つめている。比較的大人しい彼女にしては珍しく熱い視線である。

三毛猫『お、お嬢……大丈夫か？なんや獅子の旦那より遥かに怖そうやしデカイけど』

耀「大丈夫、問題ない」

白夜又「ふむ。自身があるようだが、コレは結構な難物だぞ？失敗すれば大怪我では済まんが」

耀「大丈夫、問題ない」

真つ直ぐとグリフォンに向いている耀の瞳は、キラキラと光っており、まるで探し続けていた宝物を見つけた子供のようであった。隣の4人は呆れたように苦笑いを漏らす。

十六夜「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

飛鳥「気を付けてね、春日部さん」

士「まあお前なら大丈夫だ。楽しんでこい」

大樹「少しばかりシンパシーを感じたよ。まあ頑張りましたまえ」

耀「うん、頑張る」

耀はグリフォンに駆け寄り、会話を交わす。

そして耀はグリフォンに誇りと命を賭けた勝負を挑んだ。

もちろん、そのことに待ったを賭けたのは黒ウサギと友達第1号である飛鳥だった。

黒ウサギ「だ、駄目です！」

飛鳥「か、春日部さん!?本気なの!?!」

士「落ち着け2人も。アイツが言ったんだ。なら仲間ならアイツのことを信じろ」

飛鳥「で、でも!」

白夜叉「これはあの娘から切り出した試練だぞ」

十六夜「ああ、無粋な事はやめとけ」

黒ウサギ「そんな問題ではございません!!同士にこんな分の悪いゲームをさせるわけには——」

大樹「なら君は彼女の覚悟を貶めるのかい?」

黒ウサギ「そ、それは——」

耀「大丈夫だよ」

耀は振り向きながら黒ウサギと飛鳥に頷いた。その瞳には何の気負いもなく、むしろ勝算ありと思わせる表情である。

耀はその後、グリフォンに跨り、耀が背中に乗り、しっかりと手綱を握ったのを確認してから薄明の空へと飛び出した。

耀とグリフォンの姿は見る見るうちに小さくなっていった。

飛鳥と黒ウサギは未だ不安な表情でその姿を追っていた。

士「さてと、俺達もそろそろ始めるか」

大樹「そうだね。こっちはすでに準備は出来てるよ」

白夜叉「あやつのことは心配ではないのかの?」

士「俺達が出来るのは応援することだけだ。あとはアイツ次第だからな。それに俺はアイツの覚悟を信じてる。だからこそ俺達は俺達の為すことをするまでだ」

白夜叉「フフン、あい分かった。ではおんしらのギフトゲームはこれにするとうしようかの」

『ギフトゲーム名 “虚構の真実”』

・プレイヤー 一覧 門矢 士

海東 大樹

・クリア条件 虚構の中の真実を見分ける。

・クリア方法 本物の仲間を見つけ出す。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなつた場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下に、ギフトゲームを開催します。

“サウンドアイズ”印

黒ウサギ「こ、これは！勝利条件があまりにも抽象的過ぎます！」

白夜叉「いいや、これは正式なギフトゲームじゃぞ。何偽りなくな」

黒ウサギ「これで勝てだなんて、あまりにも横暴です！」

十六夜「へえ。なあお前らはこれの勝利条件を理解してんのか？」

士「ああ、大体な」

大樹「僕としては嘘も真実も大した意味は無いんだけどね」

飛鳥「春日部さんのこともあるし、正直言つて不安だわ」

士「心配するな。今お前達が悩むのは今夜の晩飯を何にするかだ」

黒ウサギ「いやいやいやいや、不安しかないのでございますヨ！」

白夜叉「まあよい。ではこちらも始めるとするか。ちなみに、お

んしらは何を賭ける？」

士「そうだな。じゃあ俺の全てだ」

大樹「僕は僕のお宝の1つかな」

白夜叉「承った。では始めるぞ」

士と大樹の周りには途端に霧が立ち込めた。

周囲に何があり、誰がいるのかが全く分からない状態である。

声も音も聞こえず、視界も白いため意味をなさない。

ただ分かることは、士からは大樹が、大樹からは士の姿が一応確認できるということだけである。

士「これが虚構か？」

大樹「そのようだね。仕方ない、しばらく相手の出方を伺うかな」
そう言つて大樹は腰を下ろした。

士はとりあえずカメラで写真を撮つたが、真つ白な写真が撮れただけである。ちよつとした違和感を感じ、改めて大樹の話聞きながら写真を撮る。

大樹「そう言えば士。夏海ちゃんが士のことを心配してたよ」

士「夏みかんならどうせ『どうせいつも通りふらつと帰ってきますよ』とか言つてそうだがな」

大樹「確かにね。でも今回はこの世界に来る方法が違つていたんだ。心配して当然だよ」

写真にはまた真つ白な風景しか映し出されていなかった。

その写真の意味を理解し、カメラに興味をなくす。

不気味さと静寂が支配するこの空間をどう破壊するかを士は考え、1つの答えにたどり着いた。

そして士が考えていた仮説は次の大樹の言葉で確信へと変わる。

大樹「それに君は早くナマコを食べられるようになった方がいい。ナマコぐらい食べれないと駄目じゃないかな？」

士「そうだな。さて、そろそろ終わらせるか」

そう言つて士はライドブツカーを取り出し、ガンモードに変え、自身のカメラを空中に投げ投げそれを撃つた。

そして流れるように大樹のことも躊躇わずに撃つた。

そこには一切の躊躇がなく、撃たれた大樹も驚きを隠せないでいた。

大樹「な、なんで……………」

士「海東は夏海のことを夏海ちゃんとは言わない。夏メロンって呼ぶんだよ、俺に真似てな。それに、ナマコを食べられないのは海東の方だ。食べたなら発狂するような奴がナマコぐらいなんて言わない。それに、このカメラも写真が歪んでないからな。この世界自体が虚構の世界であり、虚構の真実とはこの世界が偽物であると見抜けることがクリア条件なんだよ」

このゲームをクリアするヒント。

大樹の口調。カメラの写真。

その2つが、普段と如何に違うのかを見抜くことができるかがこのギフトゲームをクリアする鍵となっていた。

そして士はその2つ共を見抜き、虚構である存在、つまり仲間や大切な物に姿を変えた偽物を破壊することこそが攻略の条件と理解したのだ。

そして、最後の条件も。

偽大樹「だが、本物の仲間を見つけ出さないといけないはずだが？」
そう。このギフトゲームのクリア条件である『本物の仲間を見つけ出す』ということ。

これを一体どうやって見つけたのか。それが偽大樹は疑問に感じたのだ。

士「そんなもの決まってる。自分にとって最大の仲間は、自分自身だ。自分自身が最大の仲間であると気づける奴こそが、共に過ぐし、共に歩んできた奴らを仲間と信じられるんだよ」

士のその答えに、偽大樹は満足したように笑う。

彼は虚構の存在で、今回限りの紛い物の人形だが、それでも士の答えに嬉しいと感じた。

今までこのゲームをクリアした者達は、そんな士に似ていたから。

偽大樹「ふつ、正解だ。お見事、ゲームクリアだ。そして、君の仲間も無事クリアしたようだよ」

霧が晴れるとそこは元の場所であり、白夜叉は帰ってきた2人を見てニヤリと笑みを浮かべた。

白夜叉「よくぞクリアしたな。おんしらの勝ちじゃ」

士「そりやどうも」

大樹「あの程度、どうってことないね。というかもう少し本物に寄せる努力をした方がいいと思うよ?」

白夜叉「ふむ、このギフトゲームはあまりクリアする者が少ないのだがな、実に見事だ。それに、ちようどあやつも帰ってきたわ」

白夜叉が顔を向けた方を見ると、ちようど帰ってくる耀の姿が見え

た。

しかし、耀の勝利が確定した瞬間、耀は手綱を離してしまった。その様子に黒ウサギは思わず飛び出そうとしたが、それを十六夜が止める。

その耀は空へと舞い上がり、このままでは落ちるのは確かであった。

しかし、土は耀を信じていた。
だからこそ動かなかった。

結果、それは正しい判断であり、耀は湖畔に落ちる寸前で飛翔したのだ。十六夜は呆れたように笑い、黒ウサギと飛鳥は驚愕しつつも安堵していた。

十六夜「やつぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類だったんだな」

帰ってきた耀に十六夜は自身の仮説の答え合わせをする。

耀はその仮説に少し驚くが、耀にとって大事な部分を訂正する。

耀「……………違う。これは友達になった証。けど、いつから知ってたの？」

十六夜「ただの推測。お前、黒ウサギと出会った時に、風上に立たれたら分かる」とか言ってたろ。そんな芸当はただの人間には出来ない。だから春日部のギフトは他種とコミュニケーションを取るわけじゃなく、他種のギフトを何らかの形をしたで手に入れられたんじゃないか……………と推察したんだが、それだけじゃなさそうだな。あの速度で耐えられる生物は地球上にいないだろうし？」

興味津々な十六夜の視線をフィツと避け、耀はその傍に駆け寄ってきた三毛猫と会話しつつ頭を優しく撫でる。

パチパチと拍手を送る白夜又と、感嘆の眼差しで見つめるグリフォンとも会話を交わし、耀はギフトゲームを見事クリアした。

白夜又は耀を称賛しつつ、耀のギフトに対して興味を抱く。

耀は首から下げていた木彫りを白夜又と黒ウサギに見せ、その隣から十六夜、飛鳥、土、大輝も覗き込んだ。

土「材質は楠の神木。それにこの模様は……………お前の父親の知り合

いに生物学者がいたのか」

耀「うん。私のお母さんがそうだった」

十六夜「生物学者ってことは、やっぱりこの図形は系統樹を表しているのか白夜叉？」

白夜叉「おそろくの……。ならこの図形はこうで……。この円形が収束するのは……。いや、これは……。これは、凄い!! 本当に凄いぞ娘!! 本当に人造ならばおんしの父は神代の大天才だ! まさか人の手で独自の系統樹を完成させ、しかもギフトとして確立させてしまうとは! コレは真正銘『生命の目録』と称して過言ない名品だ!」

耀「系統樹って、生命の発祥と進化の系譜とかを示すアレ? でも母さんの作った系統樹の図はもっと樹の形をしていたと思うけど」

白夜叉「うむ、それはおんしの父が表現したいモノのセンスが成す業よ」

士「図形は系統樹を表し、円形は生命の流転、輪廻を表現しているものだな。輪廻を繰り返すことで生命の系譜が進化を遂げて進む円の中心は世界の中心を目指して進む様を表しているわけだ」

大樹「中心が空白なのは、これが未完成だからか、流転する世界の中心だからか、生命の完成が未だに視えないことを示しているのかは分からないけど、うん、いいお宝だ。是非とも欲しいところだね」

白夜叉「うぬぬ、凄い、凄いぞ。久しく想像力が刺激されとるぞ! 実にアーティスティックだ! おんしさえよければ私が買い取りたいぐらいなのだ!」

耀「ダメ」

耀は即答し木彫りの細工を取り上げる。

白夜叉はお気に入り玩具を取り上げられた子供のようにしよんぼりし、大樹は新しい獲物を狙うように微笑む。まあその大樹を士が頭にチョップをするのだが。

詳しいことはより上位の鑑定が必要ということになり、大樹が盗んだのも合わせ、正式に5人の手にギフトカードが渡され、大樹だけは白夜叉にギフトゲームクリアとして提示していたギフトカード3枚を受け取る。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム 〃カード・アソウン正体不明〃
ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム

〃威光〃

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム 〃ゲノム・ツリ生命の目録

〃 ノーフオーマー 〃

マゼンタのカードに門矢士・ギフトネーム

〃デイケイ世界の破壊者〃

〃 Ride the Wind 〃 〃 Jo

urney through the Decade 〃

シアンのカードに海東大樹・ギフトネーム

〃 デイTreasure Sniper 〃 〃エン帝王のベルト 〃

未来ノート 〃 〃ス時空停止 〃

それぞれの名とギフトが記されたカードを受け取る。

白夜叉「それはギフトカード。正式名称を『ラプラスの紙片』、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった『恩恵』の名称。本来はコミュニティの名と旗も記されるのだが、おんしらは『ノーネーム』だからの。少々味気ない絵になっているが、文句は黒ウサギに言ってくれ」

大樹「なら僕はすでにコミュニティに加入してるからこういう風に記されるわけだ」

大樹のギフトカードにはギフトの名称の他にデイケイドのベルトの様な紋が記されていた。

それを見た黒ウサギは驚きを隠せずにした。

白夜叉「ほう、すでにコミュニティに属しておったか」

大樹「まあね。それに、このコミュニティは士もよく知ってると思うよ?。」

士「何?」

大樹「僕らのコミュニティには後で案内してあげるよ。それよりも先に、その彼のギフトを確認した方がいいんじゃないかな?」

十六夜「へえ?この俺様のギフトがそんなに気になるか?」

大樹「敵戦力になりうるかもしれないからね」

大樹に促されるように白夜叉が十六夜のギフトカードを覗き込ん

だ。

そこには確かに「コード：アンソウン正体不明」の文字が刻まれており、十六夜がヤハハと笑い、白夜叉はあり得ないものを見たという顔をした。

白夜叉「……………いや、そんな馬鹿な。コード：アンソウン「正体不明」だと……………？いや、ありえん、全知である「ラプラスの紙片」がエラーを起こすはずなど」

十六夜「何にせよ、鑑定は出来なかったってことだろ？俺的にはこの方がありがたいさ」

白夜叉は十六夜を納得できないように怪訝な瞳で十六夜を睨む。

大樹が十六夜のギフトについて知っていたこともコミュニティに属していたことを隠していたことも懸念材料である。

それに門矢士という存在。

耀の「生命の目録」を一目見ただけで一瞬のうちに理解したことや、ギフトゲームでの躊躇いのなさ、そして時折見せるそれは、魔王のそれに近いものを白夜叉は感じていた。

そんな不安を抱えつつも、黒ウサギ含む「ノーネーム」の5人と1匹と大樹、そして白夜叉は暖簾の下げられた店前に移動し、大樹と士以外は一礼した。

耀「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

飛鳥「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するときは対等の条件で挑むんだもの」

十六夜「ああ。吐いた唾を飲み込むなんて、格好つかねえからな。

次は渾身の舞台上で挑むぜ」

士「楽しみに待っておけ。次は本気で破壊しに来てやる」

大樹「他にも色んなお宝があるみたいだし、また盗みに来るよ」

白夜叉「ふふ、よかろう。楽しみにしておくわ。……………ところで」

白夜叉は笑みから真剣な顔で黒ウサギ達を見る。

その真剣さは魔王のそれではなく、黒ウサギの友として、保護者的な立場としてのそれである。

白夜叉「今さらだが、1つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分達のコミュニティがどういう状況にあるのか、よく理解しているか？」

士「ああ、名前や旗の話だろう。そして、それを取り戻すために、魔王”と闘うこともな”

白夜叉「そうか。……では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな？」

飛鳥「そうよ。打倒魔王なんてカッコいいじゃない」

白夜叉「”カッコいい”で済む話ではないのだがの………全く、若さゆえのものなのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういふものかはコミュニティに帰ればわかるだろ。それでも魔王と戦うことを望むというなら止めんが………その娘2人。おんしらは確実に死ぬぞ”

予言するように断言する。

2人は何か言い返そうとしたが、魔王と同じく”主催者権限”を持つ白夜叉の助言は、物を言わさぬ威圧感があった。

仕方なく2人は言い返したい言葉を飲み込み、強がった口調で返す。

飛鳥「………ご忠告ありがと。肝に命じておくわ。次は貴方の本気のゲームをしに来るから楽しみに待っていなさい」

白夜叉「ふふ、望むところだ」

ただでは引かないその強さこそが、彼女がこの世界に呼ばれた要因の1つだろう。

飛鳥の答えに不敵な笑みを見せる白夜叉。

楽しそうに目を輝かせる十六夜、飛鳥、耀、士、大樹。

疲れきつたというような黒ウサギ。

そうして彼らは白夜叉と分かれ、今度は大樹の所属するコミュニティへと向かった。

第4話 「通りすがりのコミュニティ」

白夜叉と別れた一行は大樹の案内のもと大樹の所属するコミュニティへと向かっていた。

大樹曰く、士もよく知る「コミュニティ」ということに黒ウサギは落ち着いてなどいられなかった。

黒ウサギ「本当に、士さんは「ノーネーム」に入っていただけなんですよね？」

士「何度も同じことを聞くな。お前達のところにはちゃんと入ってやるからそう身構えるな」

黒ウサギ「黒ウサギは心配でならないのですヨ」

耀「黒ウサギ、ウザい」

飛鳥「同感ね。本人が否定しているのだから信じなさいよ」

十六夜「とりあえず着いてみないことには何とも言えねえよ。まあ心配すんな。こいつがいなくとも俺様がいる」

黒ウサギ「うう……」

黒ウサギはしょんぼりとうさ耳も項垂れていたが誰一人として気になど留めていなかった。

それよりも耀は土に聞きたいことがあった。

耀「そういえば士。何で私のこれを知ってたの？」

耀は首から下げた「生命の目録」を掲げながら士へと聞いた。

耀は父から貰ったギフトを士が詳しく解説していたことに疑問を抱いていた。

誰も知らないはずのギフトであるのに、士の考察は解説と称しても差し支えの無い程完璧なものであったからだ。

士「別に。ただ見たら分かった、それだけだ」

耀「そっか。士、凄いね」

士「そう褒めるな。それにお前もちゃんとグリフォンと絆を結べたんだ。お前も充分に凄いやつだよ」

耀「……………ありがと」

士は耀の頭を少しポンポンと撫でるように叩いた。

その行動に耀は土から少し顔を逸らした。

動物の友達はいても、人間の友達がいなかった耀にとって、素直に褒められたことは何よりも嬉しかったのだ。

頬が少し赤くなっただのは褒められて嬉しいから。そう自分に無意識に言い聞かせているとも知らずに。

大樹「さてと、そろそろ見えるかな。あれが僕らの『コミュニテイ』」

大樹が指差した先にあっただのは、土もよく知る場所だった。

箱庭の世界にも適応した姿をしているが、よく知っている看板には『光写真館』の文字があった。

大樹は写真館の前で立ち止まり、改めて挨拶をした。

大樹「コミュニテイ『光写真館』の海東大樹だ。ようこそ、僕達のコミュニテイへ」

*

中に入ると様々な写真が飾られていた。

土はよく見る光景であるが、箱庭の住人である黒ウサギは興味津々で写真を眺めていた。

様々な時代、様々な人々を写したそれは箱庭にはないまた違った良さが伝わってきた。

大樹に促されるまま奥に案内してもらおうと、そこには4人の人物がいた。

肩まで伸ばした髪にぱつちりとした大きな瞳を持つ女性。

真ん中で髪を分けており、土よりも歳が若く見える容姿の青年。

白髪の髪に帽子をかぶっており、眼鏡をかけた初老の男性。

土とどこことなく雰囲気似ている少女から女性へと変わる途中の

容姿の女性。

夏海「あ、大樹さんおかえりなさい……………つて土君?!ということはやっぱり土君もこの世界に来ていたんですね」

土「それはこっちのセリフだ。夏みかんにユウスケがここにいるのは分かるが、何で小夜までいるんだ?」

ユウスケ「土を驚かそうと思って呼んでいたんだよ。そしたら土、帰ってきた途端にまた行っちゃったからそのまま待っていてもらおうと思っていたんだよ」

栄次郎「そうしたらまたこの絵が変わってね。で、いつものようにこの世界に来たんだよ」

大樹「で、僕は彼らを見つけたから仲間に入つて、情報収集も兼ねて街を散策していたら、土を見つけたってわけさ」

小夜「もう待ちくたびれたよ。久しぶり、お兄ちゃん」

土「ああ。しかし、お前らもこの世界に来るとはな。さて、こっちも紹介するか。こいつが俺をここに呼んだ張本人である黒ウサギだ。詳しいことはこいつから聞いてくれ。あとは任せた」

黒ウサギ「急に話を振らないでいただけます!?!」

黒ウサギは戸惑いいつも自己紹介と十六夜達の紹介も行った。

夏海達も自己紹介を行い、お互いの話を始めた。

まず黒ウサギがここまで来た経緯について説明をしたが、問題児達とは違い、黒ウサギの説明を真剣に聞く夏海達に黒ウサギは嬉しすぎて感動を覚えていた。

黒ウサギ「これです。まさしくこれですヨ!これが本来のあり方なんですよ!それに比べて問題児の皆様ときたら……………」

夏海「心中お察しします」

ユウスケ「土、話は真剣に聞かなきゃ駄目だろ?」

土「大体わかるから必要ない」

夏海「土君」

その声に土は嫌な予感がした。

いつものアレをするときの声音である。

今ここでアレをされてはいい恥さらしだ。

だからこそ、夏海に静止の言葉をかけた。

士「……………まあ待て夏みかん。今はやめろ」

夏海「問答無用！黒ウサギさんに迷惑をかけた罰です！光家秘伝、笑いのツボ！」

夏海がそう言つて士の首辺りを押すと、途端に士が笑い始めた。その光景に“ノーネーム”の面々は面をくらわされる。

士「あはははははは、ははははははは！おい、夏海。またはははははは！ははははははは！ははははははは！ははははははは！」

耀「士、キモい」

飛鳥「凄い効力ね。笑いのツボつて案外物理的なのね」

十六夜「どうやってんのか興味あんな。俺にもやってくれ」

夏海「え？良いんですか？」

十六夜「おう。天下の十六夜様を笑わせてみせろ。笑わせれたら何でも言うことを1回だけ聞いてやる」

夏海「なら失礼して。光家秘伝、笑いのツボ！」

夏海がまた笑いのツボを押すと、十六夜は少し衝撃を受けてから笑い始めた。

“正体不明”を持つ男でも、笑いのツボはきくようだ。

十六夜「ははははははは！すげえ、ははははははは！本当に笑いが止まらねえ！ははははははは！」

飛鳥「後で私にも教えていただけるかしら？十六夜君にも有効みたいだし」

耀「私にも教えてほしい」

夏海「わかりました。後でお教えしますね」

小夜「夏海ちゃん、私にも教えてね」

ユウスケ「とりあえず話を進めない？」

黒ウサギ「そうでございますね」

笑い続けてる2人を余所に、栄次郎のいれた紅茶を飲みつつ箱庭の世界についての話や士が“ノーネーム”に所属するという話などをした。

黒ウサギとしては、ここが1番の鬼門だった。

どういう経緯で箱庭に来たのか黒ウサギはまだわかっていないが、それでも彼らが士の仲間であることは確かであるようだ。

だからこそ、士が彼らのもとに戻るという選択肢があり、彼らも士を自身のコミュニティに入りたいというのは至極当たり前のことであつた。

夏海「なるほど。お話はわかりました」

ユウスケ「士がそう言ったんだつたらそれでいいんじゃない？」

黒ウサギ「よろしいのですか？」

すんなりと了承する2人に呆氣に取られる黒ウサギ。思わず自慢の大きな目を3回ほどパチクリと瞬きをした。

それほどまでに衝撃的であつたのだ。

ユウスケ「士はあんなだから勘違いされやすいけど、でも困つて人を見掛けたら手を差し伸ばさないと気が済まないんだよ。あんな達の所が困つてるっていうなら士は手を差し伸べるし、俺達はそんな士を応援してる。士が疲れた時に帰ってくるべき場所を守るっていうのが、俺達の役割だし、ね」

士を信じ、士もまた彼らを信じている。

そんな彼らだからこそ、今もこうやって繋がりが切れずに居続けていられるのだろう。

そんなかけがえのない仲間である彼らのあり方に、自分のコミュニケーションのことで精一杯だつた黒ウサギは負い目を感じてしまっていた。

また、彼らから士を半ば強引に奪い取つたようなものなのに、黒ウサギを責めようとする彼らに在りし日の自分達を重ねていた。

人数も容姿も何もかも違うのに、その心のあり方は自信が望んでいたそれそのものだつたのだから。

ちようど士も笑いがおさまり戻ってきた。

士「そういうわけだ。しばらくはこいつらの所にいることにした」
夏海「そうですか、まあ今回は士君だけ行くわけでも無いみたいですし、いつでも戻ってきてくださいね」

士「ああ」

ユウスケ「というか俺達はその士の所属する“ノーネーム”の仲

間になればいいんじゃないのか？」

黒ウサギ「……………」と、言いますと？」

ユウスケ「ん？別に俺達はこの世界に来たばかりだし、正直わからないことだらけだからさ、色々教えてもらいたいんだよね。それに、聞けばあんた達の所って子供達ばかりって言うんだったら俺達もいた方が色々と手伝えると思うからさ」

ユウスケの提案に黒ウサギは哑然としていた。

先程、彼らの大切な仲間を奪うと言った黒ウサギに仲間になろうと持ちかけたのだ。

普通ではあり得ない話である。

仲間を奪われたのなら報復することはあっても協力するなどそんな選択肢は論外であった。

飛鳥「あら、それは嬉しい提案だわ。私達は情報の提供、そちらは人力の提供。まさしくwin-winの関係というやつね」

黒ウサギ「ほ、本当によろしいのですか!?その申し出は確かにありますがたいのですが、先程私は士さんを、簡単に言えば奪うと言ったのですヨ？」

ユウスケ「別にそんなこと気にしないって。あんた達が士を使って世界を滅ぼすとか言うならあれだけど、仲間を取り戻すために力を借りるっていうことだし」

飛鳥「お人好しという言葉を体現したような人間ね」

ユウスケ「よく言われるよ」

黒ウサギ「ほ、本当に、よろしいのでございますね？」

夏海「はい、こちらこそよろしく願います」

あまりのことに、黒ウサギは思わず飛び跳ねながら喜んだ。

召喚した4人だけでも喜ばしいことであつたのに、士の仲間である彼らも仲間となってくれることに嬉しさなどの諸々の感情が溢れてしまったのだ。

気負っていたプレッシャーから解放され、黒ウサギは本当のウサギのように飛び跳ねまわった。

飛鳥「じゃあこのコミュニティは私達の傘下に入るってことで良い

のよね？」

黒ウサギ「あ」

仲間になるとは言ったが、どんな理由であれ、名と旗を持ったコミュニティが「ノーネーム」の傘下に入るなど考えられない。

それは得難い屈辱であり、自らも「名無し」と名乗ることとなるのだから、通常では誰もが断ることだ。

栄次郎「この店があつて、皆んなが無事であれば私はそれでいいですよ」

小夜「私もお兄ちゃんがいればそれでいい」

夏海「士君の能力でこのお店ごと持って行けばいいんじゃないですか？」

大樹「いや。それよりも傘下であることは周りにはバレないようにして、この店は写真館兼カフェとして行った方が収入源ともなるしいんじゃないかな？」

ユウスケ「確かにそれ良いと思う！」

飛鳥「なら夏海さんと小夜さんと栄次郎さんはここでお店を運営してもらつて、男手は私達のところでしたらと働いてもらいましよう」

十六夜「とりあえずはそういう方針で行くか。まあまだ白夜又の言つてた「ノーネーム」の現状を見てないからな。見てから詳しく決めて行こうぜ」

黒ウサギが考えごとをしている間に話はサクサクと進み、とりあえずは栄次郎以外の全員で「ノーネーム」に行こうという話となった。

黒ウサギは状況の理解が追いつかず、彼らの人としての器の大きさにただただ感心するしかできなかった。

十六夜「それじゃあようやく俺達の拠点に向かうとするか！」

*

“光写真館”を出た後、一行は“ノーネーム”の居住区画の門前まで歩いた。

門には旗が掲げてあった名残のようなものが見え、黒ウサギが少し忠告をし、門を開けた。

門の向こうからは乾ききった風が吹き抜け、砂塵から顔を庇うようにしながら門の向こうを見た。

そこにあつたのは、視界一面に広がる廃墟であつた。

町並みに刻まれた傷跡を見た飛鳥、耀、夏海、ユウスケ、小夜は息を呑み、十六夜、士、大樹はそれぞれ状況把握を始めた。

十六夜「……………おい、黒ウサギ。魔王のギフトゲームがあつたのは——今から何百年前の話だ？」

黒ウサギ「僅か3年前でございます」

士「この風化しきつた光景がたつたの3年前か」

大樹「確かに、魔王を名乗ることだけはあつたね」

あまりにも悲惨な光景。

誰も思わないだろう。

ここにかつて人が存在していたなど。

それが、たつたの3年前だということ。

ただただ悲惨なこの光景は、それだけで魔王という存在の強大さを表していた。

箱庭における天災。

人々の日常を、平和を、明日を奪い去るその所業はまさしく“魔王”である。

十六夜「……………断言するぜ。どんな力がぶつかつても、こんな壊れ方はない。この木造の崩れ方なんて、膨大な時間をかけて自然崩壊したようにしか思えない」

飛鳥達も改めて周りを見渡す。

ベランダのテーブルにティーセットがそのまま出されていること。整備されなくなった人家であるのに獣が寄ってこないという異常さ。

戦いの跡すら見えない光景は、まさしく蹂躪されたのであろう。

一方的な、反抗すら許さないそれは、人の心を絶望させるには充分であった。

黒ウサギ「……………魔王は力を持つ人間が現れると遊び心でゲームを挑み、2度と逆らえないように屈服させます。そして、彼らとの戦いはそれほどまでに未知であったということを示しております。彼らが土地を取り上げなかったのは力の誇示と、おそらく一種の見せしめでしょう。僅かに残った仲間達も心を折られ……………コミュニティから、箱庭から去っていきました」

その瞳には、あまりにも1人で背負うには重すぎるほどの悲哀の感情を映し出していた。

笑い合い、いつもと同じように平和であると信じ、明日も訪れると信じていたあの日々は、突如奪われてしまった。

前を向くことすら許されなかった。

前を向きたくても、顔が、身体が、心が拒んだ。

それ程までに絶望してしまった。

だからこそ今は、感情を殺し、その街並みを進む。

新しい、仲間きぼうを連れて。

2度と、このような悲劇を繰り返さないためにも。

十六夜「魔王——か。ハッ、いいぜいいぜいなオイ。想像以上に面白そうじゃねえか……………！」

第5話 「魔王」を倒す者達

「ノーネーム」・居住区画、水門前。

居住区よりも先に十六夜が手に入れた水樹と呼ばれる苗を貯水池に設置するためである。

その貯水池にはすでにジンと子供達が貯水池の掃除を行っていた。

ジン「あ、みなさん！水路と貯水池の準備は調っています！」

黒ウサギ「ご苦労様ですジン坊ちゃん♪皆も掃除を手伝っていますか？」

子供「黒ウサのねーちゃんお帰り！」

子供「眠たいけどお掃除手伝ったよー」

子供「ねえねえ、新しい人達って誰!？」

子供「強いのか!?カッコいい!？」

黒ウサギ「YES!とても強くて可愛い人達ですよ!皆に紹介するから一列に並んでくださいね」

黒ウサギの掛け声と指を鳴らす音で子供達は一糸乱れぬ動きで横1列に並んだ。

その数は20人前後と思われる。

普通の人間の子供もいれば、何人かは猫耳や狐耳の少年少女もいた。

十六夜（マジでガキばっかだな。半分は人間以外のガキか?）

飛鳥（じ、実際に目の当たりにすると想像以上に多いわ。これで6分の1ですって?）

耀（…………。私、子供嫌いなのに大丈夫かなあ）

士（これで今まで運営してきたことは、それ程だけ黒ウサギが身を粉にして働いてきたってわけか）

大樹（正直子供は考えが読めないからね。出来るだけお宝は彼らの目のつかない所ですすとしてしようかな）

それぞれが色々と思うこともあったのだが、夏海とユウスケは子供達を見てやる気を出しており、小夜は特に気には止めていなかった。

小夜自身、子供は強くあるべきということが実体験を通して考えているため、このような状況でも「今自分にできること」を子供達自身に考えさせ、成長させていくことが大事であると感じている。

それは黒ウサギも似たように考えているようで、子供達に新メンバーを紹介した後、組織としてのあり方やギフトゲームに参加できないものの達の役割を再認識させていた。

黒ウサギ「コミュニティはプレイヤー達がギフトゲームに参加し、彼らのもたらず恩恵で初めて生活が成り立つのでございます。これは箱庭の世界で生きていく以上、避ける事が出来ない掟。子供のうちから甘やかせばこの子供達の将来の為になりません」

これ以上ない厳しい声音であり、今日1日の中で1番真剣な表情と声であった。

名と旗と仲間を奪われた3年前から、たった1人でコミュニティを支えていた黒ウサギのようなものしか知らない厳しさである。

この黒ウサギの真剣さに、改めてここにいるもの達は理解した。

自分達に課せられた責任は、それは自分達が考えるよりも重いものなのだ。

黒ウサギ「ここにいるのは子供達の年長組です。ゲームには出られないものの、見ての通り獣のギフトを持っている子もおりますから、何か用事を言いつける時はこの子供達を使ってください。みんなも、それでいいですね？」

子供達「「「よろしくお願いします」」」

20人前後の子供の元気な声は、異世界から召喚された彼らを圧倒するには充分であった。

十六夜「ハハ、元気がいいじゃねえか」

飛鳥「そ、そうね」

耀「……………本当にやっていけるかな、私」

士「なら早速俺のことは士様と呼べ。後は1号2号でもABCでも好きなように呼ぶといい」

夏海「なんでそうなるんですか！」

ユウスケ「こちらこそみんな、よろしくね！」

小夜「……………よろしく」

大樹「あまり子供は得意じゃないんだけど、仕方ないか」

黒ウサギ「さて、自己紹介も終わりましたし！それでは水樹を植えましょう！」

「そう言つて水樹を植えるための準備であつたり、過去には龍の瞳というものを使って貯水池を利用してしたことや、水汲みの現状など話として上がり、改めてこのコミュニティの現状が酷いことを理解出来た。」

そして『御チビ』と呼ばれたジンが十六夜に水仙卵華についての説明をした。

ジン「噴水広場にも確かあつたはずですよ」

十六夜「ああ、あの卵っぽい蕾のことか？そんな高級品なら1個ぐらいとつとけばよかつたな」

ジン「な、何を言ひ出すのですか！水仙卵華は南区画や北区画でもギフトゲームのチップとしても使われるものですから、採つてしまえば犯罪です！」

大樹「なら言ひ出さなければいいわけだね」

2人が大樹の方を見ると、その手には先ほど話が上がった水仙卵華が綺麗に咲いていた。

ジンは開いた口が塞がらないと体现したような顔で、十六夜は大樹とハイタッチを交わしていた。

ジン「な、なんてこと……………」

大樹「別に、僕からすればお宝なんだから、盗むのは当然のことさ。別にコミュニティの為でも士達の為でもない。僕は僕の為にこれを採つてきたに過ぎないんだよ」

十六夜「同感だな。俺も水樹を貰つてきたのは気が向いたからだ。コミュニティの為、なんてつもりはさらさらない。それにだ。俺は俺が認めない限りは“リーダー”なんて呼ばねえぜ？」

彼らの言葉にジンは気づかされた。口では笑いつつも、その眼は全

く笑っていないことに。

十六夜「黒ウサギにも言ったが、召喚された分の義理は返してやる。箱庭の世界は退屈せずに済みそうだからな。だがもし、義理を果たした時にコミュニティがつまらねえことになっていたら……俺は躊躇いなくコミュニティを抜ける。いいな？」

大樹「僕は士について来ただけだ。だから君達がどうなろうと知ったことではないよ。それに僕は泥棒だ。まるで宝の山のようなこの世界で僕から自由を奪うというのなら、僕はすぐにコミュニティを抜ける。それこそ、ここにいる意味が一切ないからね」

十六夜は「つまらないこと」

大樹は「自由を奪うこと」

彼らにとつては何よりも重要なことであり、この箱庭の世界はそれだけ彼らには魅力的なのだ。

だからこそジンも覚悟を示さなければならない。

彼らという強力な戦力を手放さない為に。

このコミュニティの「リーダー」としてあるために。

ジン「僕らは「打倒魔王」を掲げたコミュニティです。何時までも黒ウサギに頼るつもりは一切ありません。お2人にも、このコミュニティが「面白い」と思わせてみせます。次のギフトゲームで……それを証明します」

十六夜「そうかい。期待してるぜ御チビ様」

大樹「楽しみにしてるよ。少年くん」

大樹は手に持った水仙卵華をギフトカードにしまい、士達の方へと戻って行った。

ジンは静かに覚悟を決め、その覚悟を見届けんとする2人の最強と怪盗は誰にも気づかれずに、楽しそうに笑うのであった。

*

本拠となる屋敷につき、まるでホテルのような巨大さに全員が感嘆した。

中に入り、それぞれが己の部屋を決め、まずは『風呂に入りたい』という全員の要望により、黒ウサギは湯殿の準備を進める。

しばらく使われていなかった大浴場に黒ウサギは顔を真っ青になり、すぐさま掃除に取り掛かった。

それぞれは部屋を1通り物色し、来客用の貴賓室で集まっていた。待つのも暇であったため、士のカメラで写真を撮ったり、今までこの箱庭の世界で撮ってきた写真などをみんなで見ていた。

飛鳥「これは最初の写真ね。ほんと、何でこんなに歪んでるのかしら？」

耀「世界が俺に撮られたがっていいない、だつてさ」

夏海「似てます似てます！士君に似てます！」

十六夜「これは白夜叉の所のやつか」

大樹「こっちは街の景色だね」

ユウスケ「これはさつき通ってきたところのやつだな。どれも相変わらず歪んでるけど」

士「仕方ないだろ」

小夜「でもお兄ちゃんらしいよ」

黒ウサギ「み、みなさくん。湯殿の準備が出来ました！女性陣からお入りください！」

皆で写真を見ながら話していると湯殿の掃除が終わったであろう黒ウサギに声をかけられ、女性陣は先に湯殿に入りに入った。

女性陣の姿が見えなくなれば、十六夜と士、ユウスケは外へと向かった。十六夜と士は何故外に行くのかは目的があったが、ユウスケは士について行くという事だけであるが。

大樹は屋敷やその周辺を見て回ると言い、1人ふらつと歩いていった。曰く「隠されたお宝の匂いがする」ということらしい。

*

大浴場

体を洗い流し、湯に浸かり、ようやく人心地ついたように寛いだ。大浴場の天井は箱庭の天幕と同じようで、天井が透けて満点の星空が輝きを放つ夜空が見えた。

その星空を見つつも5人は今日1日を振り返った。

黒ウサギ「本当に長い1日でした。まさか新しい同士を呼ぶのがこんなに大変とは、想像もしていませんでしたからね」

飛鳥「それは私達に対する当て付けかしら？」

黒ウサギ「め、滅相もございません！」

夏海「本当に、土君と大樹さんがご迷惑をお掛けしたようで」

黒ウサギ「いえいえ。土さんも大樹さんも白夜叉様に臆することなく対峙した姿に頼もしさを感じました。皆様なら、きっと数々のギフトゲームをこなしてくださることだと黒ウサギは期待しているのですよ♪」

夏海「そうですね。私も少しくらいならお役に立てると思います。その時は遠慮なく言ってくださいね」

夏海はそう言って自身のギフトカードを見せた。

オレンジのカードに光夏海・ギフトネーム

“キバーラ” “破壊者殺し”と書かれていた。

この2つに3人とも首を傾げた。

飛鳥「キバーラっていうのは何かしら？」

夏海「まあ私に力を貸してくれる存在ですね。ただ出てくると少しうるさいので今はしまってますが」

耀「……………破壊者殺しって、土のこと？」

そう言われた時、夏海の顔は少し曇った。

言うべきか、言わざるべきか。

しかし悩んだとしても仕方なく、彼女達は仲間であると思い、少しだけ話すことにした。

士が世界の破壊者と呼ばれてること。

そしてその士を過去に1度、殺したこと。

黒ウサギ「……………それは、本当なのですか？」

夏海「はい。私は士君を1度殺しました。多くの犠牲を生み、仲間だったユウスケも殺した士君を止めるために」

飛鳥「なら何故彼らは生きているの？それこそあり得ないことじゃないかしら？」

夏海「それは……………すみません、今はこれだけで」

飛鳥「そうね。少し深入りし過ぎたわ。でも、貴方達を見ていると、とても仲がよくて羨ましいわ」

夏海「まあたくさんの世界を巡ってきましたからね」

黒ウサギ「小夜さんは、士さんの妹さんなんですよね？」

小夜「うん、そうだよ。私は特に力なんて無いけど、それでもみんなの力にはなりたいと思ってる」

黒ウサギ「YES！いつでも人手は大歓迎です♪」

小夜「ありがとう」

*

その頃十六夜、士、ユウスケは――

十六夜「おーい、そろそろ出てきたらどうだ？」

十六夜が屋敷の外に出て声をかけた。

返ってくる言葉はなく、あたりはただ静寂に包まれている。

士「ここを襲うのか？襲わないのか？襲うというのなら相手をしてやる」

ユウスケ「十六夜も土もさつきから何を言ってるんだ？」

ユウスケは未だに理解出来ておらず、ただその場には風が吹き抜けるだけであった。

十六夜は痺れを切らしたのか、呆れたようにため息をつき、石をいくつか拾い、その石を木陰へと軽く投石した。

ズドガアン！

十六夜の軽いフォームからは考えられないデタラメな爆発音が辺り一帯の木々を吹き飛ばし、同時に現れた人影が空中高く蹴散らせ、別館へと振動を与える。

別館からは慌てて出てきたジンが士達に問う。

ジン「ど、どうしたんですか!？」

士「侵入者だ。おそらく、フオレス・ガロ」のやつらだ」

十六夜により蹴散らされた者達は空中から落ち、意識ある者はかろうじて立ち上がり、十六夜達を見つめた。

侵入者「な、なんとというデタラメな力………！蛇神を倒したという噂は本当だったのか………!」

侵入者「ああ………これならガルドの奴とのゲームに勝てるかもしれない………!」

侵入者は士達の予想通り、フオレス・ガロ」の者達だった。

犬の耳を持つ者や長い体毛と爪を持つ者、爬虫類のような瞳を持つ者など半端に変幻をした獣人という言葉が適切な者達である。

彼らの目的には士と十六夜はわかっていた。

そして、彼らからその言葉は発せられた。

侵入者「恥を忍んで頼む！我々の………いえ、魔王の傘下であるコミュニティ「フオレス・ガロ」を、完膚なきまでに叩き潰してはいただけないでしょうか!!」

十六夜「嫌だね」

士「断る」

ユウスケ「いいですよ……………って何で2人とも断ってんだよ!？」
ユウスケは助ける気満々であったが、他の2人はあまりにも早い返事、それも断りの返事であることにジンも驚いた。

十六夜「大方ガルドってやつに命令されてガキを拉致しに来たってところだろ」

士「ガルドに人質を取られているから逆らえないものな」

ユウスケ「そこまで分かっているんなら頼みを聞いてやろうよ!」

十六夜「何でだよ。それに、その人質はもうこの世にいねえから。はいこの話題終了」

侵入者「……………なっ」

ジン「十六夜さん!!」

士「隠しても明日にはどうせわかることだ。それに、こいつらは人質を取られているという理由でガルドの命令に従って、新しい人質を取ってきた奴らだぞ?」

ジン「はっ!」

ジンは振り返る。

そこには顔を俯ける侵入者達。

命令と言えど、人質を攫ってきて、新たな被害者と加害者を生み出したのは他でも無い彼らなのだ。

そして、人質が本当に死んでいるという言葉を改めて告げられ、侵入者達は膝から崩れ落ちた。

その様子に、ユウスケとジンは悲痛な表情を浮かべ、士はすでに興味をなくしたかのように別館にもたれかかる。

ただ、十六夜は彼らの姿を見て、それはそれは新しい悪戯でも閃いたかのような表情をした。

十六夜は侵入者達に近づき言葉をかける。

「フオレス・ガロ」とガルドが憎いか?と。

侵入者達は答える。

ああ、憎い!と。

十六夜は尋ねる。

お前達では奴を叩き潰すだけの力がないのか?と。

侵入者達は答える。

仮に叩き潰せたとしても、背後にいる魔王に目をつけられては……と。

十六夜は目を光らせる。

彼らは、使えらる。

十六夜「その『魔王』を倒す為のコミュニティがあるとしたら？」
全員が十六夜に顔を向ける。

十六夜はジンを抱き寄せ、こう告げた。

十六夜「このジン坊ちゃんが、魔王を倒すためのコミュニティを作ると言っているんだ」

ジン「なっ!？」

士は理解した。

ジンの考えではコミュニティを守る事と、旗印と名を奪った魔王だけを倒すつもりであったが、十六夜は全ての魔王を対象に活動するコミュニティであると考えている。

おそらく、前例はない。

だが、誰もが夢見た事であろう。

箱庭にて、修羅神仏悪鬼羅刹が蔓延るこの世界において、魔王という天災を倒す、英雄の姿を。

そして、英雄という光を彼らは待ち続けていた。

誰もなすことが出来ない。

魔王には勝てない。

光は、暗過ぎる闇の中では輝けない、と。

これは開戦の狼煙。

宣言することにより、『打倒魔王』を掲げたというコミュニティはすぐに箱庭中に広がる。

そして、魔王と魔王を倒したいという同士が集まるだろう。

『ノーネーム』であるこのコミュニティの名を売るにはこれ以上とない戦略。

十六夜はジンを馬鹿力で黙らせ、侵入者達に言葉を告げ、侵入者達は希望を抱き走り去った。

ジンはあまりのことに、膝を折り、茫然自失となっていた。
ユウスケは哀れに思い、ただ肩に手を置いた。

*

本拠の図書館にて、十六夜から改めてジンは本当の理由を聞いた。
ユウスケも納得し、十六夜の言葉に理解を示していた。

十六夜の作戦は筋が通っており、成り行きでリーダーとなったジンとしては彼の作戦に最初は怒りを覚えたものの、今では十六夜と真剣に話を詰めていた。

さらにジンは十六夜に“サウザンドアイズ”のギフトゲームに十六夜1人で参加することを提案した。

それは十六夜という戦力の把握と元・魔王であるかつての仲間を取り戻すためである。

十六夜もそれには了承し、明日に備えて休むためそれぞれが部屋に戻った。

士とユウスケは近々別のギフトゲームにも参加してもらおう予定であるため、今回は何かあればすぐに動けるサポート役に回ることになった。

こうして、異世界から来た者達による新たな伝説が幕を開けた。

第6話 「狂想曲#狂える虎と吸血鬼」

“フォレス・ガロ”とのギフトゲーム当日。

飛鳥、耀、ジンの3人はやる気に満ちていた。

特にジンは昨夜、十六夜からゲームに負ければコミュニティを抜けると言われているため、その気合の入り方は違っている。

また、飛鳥は外道であるガルドという存在を徹底的に叩き潰さなければならぬと感じており、耀も友達第1号である飛鳥と共にゲームに参加出来ることに喜びとガルドに対して嫌悪感を抱いていたこともあり2人も気合は充分である。

“フォレス・ガロ”へ向かう道中、昨日のカフェ店員から、ギフトゲームの会場がギフトゲーム専用の会場ではなく居住区で行うこと。そしてガルドがコミュニティの者達を追い出し、1人で待っているということに皆警戒心を抱いた。

今回参加するのは飛鳥、耀、ジンの3人だが、黒ウサギ、十六夜、土、ユウスケは見届け人として同行している。

夏海と小夜は“光写真館”に戻り、早速営業の手伝いを。大樹は朝にはその姿はなかったため、またお宝を探しに行ったのだろうと思っ

た。
“フォレス・ガロ”の居住区に着くと全員が一瞬、目を疑った。というのも、居住区が森のように豹変しており、樹枝はまるで生き物のように脈を打ち、肌を通して胎児の様なものを感じさせた。

門柱に貼られた羊皮紙で書かれている“ギアスロール契約書類”を飛鳥が見つけた。

『ギフトゲーム名 “ハンティング”』

・プレイヤー 一覧 久遠 飛鳥

春日部 耀

ジン||ラツセル

・クリア条件 ホストの本拠内に潜むガルド||ガスパーの討伐。

・クリア方法 ホスト側が指定した特定の武具でのみ討伐可能。指定武具以外は“ギアス契約”によってガルド||ガスパーを傷つける事は不

可能。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・指定武具 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、〃ノーネーム〃はギフトゲームに参加します。

〃フォレス・ガロ〃印

黒ウサギ「ガルドの身をクリア条件に……………指定武具で打倒!?」
ジン「こ、これはまずいです!」

飛鳥「このゲームはそんなに危険なの?」

士「いや、ゲームそのものは単純なようだ。だが、ルールをよく見ろ」

耀「……………契約〃によって、ガルドを傷つけることは不可能?」
十六夜「恩恵ギフトと契約はどうか違うんだ?」

黒ウサギ「恩恵ギフトが修羅神仏や悪魔や精霊から与えられた才能に対して、契約ギアスはルールそのものであり、これにはいかなる存在であつても介入ができないのです。今回ガルドが自身の命をクリア条件に組み込んだことで、飛鳥さんと耀さんのギフトはガルドには無効化されてしまうのです!」

今回、ギフトゲームに参加するのは全員が初。

そのためルールを決めるのが、主権者ホストである以上、白紙のゲームを承諾するということが如何に愚かな事か分かっていなかったのだ。

3人とも理解し、理解したからこそ苦虫を噛み潰したような表情をした。

士「一応、指定武具〃というのがあった。これをまずは見つけることが先決だな」

黒ウサギ「YES!つまり最低でも何かしらのヒントがあるはずですよ!もしヒントが提示されなければルール違反により、〃フォレス・ガロ〃の敗北は決定!この黒ウサギがいる限り、反則はさせませんとも!」

黒ウサギの言葉を聞いてもなお飛鳥は不安そうな表情を浮かべる。

自身のギフトが戦闘向きでは無いことを己が1番理解しているからであろう。

はつきり言ってしまうえば、まともに戦闘できるのは耀だけであり、今回のことも自身の慢心が招いたと言っても過言ではない。

そんな飛鳥に気づいた耀は静かだが、やる気に満ちた声をかけた。

耀「大丈夫。黒ウサギもこう言ってるし、私も頑張る」

士「そんなに気を張るな。お前達なら出来るさ」

ユウスケ「俺も士も皆んなも応援してるし、大丈夫！」

飛鳥「…………ええ、そうね。むしろあの外道のプライドを粉碎するためには、コレぐらいのハンデが必要かもしれないわ」

皆の言葉に飛鳥も奮起する。

これは売った喧嘩で買われた喧嘩。勝機があるのだから諦めてはいけないのだ。

先程まで見せた不安そうな表情はなくなり、その瞳に闘志を燃やした、1人の戦士がいた。

十六夜とジンは昨夜の事を話し、こちらでも覚悟が出来ていた。

3人の参加者はそれぞれの顔を見合わせてから、門を開けて突入した。

ギフトゲームの開始である。

*

ゲームが始まり、退路は生い茂る森が門を絡めるように塞いだ。

光を遮るほどの密度の木々により、人が住めるとは到底思えない場所となっていた。

街路と思われるレンガの並びは下から迫り上げる巨大な根によつ

てバラバラに分かれ、人が通れるような道ではなくなっている。

しかし、耀が匂いにより辺りにはいないことを伝える。その言葉に少しだが2人はホッとした。

3人はとりあえず森を散策した。

たった一晩でこれほど奇怪な森を作り上げたガルドには油断しておらず、警戒を強めていた。

ヒントらしいヒントは見当たらず、耀によりガルドが本拠の中にいることは確認出来ているため、一先ず本拠に向かうことにした。

本拠も似たようなもので、外装は剥がれ、扉は無残に取り払われ、窓ガラスは砕かれている。

内装も贅を尽くして作らせた家具は打ち倒されて散在している。

飛鳥「ねえ、この奇妙な森の舞台は……本当に彼が作ったものなの？」

ジン「分かりません。『主催者』側の人間はガルドだけに縛られています。舞台を作るのは代理を頼めますから」

飛鳥「代理を頼むにしても、罫の1つも無かったわよ？」

耀「森は虎のテリトリー。有利な舞台を用意したのは奇襲のため……でもなかった。それが理由なら本拠に隠れる意味がない。うん、そもそも本拠を破壊する必要なんてなかった」

3人とも疑問であった。

この豪華な本拠はガルドの自己顕示の為に作られたはずで、彼の野望の象徴とも言えるものなのに、その本拠は無残な姿となっている。

これにより、3人は今までと全く違う緊張感の中で散策を開始する。

今まで以上に慎重に行動し、1階を隅々まで調べるが、ヒントらしい物も武具らしい物も見当たらなかった。

よって、2階に行くのだが、飛鳥はジンに1階への待機を命じた。

ジンはその事に不満ではあったが、渋々階下にて待つ事にした。

飛鳥と耀の2人は階段を物音立てずにゆっくり進む。

そして、とある部屋に意を決して飛び込むと、そこには

.....

「ガルド」……………G E E E E Y
A A A A a a a a!!」

言葉を失くした虎の怪物が、白銀の十字剣を背に守って立ち塞がった。

*

門前で待つていた黒ウサギ達の元にも、獣の咆哮が届いた。

黒ウサギ「い、今の凶暴な叫びは……………?」

十六夜「ああ、間違いない。虎のギフトを使った春日部だ」

黒ウサギ「あ、なるほど。ってそんなわけないでしょう!? 幾ら何でも今のは失礼でございますよ!」

ユウスケ「あ、分かった! ならジン君だ!」

黒ウサギ「確かにそうかも……………って、それも違うに決まっているでしょうが!!!」

黒ウサギはどこからか取り出したハリセンで2人の頭にツツコミを入れる。

十六夜は気にすることなく笑い、楽しそうにしていた。

黒ウサギは十六夜にツツコミを入れつつ、ウサギの耳により状況が分かってしまうため、内心ハラハラしながらも無事を祈っていた。

また、舞台を設定したのは周りにある鬼化植物から推測はできていた。

その横で、士は何か違和感を感じていた。

言葉に表現できない違和感だが、このゲームがただでは終わらない

という予感がしていた。
そして、それは現実のものとなる。

*

もはやただの獣と化した虎は、目にも留まらぬ突進を仕掛けた。
その虎を耀が受け止め、飛鳥を階段に突き飛ばした。

耀「逃げて！」

ガルドの姿は先日までのエセ紳士の様な風貌でも、変幻したワータイガーでもなく、紅い瞳を光らせる虎の怪物となっていたのだ。

ジンはガルドの姿を見るや否や、彼の身に何が起こったのか理解する。

だが、今は逃げる事を優先するべきだった。

耀が止めている今のうちに作戦を練り直す必要があったのだ。

だからこそ飛鳥はジんに「逃げなさい」と告げ、ジンはその命令に従い飛鳥を腰から抱えて屋敷を飛び出し、森へと逃げた。

だが、必要以上に本拠から離れるため、重ねて言葉を告げた。

飛鳥「もういい、もういいわ！今すぐ止まりなさい！」

その言葉にジンは返事をするに我に返り、飛鳥と共に後ろへ倒れた。

飛鳥はジんに少し苦言を告げた後、ゲームの考察に入った。

まず、ガルドが守っていた白銀の十字剣。

次に、吸血鬼化したガルド。

この2つから、指定武器は白銀の十字剣と答えが出た。

そしてガルドが吸血鬼化した理由も、この舞台を用意したのも吸血鬼が関連している可能性がかなり高いという結果が出た。

そして、2人の近くの茂みからは、右腕から血を流しながらもその手に白銀の十字剣を握っていた耀であった。

飛鳥「か、春日部さん！大丈夫なの!？」

耀「大丈夫じゃ………ない。すごく痛い。ちよつと、本気で泣きそうかも」

ジン「まさか、たった1人で剣を?」

耀「本当は倒すつもりだった。でも、何か変な物を飛ばしてきて、それに少しだけやられて、できなかった。………ごめん」

そう言って耀は完全に意識を失った。

飛鳥は悔しげに立ち上がり、剣をとってジンに告げた。

飛鳥「今からあの虎を退治してくるわ。ジン君は春日部さんの容態を見ていて」

ジン「あ、飛鳥さん!? 駄目です、1人じゃ無理です! 悔しいですがここは降参しましょう! 耀さんもこのままじゃ危ない! 仲間の命には代えられません!」

このゲームに負ければ十六夜を失う。

だが、このままでは耀と飛鳥も失うかもしれないのだ。焦るのも無理はなかった。

だが、飛鳥は冷静に返す。

飛鳥「大丈夫よ。どんなに強くても知性の無い獣に負けないわ。――

――それに、悔しいじゃない? 春日部さんは私達じゃ勝てないと思つて1人で戦つたのよ?」

耀の判断は決して間違いではなかった。

ギフトの使えない飛鳥にそれほど戦闘力のないジンは足手まといと判断し、「逃げろ」と叫んだ。時間稼ぎを出来るのが耀だけであったのも確かだ。

だが、耀は1人で戦った。

剣を奪い、戦う事を選んだ。

この行動は、逆に飛鳥の心に火を灯した。

飛鳥「10分で決着をつけるわ。少しだけ我慢して」
その声が届いたであろう耀は、左手を振って“いつてらっしやい”
を込めて応えるのだった。

*

飛鳥は屋敷を燃やし、ガルドを待った。
獣は火を恐れる。

だからこそガルドは屋敷を飛び出し、自分の元まで来ると確信していた。

その予想通り、ガルドはやって来た。

飛鳥「……………待っていたわ。思っていたよりも早かったのね」

ガルドは飛鳥の持つ白銀の十字剣を見ると、まるで怯えた様子であつた。

飛鳥「あら、今さら尻込み？ ッフォレス・ガロ”のリーダーとして積み上げた物はもう何も残っていないはずでしょう？ ならせめて、森の王者として勇ましく襲いかかってくるべきじゃないかしら？」

ガルドにもはや人の言葉など通じない。

だが、挑発されていることは理解できた。

飛鳥の喉笛を噛み砕くのは簡単だ。豹よりも速い踏み込みがあるからだ。

だが、彼女の手にある炎がそれをさせない。

飛鳥「春日部さんのこともあるし、これ以上時間を割くわけにはいかないの。だから」

炎を脇に投げ捨てる。

それが合図となった。

飛鳥「1対1です。来なさい」

ガルド「———— G E E E E Y A A A A a a a a !!」

昨夜、飛鳥は黒ウサギから聞いていた。

飛鳥の「威光」は、ほぼ手付かずの原石の才能であると。

そして、「如何なる対象」に「どういった奇跡」を発揮するかとい

う点は学び、今までの人生と同じだけの時間の修練が必要である、と。

それは飛鳥としては今の「人を操る力」も黒ウサギの言う方も拒んだ。

そこで黒ウサギから提案を受けた。

もう1つの可能性、人を操るのではなく、————「ギフトを支配するギフト」として開花させ始めた。

飛鳥「今よ、拘束なさい！」

その言葉により、ガルドの周りにあった鬼種化した木々が一斉にガルドへと枝を伸ばし、ガルドを拘束した。

ガルドは抵抗する。

鬼化した樹を振り払う様に絶叫を上げながらも飛鳥へと向かおうとする。

だがそれより速く、飛鳥の支配によって破魔の力を十全に発揮する白銀の十字剣は聖なる輝きを放つ。

正眼に構え、飛鳥の手によってガルドの額を貫く。

十字剣の激しい光と、齒切れの悪い悲鳴。それが虎の怪物の最期となった。

飛鳥「今さら言ってはアレだけど……………貴方、虎の姿の方が素敵だったわ」

*

ゲーム終了を告げるように、木々は一斉に霧散した。

廃屋は倒壊し、その音と共に全員勝者の元へ走り出した。

黒ウサギと十六夜は先行して先に行き、士とユウスケはなるべく急ぐように走った。

黒ウサギは耀の容態を見て思わず息を呑んだ。

黒ウサギ「すぐコミュニケーションの工房に運びます。あそこなら治療器が揃ってますから。皆さんは飛鳥さんと合流してから共に帰ってきてください」

ジン「わ、わかったよ」

黒ウサギは耀を抱えると全速力で工房へ向かった。

黒ウサギが踏み込んだ地面にはクレーターの様な亀裂が走り、通った後には土埃が渦を巻いて立ち昇る。

昨日十六夜を追いかけていた時とは比べ物にならない脚力に、十六夜は値踏みするような双眸で黒ウサギを見送り、獰猛な微笑を浮かべていた。

士とユウスケも2人と合流し、飛鳥の元へと向かった。

飛鳥は少しフラつきながらも4人を見て、少し安堵したような表情を浮かべた。

飛鳥「勝ったわよ」

十六夜「お疲れさん」

ユウスケ「2人が無事でとりあえず良かった！さて、これで『フォレス・ガロ』も解散するだろうし、今まで脅されてた人達も前みたいにはいかなくとも自由な生活に戻れるだろ」

ジン「そうですね。これで、解放されたのなら、よかったです」

4人は笑い、帰路へとつこうとする。

だが、ただ1人はその場を動かなかった。

ユウスケ「どうした、士？」

動かない士に気づき、4人は足を止める。

士「おい、ジン、飛鳥。お前らはゲームを本当にクリアしたんだよな？」

飛鳥「当たり前よ。私がちゃんとガルドを倒したわ」

ジン「なによりも今までであった木々が無くなったのが証拠だと思いますが」

士はその返事を聞いてもなお動かなかった。

次の瞬間、先程轟いていた咆哮が辺りに響き渡った。

いや、先程よりもその咆哮は力強く、そして獣染みていた。

飛鳥「な、何で………ガルドは確かに殺したわよ!」

ジン「„再生”のギフト!?!いや、そんな高位なものをガルドが持っているはずはない!!ならどうして!?!」

十六夜「そのご本人がお出ましのようだぞ」

十六夜の見つめる先、飛鳥が帰って来た方にそれはいた。

全身が灰色でありながら、どこかステンドグラスを思わせる、虎の怪人。

その手には地面につく程長い鉤爪をつけており、その鉤爪を引きずりながら、2足歩行で向かって来ていた。

全員が目視した。

特に飛鳥とジンは信じられないものを見たように目を見開いた。

飛鳥「あ、アレが、ガルド………?」

ジン「い、いえ。アレがガルドな訳がありません!それよりも、ガルドの上にいる魔王って、そんなまさか………!?!」

十六夜「おい御チビ。あとで詳しく説明しろ。とりあえず今はアレを倒す」

士「いや、アイツは俺に用があるようだ」

全員が士の方を振り向くと、士の手にはあるはずのない新しい「契約書類」があった。

全員がその「契約書類」をよむ。

『ギフトゲーム名 “狂える虎への鎮魂歌”

・プレイヤー 一覧 門矢 士

・クリア条件 タイガーオルフェノクかつタイガーファンガイアであるガルドⅡガスパーの討伐。

・クリア方法 ガルドⅡガスパーを跡形もなく消滅させる。他のプレイヤーの参加は認められず、門矢 士以外は「契約^{ギアス}」によってガルドⅡガスパーを傷つけることは不可能。

・敗北条件 プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、[〃]ノーネーム[〃]はギフトゲームに参加します。

「フォレス・ガロ」印

十六夜「何でお前宛なんだよ」

士「知るか。だが、アイツは俺でしか倒せないようだ」

飛鳥「そのようね。私も今回は本当に足手まといみたいだし、避難しておくべきね」

ユウスケ「俺はジン君と飛鳥ちゃんを守るよ」

士「ああ、頼む」

十六夜も今回ばかりは疲弊したジンと飛鳥のことを考え、後ろへと下がった。

士はガルドと対峙する。

ガルドは未だ獣の怪物のようであるが、少しばかり理性が戻っているようであった。

士「1度死んだことがオルフェノク化した原因か。それに、吸血鬼によつてファンガイア化させられたのも納得はいく。だが、何故この世界にお前のような奴がいるんだ？」

ガルド「ダメレ。キサマヲコロシ、ウシロノオンナトジンⅡラッセルモコロス。ソシテ、ナニモカモコロシツクシテヤル！」

理性は少しばかり戻っただけ。

先程の敗北により、ガルドは全てに対して復讐心を抱いていた。己を殺した飛鳥。

その飛鳥が所属する[〃]ノーネーム[〃]のリーダーであるジン。

そして目の前にいる士。

目に入るものは全てが憎く感じる。

もはや、彼は人でも獣でもない、ただの怪人へと成り下がってしまったのであった。

士「そうか。だが、お前は大きな間違いをしている」

ガルド「ナニ？」

士「お前は今から死ぬ。アイツらも、お前が殺してきた奴らも、必死に生きていた。それをオマエが私利私欲の為に殺した。だからオマエは誰も殺さず、誰も殺せず、今まで殺してきた者へ懺悔しながら死ぬ」

士はベルトを自身の目の前に持つてくる。

マゼンタカラーのそれは、〃光写真館〃の旗と同じ模様であった。

ガルド「キサマ、ナニモノダ!？」

士は答える。

いつものように。

目の前の、敵を倒すために。

士「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

士「変身!」

KAMEN RIDE! DECADE!

デイクイドライバーにカードを差し込み、左右へと押す事でカードを読み取り、変身音になる。

士は姿を変え、マゼンタカラーにバーコードのようなものが仮面となった。

この世界に、本当の仮面ライダーが誕生した瞬間である。

第7話「猛虎への鎮魂歌」

門矢士は世界の破壊者、仮面ライダーディケイドとなった。

その姿を見慣れたユウスケは驚くこともないが、他の3人はそれぞれの理由で驚いていた。

十六夜「へえ、あれがアイツの力か。面白そうじゃねえか！黒ウサギもだが、ほんと退屈しねえな！」

飛鳥「ちよつと待って？何あれ？か、仮面ライダー？何よそれ？へ、変身？とか言ってたわよ」

ジン「そ、そんな……………土さんが、ディケイド……………!?」

ユウスケ「あれ？ジン君は士のこと知ってるの？」

十六夜「そう言えばさつきもあの怪人を見てそんなことを言ってたな。どういう意味だ？」

士は後ろで話している者達は気にせず、手をパシパシと叩きながら目の前の敵をまずは捉えた。

以前にファイズの世界で戦ったタイガーオルフェノクに似ているが、身体全体はステンドグラスのようなもので構成されていた。

また、ファンガイアの特徴的なカラフルな色合いではなく、オルフェノクの灰色の色合いであった。

その確認が終わると、士はまずライドブツカーを出し、ソードモードへとする。

ディケイド「はあ！」

ライドブツカーでガルドを袈裟斬りし、続いて横薙ぎした。

ガルドはダメージを受けつつも、長い鉤爪をディケイドに振るう。

しかしディケイドはそれを躲し、ライドブツカーをガンモードにして銃弾を放つ。

ディケイドはガルドが怯んだ所でカードを取り出す。

ディケイド「虎には同じ虎がお似合いだろ」

取り出したカードをベルトへと差し込み、開いていたベルトを左右へと押す。

KAMEN RIDE! OOO!
タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

変な唄とともに姿は変わり、赤い鳥の頭に虎の胴体、バッタの足となった仮面ライダーオーズへと変えた。

続いてデイクライドはカードを取り出し、同じように差し込み、左右へと押した。

KAMEN RIDE! OOO! RATORAITA COMBO
!

ライオン!トラ!チーター!

ラタ・ラタ・ラトラアータアー!

またも変な唄が流れ、次は全身が黄色となった。

デイクライド「さてと、スピード勝負と行くか!」

ラトラータデイクライドは走る態勢をとると、すぐさま走り出した。その速さは風のように速く、ガルドを翻弄する。

ガルドとすれ違うたびにトラの鉤爪で斬りつけ、ガルドにダメージを蓄積させていった。

だが、ガルドもタイガーオルフェノクの持つ敏捷性を使い、ラトラータデイクライドと同じ速度で駆ける。側から見ればかなり速い動きではあったが、それを見ていた十六夜は明らかにガルドが不利であったことを見抜いていた。

実際、ガルドはラトラータデイクライドと数回打ち合ったが先に倒れた。

ガルド「オノレ、ナメルナアアアアアア!!!」

しかし、ガルドはラトラータデイクライドが自身の方へ来たタイミングで手から光弾を放った。

その光弾はラトラータデイクライドへと直撃し、後ろへ大きく吹き飛ばされた。

デイクライド「チツ。ならオルフェノクにはこいつだな」

ラトラータデイクライドはまたもカードを取り出し、ベルトへと差し込み左右へと押した。

KAMEN RIDE! 555
ファイズ!

COMPLETE!

姿はまたも変わり、今度は顔にギリシヤ文字であるφのようであり、全身は黒に赤いラインが奔^{はし}っている仮面ライダーファイズとなった。

そしてカードを取り出し、ベルトに差し込み、ベルトを左右へと押すことでベルトがカードを読み取り、己の武器を出した。

ATTACK RIDE! FAIZ EDGE!

ベルトからは紅く刀身が光るファイズエッジが現れ、ファイズデイクイドはそれによりガルドが放つ光弾を斬っていく。

ガルドは己の勝機が見えないことに焦りを募らせ、ファイズデイクイドに恐怖を抱きながらも咆哮を上げ、立ち向かった。

*

一方

十六夜「で、どういう意味だ？御チビ」

ジンは未だに驚きを隠せないながらも話し始めた。

それは、十六夜達が箱庭に来る前の話である。

ジン「デイクイドは、かつて箱庭に恐怖と破滅をもたらした『魔王です』」

『魔王』

昨日にも説明を受け、街を壊滅させた存在。士もそれであるとジンは言うのだ。

ユウスケ「デイクイドが魔王？でも士は悪魔だって」

ジン「デイクイドはギフトゲームをどのような相手にも仕掛け、そのギフトゲームに次々と勝利していきました。それは彼のギフトが

あまりにも規格外だったからです」

十六夜「そのギフトってのは？」

ジン「ギフト自体は1つですが、複数の力を所有しているギフトなんです。その能力は大きく分けて3つあります。まず、「破壊」。これはギフトゲームに定められているルールが「契約」であろうと「恩恵」であろうとそれを無視し、破壊することが出来ます。それが、修羅神仏のギフトであっても」

飛鳥「そんなのズルじゃない！」

ルール無視かつギフトですら破壊してしまうギフト。そんな馬鹿げた物があつてはゲームが成り立たない。

自分達が苦勞してクリアした先程のゲームをまるで嘲笑うかのようなギフトに飛鳥は声を荒げた。

ジンは悔しさを滲み出しながらも、冷静に話を続けた。

ジン「ええ。そして2つ目は「次元を超える力」。これは自身が行きたい時間軸、空間に無制限に移動できる力です。これにより箱庭に神出鬼没に現れ、ギフトゲームを仕掛け、あらゆる勝利を得ていました」

十六夜「ハッ。それも確かに厄介だが、まだマシだ。最後はなんだ？それが恐らく、デイケイドを「魔王」たらしめた理由だろ？」

これでは終わらない。

十六夜の言う通り、上の2つの能力も規格外だが、まだ「魔王」たらしめる程ではない。

何故か？

答えは簡単である。

戦いは、1人では限界があるからだ。

ジン「はい。最後は、異世界からあらゆる怪物を召喚する能力」

ユウスケ「あらゆる怪物？まさか、あのオルフェノクやファンガイアみたいなやつらか？」

ジン「そうです。デイケイドが呼び出した怪物は、グロンギ、アンノウン、オルフェノク、アンデッド、魔化魍、ワーム、ファンガイア、グリード、ゾディアーツ、ファントム、インベス、バグスター、スマツ

シユです。また、ガイアメモリと呼ばれるギフトによって怪物化するドーパントもいます」

種類の多さに、その話を聞いていた3人は息を呑んだ。

ユウスケからすれば、今まで渡ってきた世界の怪人達が呼び出されている事に驚き、その中には己の憧れの人を殺したグロンギすらもいたからである。

飛鳥「多いわね。でも、ただやられた訳じゃないんでしょ？」

飛鳥は何とか絞り出すように質問した。

だが、ただ蹂躪されているのであれば箱庭はすでに壊滅しててもおかしくはない。

しかし今現在、箱庭にそのような様子はなかった。

ジン「もちろんです。あらゆる修羅神仏やコミュニティの連合によって数多くの怪物は倒されました。しかし、デイケイドはいつのまにか姿を消し、残されたのは怪物達と、その怪物を召喚・使役できるギフトで、そのギフトはあちこちにばら撒かれました。そして、ガルドをオルフェノクやファンガイアに変えたのも恐らくそのギフトの1つを持った魔王だと思われまます」

ジンはまだ「ノーネーム」が旗と名を持っていた時に仲間から聞いていた。

そしてギフトゲームにも度々乱入している怪物達の姿も見ていたため知っていたのだった。

黒ウサギも知っている。

だが、何故か彼女は土が世界の破壊者と名乗っても仲間へと迎え入れた。

確かに過去の魔王を仲間とすれば、コミュニティ再建も捗るだろう。

しかし、ジンは土がデイケイドと知った事で土を信頼出来なくなっ
てしまっていた。

また過去のようにこの箱庭を混乱の渦に陥れてしまうのではないかとどうしても考えてしまうのだ。

十六夜「何にせよ、まずはアイツがあのだったやつを倒して

本人から直接話を聞かない限りはどうにも出来ねえだろ。俺はとりあえず黒ウサギを呼んでくる。お前達は終わったら光写真館に向かえ」

そう告げ、十六夜はあつという間にその姿を消した。あまりにも速いことに驚きながらも、ジンは神妙な面持ちであった。

飛鳥「今は気にしても仕方ないわ。それに、彼だってもしもの時を考えて光写真館を選んだのだと思うわ。それに、今戦ってる彼を見て。アレが魔王程の存在に見える？」

ユウスケ「一応、元・悪の大総統で現・世界の破壊者ではあるけどな」

ユウスケの言葉に2人は思わず顔を引きつらせた。

飛鳥「貴方、馬鹿!?!今、彼の疑いを少しでも晴らそうとしたのに悪の大総統とか言ってしまったら私でも信じれなくなるわよ!?!」

ユウスケ「ご、ゴメン!?!つい言っちゃった」

飛鳥「ッついッじゃないわよッついッじゃ!?!どうすんのよ!?!ジン君顔がまた青くなってきてるわよ!?!」

ただただジンは土が悪では無い事を心の底から願った。

*

デイケイドの方はと言うと、ファイズエッジによる斬撃はかなりダメージを与え、ガルドはもう満身創痍となっていた。

長かった鉤爪は両方とも折られ、もはや立ち上がる事すら出来ないでいた。

デイケイド「では終わりにしてやる」

デイケイドは元のマゼンタカラーへと戻り、カードを取り出して、

このギフトゲームを終わらせるためにカードをベルトへと差し込み、ベルトを左右へと押した。

FINAL ATTACK RIDE!
DE・DE・DE・DECADE!

ガルドの前にはいくつものカードが現れ、デイケイドは高く跳び上がる。ガルドは己の定めに少しでも抗おうと後退しようとするが、それすらもままならなかった。

斜めにセツトされたカードの中をデイケイドは通り過ぎながら降下していき、ガルドへとキックを叩き込んだ。

ガルドはキックを受け、ガルドの身体があつた所にはφの文字が浮かび上がり、ステンドグラスが割れたような音と共にガルドは大爆発をする。

デイケイドはガルドを倒したことを確認し、ベルトを左右へと開き、変身を解除した。

士「俺の勝ちのようだな。ギフトは、そうか」

士は何かを手にし、それをギフトカードへと仕舞った。

振り返れば何故か飛鳥に怒られているユウスケとそのユウスケを怒っている飛鳥、そして士を睨むジンがいた。

だが、戦闘前の事から何か話をするのだろうかと考え、取り敢えずは彼らの元へと向かった。

士「ギフトゲームとやらは終わった。さて、今から何処に行くんだ？」

ジン「……………写真真館です」

士「分かった、行くぞ。おい、お前らも行くぞ。何時までも遊ぶな」
飛鳥「遊んでなんか無いわよ！せっかく貴方のためと思って行動したらこの人が失言するんですから」

ユウスケ「だからごめんって！本当に悪かったって！ね？」

*

結果から言えば、士の容疑は晴れた。

その理由は夏海、ユウスケ、栄次郎の証言から士達は1度も箱庭の世界へ来た事が無いということ。

そして、海東大樹の証言であった。

まず、光写真館に戻った4人は先に着いていた十六夜と黒ウサギ、そして白夜叉も交えてジンが十六夜達に説明した様に白夜叉や黒ウサギが少し付け加えながらも士達に話した。

しかし、士と夏海、ユウスケ、栄次郎がそれを否定。

この世界にまだ1度も来たことが無かったという事実には、白夜叉も黒ウサギもジンも戸惑っていた。

そこへ現れたのが、姿を消していた大樹であった。

その大樹の手には1冊の本があった。

タイトルは“HAKON IWA”と書かれていた。

士「また盗んで来たのか」

大樹「まあね。ただ協力してもらったのも確かさ。ここも異世界ではあるけれども、地球ではあるからね。少し検索に時間がかかってしまったけどね」

大樹は苦笑いしながらもその本を皆の前でページをめくる。

そこには箱庭の歴史、過去のギフトゲームやその参加者などが事細かく記されていた。

だが、大樹はとあるページを見せた。

そこは、“魔王”ダイケイドに関する項目であった。

大樹「これが、君達の言う“魔王”である、ダイケイドさ」

ジン「こ、これは……!?!」

士「アナザーダイケイド……」

そこには、禍々しい姿をしたデイケイドに似て非なる存在、アナザードレイケイドが描かれていた。

大樹「僕らがアナザードレイケイドと呼ぶコイツは僕らの手で、正確にはとある魔王となった少年によって倒された。でも、この箱庭にも来ていたということは、何者かがアナザードレイケイドウオツチをスウォルツから盗みだしたか、並行世界のスウォルツがこの箱庭に来ていたかという仮説が立てられる」

黒ウサギ「では、士さんは!!」

大樹「間違いなく白だね」

その言葉で、ジンも黒ウサギも白夜叉ですらも安堵していた。

仲間である士が過去に箱庭で混乱を招き、今なおその影響を与えているなど考えたく無かったからである。

白夜叉「となると、おんしのその力はどうなるんじや?」

士「『世界の破壊者』は所謂俺自身の力だからな。実際に少し試したが、次元は問題なく超えられるようだ。それに、ギフトゲームもやってみないと分かんが、それで出来てしまつては面白く無い」

十六夜「ハハッ、いいね。俺とはやっぱりが合いそうだ」

士「俺もそれは感じていた事だ。よろしくしてやるよ」

十六夜「ああ、こちらこそよろしくしてやるよ」

ジン「大樹さん。その本は一体何処で?」

大樹「これかい?これはとある世界の探偵達の所からさ。ハーフボイルドな彼と地球ほしと繋がった少年のね」

どこかの風都

翔太郎「へつくしよん!ああ、一体誰だ?俺の噂をした奴は」

フィリップ「それは先程の怪盗じゃないかな?それよりも翔太郎!

くしゃみをすれば誰かが噂しているという現象は実に興味深い！詳しく調べてみようよ！」

翔太郎「嫌だね。俺はこれから依頼があるんだよ」

フィリップ「どうせまた猫探しだろ？」

翔太郎「そうだよ。悪いか？」

フィリップ「そんな事よりもさっきの怪盗が言っていた『箱庭の世界』というのも気にならないかい？僕らもそこへ連れて行って貰おうよ！」

翔太郎「それこそお断りだぜ！は、ハックション！」

大樹「ま、それは良いとして。これを全て読んでしまっってはつまらないからね。戻しておくことにするよ」

ジン「そう、ですか」

大樹「過去の事を知りたいのは分かるけど、それは自分で解き明かしていくべき物だよ。何が起き、どうしてこうなってしまったのか。それは暗く先の見えない道を手探りで行くしか無いんだよ。そうやって自分自身も成長させていく事が、今の君に出来ることじゃないかい？」

ジンは顔を上げ、気づかされた様に大樹を見る。

未熟である自分は今回のギフトゲームでも改めてその未熟さを痛感した。

だからこそ今の大樹の言葉に納得した。

楽な道へ行こうとしてはいけない。

それは、いつか自分の首を絞めることになるから。

そして、苦勞した道は、確かに自分の糧となるから。

黒ウサギ「大樹さんも、次元の移動が出来るのですか？」

大樹「ああ、そうだね。こんな感じのやつを出すとあらゆる世界へと行くことができるんだよ」

そう言っただけで出現させたのは、銀色のオーロラのようなカーテンである。

次元の移動を可能にする、土と大樹には可能な能力。

そのカーテンを見て、白夜叉は驚きながらもどこか納得したようであった。

白夜叉「ということは、そのアナザーデイケイドとやらもそれによつて、あらゆる世界の怪物を呼び出しておったわけか」

土「そうなるな。だが、まずはそいつよりもやる事はたくさんありそうだ」

黒ウサギ「そうですね。まずは耀さんの回復。これは今のところ命に別状はありません。ただ、自然治癒が少し落ちていますね」

土「おそらく、ファンガイアとなったガルドにライフエナジーを吸い取られたからだろう」

黒ウサギ「恐らくは。しかし、それは食事としっかりとした休息を取る事で回復すると思われれます。続いては元『フォレス・ガロ』の方々についてですが」

十六夜「それは俺に任せてほしい」

黒ウサギ「十六夜さんにですか？何かお考えが？」

十六夜「ああ」

獰猛な笑みを浮かべる十六夜は、まるでこれから悪戯をするつもりが悪ガキのような顔つきであった。

そこに少しの不安を黒ウサギは抱いていたが、白夜叉がそれを承諾し、十六夜に『フォレス・ガロ』の傘下に入らされていたコミュニケーションのリストを渡した。

大樹「それなら僕も一枚噛ませて貰おうかな。少年くんも頑張ったようだし」

大樹も悪い笑みを浮かべ、十六夜とお互いに何をこれからするのか話し合っていた。ただ全員が理解したのは、きっとロクでもないことであるだろうということである。

黒ウサギは耀の様子と治療をみるため先に本拠へと戻った。白夜
又も今回の件の後始末などもあるようで、後は十六夜達に任せるとし
て「サウザンドアイズ」へと帰って行く。

お目付役2人が居なくなつたことで、十六夜と大樹はジンを視界に
捉え、それに気づいたジンは自分が何かされる事を理解した。

早速と言わんばかりに十六夜、大樹、ジン、飛鳥、土は光写真館を
出て、「フォレス・ガロ」の解散令を知り、噴水広場に集まっていた
元「フォレス・ガロ」の者達に説明を始めた。

まず、人質は全員殺されたこと。

「フォレス・ガロ」のリーダー、ガルドは完全に死んだこと。

「六百六十六の獣」が沽券を理由に元「フォレス・ガロ」のメン
バーを襲うことがないこと。

それを聞いた者達は、歓声ではなく、悲嘆の声を上げていた。

人質が死んでいたこと。近隣の最大手コミュニティが無くなるこ
とでの不安などの理由があつた。

そして、「ノーネーム」の傘下に入らなければならないかもしれな
いということ。

だが、ここは十六夜が前に出た。

十六夜「今より「フォレス・ガロ」に奪われた誇りをジンⅡラッセ
ルが返還する！代表者は前へ！」

大樹「並びに貴殿らの取られていた人質の解放を行う！彼らはガル
ドに見つからないよう密かに保護されていた！先程彼らが発見され
た事により、貴殿らの元へ帰す！」

2人のその言葉に、1000人以上いる衆人達はざわめいた。
彼らが悪巧みをしていたのはこれだった。

十六夜は「名」と「旗印」の返還によって、大樹は「人質」の解放
によって、彼らはただのノーネームではなく、「ジンⅡラッセルの率
いるノーネーム」として名前を売るつもりである。

大樹はジン達がギフトゲームに勝利した事を知り、少しばかりのご
褒美として、次元を超える事で人質達を匿い、この時代へと連れてき
たのだ。

ただ、歳は経っていないため、時間停止のギフトがあったというホラ話で人質に関しては証言するつもりであった。その事は人質達にも説明しており、彼らもそれを承諾した。

十六夜「聞こえなかったのか？お前達が奪われた誇り——」
名
「と旗印」、そして」

大樹「貴殿らの大切な家族である『人質』を返還すると言ったのだ！コミュニティの代表者は疾く前へ！『フォレス・ガロ』を打倒したジンⅡラツセルが、その手でお前達に返還していく！」

衆人「ま、まさか」

衆人「俺達の旗印が返ってくるのか……!?」

衆人「それに人質までも帰ってくるのか!？」

十六夜「直ちに列を作れ！統率の取れない人の群れなど、『フォレス・ガロ』の獣にも劣るぞ！」

衆人「!!!」

十六夜と大樹の威圧感と荘厳な話し方に衆人は圧倒され、列を為した。

「階層支配者」から預かったリストを取り出し、ジンに渡した。その際、語調を戻し耳打ちをした。

「しっかりと自己主張するように」と。

脇で見えていた飛鳥と土も3人が企んでいる事に察しがつき、笑いながら戻ってきた十六夜と大樹に小声で話しかけた。

飛鳥「面白いことを考えているよね？」

十六夜「さて、なんの事かなお嬢様」

土「よく全員取り戻す時間なんてあったな」

大樹「僕は泥棒だよ？人質を盗み出すくらい朝飯前だからね」

彼らは初のギフトゲームを勝利に収めた。

それと同時に、勝利だけでは手に入らない物も手に入れるつもりであった。

「名」と「旗印」と「人質」がそれぞれに返還されていき、ある者は狂喜して踊り回り、ある者は旗を掲げ走り回り、ある者は人質であった家族とお互いの無事を確かめ合いながら抱き合い、ある者は泣

き崩れていた。

この「箱庭の世界」において、いかに「旗印」が大切な物なのかを十六夜達は再認識させられた。

十六夜はジンが最後のコミュニティに返還したのを確認し、全員の前に立つ。

十六夜「名前と旗印と人質を返還する代わりに、幾つか頼みたい事がある。お前達の旗と家族を取り戻した、このジンⅡラツセルの事を今後も心に留めておいて欲しいというのが1つ。そしてジンⅡラツセルの率いるコミュニティが、「打倒魔王」を掲げたコミュニティである事も覚えていて欲しい」

衆人はまたざわめき始めた。

あまりにも信じられない話であり、衆人達はジンに目を向ける。

ざわざわと波紋が広がる。

魔王相手に勝てるのか、神格を倒したそうではないか、本気で「この世界の災厄」を倒すつもりなのか、など。

十六夜は続ける。

十六夜「知っているだろうが、俺達のコミュニティは「ノーネーム」だ。魔王に奪われた名と旗印、それを自らの力で奪い返すため今後魔王とその傘下と戦う事はあるだろう。しかし組織として周囲に認められないと、コミュニティは存続できない。だから覚えていてほしい。俺達は、「ジンⅡラツセルの率いるノーネーム」だと。そして名と旗印を取り戻すその日まで、彼を応援してほしい」

十六夜の饒舌ぶりに飛鳥、土、大樹は笑いを必死に噛み殺すので限界だった。普段の十六夜を知っているからこそ、この演説はあまりにもむず痒いものであった。

ジンも複雑な表情を浮かべながらも、十六夜に背中を叩かれ、前に出る。

ジン「ジンⅡラツセルです。今日を境に聞くことも多くなると思いますが、よろしく願います」

その言葉には歓声と激励の言葉が贈られ、彼らの作戦は成功を収めた。

第8話 「箱庭の騎士」

十六夜達は本拠へと戻り、耀の様子を見に行った。

2、3日で回復するという事により皆安堵し、次は十六夜が参加するというギフトゲームについての話となった。

ただそのギフトゲームが延期になったと黒ウサギは知り、他の面々もつまらなさそうにする。

特に十六夜は不機嫌極まりない態度である。

十六夜「〃サウザンドアイズ〃は巨大なコミュニティじゃなかったのか？プライドはねえのかよ」

黒ウサギ「仕方ないですよ。〃サウザンドアイズ〃は群体コミュニティです。白夜叉様のように直轄の幹部が半分、傘下のコミュニティが半分です。今回の主催は〃サウザンドアイズ〃の傘下コミュニティの幹部、〃ペルセウス〃。双女神の看板に傷が付く事も気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回ぐらいやるでしょう」

その説明に、土や十六夜は呆れた様のため息をついた。

土「まさしく三流だな」

十六夜「もはや五流もいいところだぜ」

大樹「まあ決まってしまう事は悔やんでも仕方ないさ。僕はまたお宝を探しに行くよ」

大樹はまたいつもの様に出かけようとしたが、飛鳥はふと抱いた疑問をぶつけた。

飛鳥「そう言えば貴方のギフトは全然見ないわね。見してはくれないのかしら？」

大樹「そう簡単に手の内は晒すものじゃないさ。じゃあね」

大樹はそう言つて談話室を退室した。

十六夜は楽しみがなくなり、今にも暇過ぎて死にそうという顔をしており、飛鳥は「ペルセウス」というコミュニティに少し嫌悪感を抱き、ジンと黒ウサギは頭ではギフトゲームがこの世界の法律であるという事を理解しているが、今回で仲間を取り戻せると考えていた事も

あり、悔しさとショックで俯いている。

士としても仲間の大切さについては理解していることもあり、彼らが落ち込んでいる理由もわかるため、今はそつとしておくべきだと思いいお茶を啜る。

飛鳥とジンはギフトゲームで疲れていたこともあり、先に休むため部屋へと戻った。士は疲労がそこまでなかったため、黒ウサギと十六夜と共に話を続ける。

士「その仲間ってのはどんなやつなんだ？」

黒ウサギ「一言で言えば、スーパープラチナブロンドの超美人さんです。指を通すと絹糸みたいに肌触りが良くて、湯浴みの時に濡れた髪が星の光でキラキラするのです」

十六夜「へえ？よくわからんが見応えはありそうだな」

黒ウサギ「加えて思慮深く、黒ウサギより先輩でとても可愛がつてくれました。近くに居るのならせめて1度お話ししたかったですけど……」

士「それなら今出来そうだが？」

???「そうだな。それに、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

士の言葉と共に2人ははっと窓の外を見た。コンコンと叩くガラスの向こうで、にこやかに笑う金髪の少女が浮いていた。飛び上がった驚いた黒ウサギは急いで窓に駆けよる。

黒ウサギ「レ、レティシア様!？」

レティシア「様はよせ。今の私は他人に所有される身分。箱庭の貴族ともあろうものが、モノに敬意を払っては笑われるぞ」

レティシアは黒ウサギが開けた窓から苦笑しながら入る。

美しい金の髪を特注のリボンで結び、紅いレーザージャケットに拘束具を彷彿させるロングスカートを着た彼女は、黒ウサギの先輩と呼ぶには随分と幼く見えた。

レティシア「こんな場所からすまない。ジンには見つからずに黒ウサギと会いたかったんだ」

黒ウサギ「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を淹れますので少々お待ちください！」

黒ウサギは昔の仲間と会えたことにより、小躍りするようなステツプで茶室へと向かう。

レティシアは十六夜と士が座っていたソファとは反対のソファへと座る。

十六夜とレティシアは少しばかり言葉を交わし、お互いにどのような人物なのかを見極めようとしていた。

黒ウサギもすぐに戻って来て、レティシアの目的を尋ねることにした。

レティシア「用件というほどのものじゃない。新生コミュニティがどの程度の力を持っているのか、それを見に来たんだ。ジンに会いたくないというのは合わせる顔がないからだよ。お前達の仲間を傷つける結果になってしまったからな」

箱庭において、「純血」の吸血鬼は太陽の光を浴び、平穏と誇りを胸に生活できる箱庭を守る姿から、「箱庭の騎士」と呼び称される存在である。

実際、様々な功績を挙げており、アナザーデイケイド襲撃の際も修羅神仏や多くのコミュニティと共に手を合わせ多くの怪人達を屠ってきた。

彼らは箱庭の誇りと言っても過言でないのだ。

レティシア「黒ウサギ達が『ノーネーム』の再建を掲げたと聞いた時、なんと愚かな真似を……と憤ったよ。それがどれほど茨の道であるか、お前がわかっていないはずがなかったからな」

士「だが黒ウサギ達に文句を言おうとした時に、俺達のことを知ってたわけだ」

レティシア「ああ。コミュニティの解散を説得しようとしに行こうとした時に、偶々な。そしてお前達が神格級のギフト保持者を、同志としてコミュニティに参加したとな」

黒ウサギの視線はレティシアから反射的に十六夜と士に移った。おそらく白夜叉に聞いたのだろう。

レティシアがここまで来れたのも白夜叉の手招きがあったからであらうと黒ウサギも考えた。

レティシア「そこで私は1つ試したくなかった。その新人達がコミュニケーションを救えるだけの力を秘めているのかどうかを」

十六夜「結果は？」

レティシア「生憎、ガルドでは当て馬にもならなかったよ。ゲームに参加した彼女達はまだまだ青い果実で判断に困る。ただ、ガルドが怪人化したのは予想外だったが、同時によかったよ。何せ、世界の破壊者”の力を見ることが出来たからな」

士「それはどうも」

レティシア「過去の悪夢を再び繰り返すのかとも思ったが、その心配は無さそうだ。それに、”世界の破壊者”としての力は健在であることも喜ばしい」

そう言っているレティシアの表情は暗く、そこから士はレティシアの想いを読み取った。

士「だが、飛鳥達はまだ成長過程にあり、未だに不安要素なのがここにいるコイツと、海東って訳か」

レティシア「ああ。まだ1度も力を見ていないからな。白夜叉から聞いてはいるが、それでもこのコミュニケーションを本当に再建出来るのが不安なのだ」

十六夜「ならその不安を拭う方法が1つだけあるぜ」

十六夜の言葉に全員が視線を向ける。

その顔には真剣でありながらも、楽しそうに笑っていた。

十六夜「実に簡単な話だ。アンタは”ノーネーム”が魔王相手に戦えるのが不安で仕方がない。ならその身で、その力を試せばいい。――

――どうだい、元・魔王様？」

その部屋には士のお茶を飲む音だけが響いた。

レティシアは十六夜の意図をすぐに理解し、啞然とした顔をすぐに哄笑に変えた。

レティシア「ふふ……それは思いつかなんだ。実に分かりやすい」

黒ウサギ「ちょ、ちよつと御2人様？」

士「黒ウサギ、ここは黙って見ておくところだ」

黒ウサギ「し、しかし」

士「安心しろ。2人とも本気でやり合う訳じゃない。それに2人はもう外に出たぞ」

黒ウサギ「あ、2人とも！」

外ではすでに翼の生やしたレティシアが、金と紅と黒のコントラストで彩られたギフトカードから投擲用の光のランスを顕現させる。

そして、レティシアは呼吸を整え、翼を大きく広げる。

レティシア「ハアア!!!」

全身を撓しならせた反動でランスを打ち出す事で、その衝撃は空気中に視認できるほど巨大な波紋が広がり、怒号と共に放たれた槍は瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線に十六夜に落下していく。

流星の如く大気を揺らし、十六夜目掛けて舞い落ちる。

十六夜はその槍を見ても楽しそうに、牙を剥いて笑う。

十六夜「カッ————しゃらくせえ！」

殴りつけた

2人「——は………!?!?!」

士「ほう、言うだけはあるな」

素っ頓狂な声を上げる黒ウサギとレティシアを尻目に士は十六夜の方を興味深そうに見る。

あれだけいつも大口を叩いていたが、それに見合う実力を持っているのは確かであったようだ。

十六夜に砕かれた槍は只の鉄塊と化し、散弾銃のようにレティシアに向けられた。

レティシア（ま、まずい………!）

レティシアは悟った。

これは受けられず、避けることもできない。

いや、頭では理解していた。

だが身体は反応できなかった。

思考と肉体の乖離により、レティシアは次の瞬間には血みどろとなつて落ちるだろう。

士「お前にはまだ色々聞かないといけない事があるらしい。これ

で貸し1つとしてやろう」

レティシアが覚悟を決めて目を瞑ろうとした時、いつの間にか現れた士によりお姫様抱っこをされ、凶弾はライドブツカーガンモードにある程度撃ち落としていた。

地上にも何事も無かったように降り、黒ウサギは慌ててレティシアへと駆け寄った。

黒ウサギ「だ、大丈夫でしたか!?!いえ、それもですが、これは!?!」

黒ウサギはレティシアの手を握ると同時にギフトカードを掠め取った。

レティシアは思わず目を背けた。

ギフトネームが変わっていた。

彼女は本来なら神格を得ていた。

しかし、そこには鬼種のギフトと僅かな武具しか残っていなかった。

十六夜はそれがわかると白けたように舌打ちをし、不満を漏らす。

十六夜「他人に所有されたらギフトまで奪われるのかよ」

黒ウサギ「いいえ……魔王がコミュニケーションから奪ったのは人材であってギフトではありません。武具などの顕現しているギフトと違い、『恩恵』とは様々な神仏や精霊から受けた奇跡、いわば魂の一部です。隷属させた相手から合意なしにギフトを奪う事は出来ません」
士「つまり、ソイツは自分からその神格のギフトを差し出したわけだ」

3人の視線を受け、レティシアは苦虫を噛み潰したような顔で目を逸らす。

十六夜「とりあえず、話をするためにも屋敷に戻ろうぜ」

黒ウサギ「……………そう、ですね」

2人は沈鬱そうに頷き、十六夜と士について行くように屋敷へと戻った。

*

一方、〃サウザンドアイズ〃

白夜叉は離れにある家屋を訪れた。

そこには亜麻色の髪に蛇皮の上着を来た線の細い男、〃ペルセウス〃の次期リーダーであるルイオスがいた。

白夜叉と同じく、〃サウザンドアイズ〃の幹部であるルイオスは白夜叉を見てニコリと笑いかける。側に2人の女性を侍らせながら。

ルイオス「随分待たせてくれるね。コミュニティの同志をほつぱり出してまで接客する大事な客で？」

白夜叉「呵ッ、何が同志だ戯け。成り上がり風情がウチの娘共を侍らせるのはいい度胸だの！ほれ、お前達、もうよいから閉店作業に戻るが良い」

店員「は、はい」

女性達は着崩していた着物を直し、そそくさと退場する。

ルイオスはつまらなさそうに白夜叉へ文句を言う。

ルイオス「残念。せっかく愉しんだのに。ああいう気品のある大人しい娘って、〃ペルセウス〃にはいないからなあ。同じ幹部のよしみで売ってくれない？」

白夜叉「……………私は無礼には決闘をもって返すぞ、ルイオス殿」

ゾワ、っと白夜叉の白髪が戦慄わななく。その声音には明確な怒気が含まれており、何よりも同志を大事にする白夜叉にとって、〃仲間を金銭で譲れ〃というのは侮辱以外の何物でもないのだ。

ルイオスは肩を竦ませておどける。

まるで意に介していなかった。

ルイオス「失礼。逆鱗に触れたというのなら謝りましょ」

白夜叉「フン——して、〃ペルセウス〃を継ぐルイオスお坊ちや

んが私に何用だ」

ルイオス「それはあなたの方が知っているとありますがね」

言うまでもなくレティシアの事である。レティシアを逃したのは白夜叉で、白夜叉自身もその事を隠すことはなかった。むしろ先に「サウザンドアイズ」の看板に泥を塗ったルイオス達を責める。

ルイオスはその事を自覚しつつも参加予定だった者達にも納得は得ており、レティシアの居場所もすでに把握済みであるため余裕に構えていた。

白夜叉「何？ならば何故私の元に？すぐにでも連れ戻しに行けばよかろう」

ルイオス「部下に向かわせてるから、程無く見つかるでしょうよ」
ルイオスは出されていた茶菓子を頬張り、その茶菓子をさの乗っていた白皿を扉へと投げつけた。

パリン、と割れて散らかった破片を踏み碎き、明確な敵意を込めた声で白夜叉は問う。

白夜叉「小僧。どういうつもりだ？」

ルイオス「こんな事が2度と起こらないようにしておこう、という僕なりの配慮だよ。今回の脱走劇の原因は、古巣のコミュニティに対する執着だ。その執着を断っておかないと取引相手のところで迷惑かけるかもしれないだろ？」

ルイオスの言葉を少し置いて白夜叉は理解した。

白夜叉「まさか貴様……………『ノーネーム』を襲うつもりか!？」

ルイオス「襲うなんて失敬な。我らの所持品を盗み出した『ノーネーム』に天誅を!——とまあ、名目はこんなところかな?名無しのコミュが潰れたところで誰も怒ったりしないだろ?あーちなみに。出入り口は僕がもう細工しちゃったから」

白夜叉「この、小僧……………!よほど命が惜しくないらしいな!？」

白夜叉は今までにない程の殺気をルイオスへ向ける。

しかし、ルイオスはどこ吹く風のようにその殺気を受け流していた。

ルイオス「あれ?同志を殺しちゃうの?同志殺しは重罪だぜ?それ

に、〃白き夜の魔王〃と謳われた白夜叉様が相手じゃ僕も死んじやうだろうなあ……けど殺される前に、この店1つ無くすくらいはしてみせるぜ？可愛い部下が粉々に碎かれるのはきつと辛いと思うな？」ルイオスは首のチョーカーにぶら下げた金の装飾をちらつかせる。この生首のような形をした飾りこそが、魔王に匹敵する〃ペルセウス〃の最強のギフトであった。

白夜叉は歯噛みをして睨む。ルイオスは真正面から受け止める。勝ちを確信したルイオスは蛇皮の上着を正しながら、ニヒヤつと端正な顔を歪める。

だが、そこへ1人の笑い声が聞こえた。

貴賓室の扉が開き、そこには白夜叉もよく知る泥棒がいた。

大樹「あははははっ！いや、とつても笑わせてもらったよ」

ルイオス「誰だ？」

大樹「僕かい？〃ノーネーム〃の海東大樹さ。よろしくね」

大樹の名乗りを聞きルイオスは納得すると同時に疑問が出た。

ルイオス「〃ノーネーム〃の？出入り口には細工をしていたはずだけど？」

大樹「そんなもの簡単に壊せたさ。それに、君は〃ノーネーム〃を襲うみたいだけど、急ぐべきなのは君の方じゃないかな？」

ルイオス「は？」

訳がわからないといった表情である。

白夜叉もどういう事か説明を求めるように大樹を見る。

大樹「ん？商品の過去はキツチリ調べるんだろ？そんな事も出来ないのに幹部なんだ？〃サウザンドアイズ〃つてもつと凄いとこるだと思つてたけど、検討はずれかな」

ルイオス「〃名無し〃風情が、僕を馬鹿にするなよ？」

大樹は敢えて挑発するように発言をし、それにルイオスは乗る。格下相手からの挑発はルイオスのプライドがゆるさなかった。

大樹「おや、馬鹿にされてるといふのは理解出来るんだ。なら、君は今すぐその〃名無し〃の元に駆けつけるといい。仲間が無惨な姿で見つからないうちにね」

ルイオス「おいおい、僕達“ペルセウス”が“名無し”風情に負けるって？冗談きついよ」

大樹「ふーん。なら仕方ないから皆で行くとしようか」

ルイオス「は？」

白夜叉「ん？」

大樹は銀のカーテンを出現させ、2人と共に“ノーネーム”本拠まで移動した。

ルイオスも白夜叉も驚いたが、それよりも目の前の光景の方に驚かされた。

何せ、ゴーゴンの首を掲げた旗印の“ペルセウス”の者達が、地に伏しており商品であるレティシアは石化すらされていなかった。

士「この程度か、“ペルセウス”ってのは」

第9話「仲間」

大樹達が来る少し前。

屋敷へ戻ろうとした時、妖しい褐色の光を士達は目視した。

黒ウサギとレティシアはその光が何かを瞬時に理解し、レティシアは3人の前に立ち壁になろうとした。

だが士はそれよりも速くカードを1枚ベルトへ差し込み、閉じた。

ATTACK RIDE! DEFEND!

すると4人の前に壁が突如現れ、光を遮る。

光がおさまり壁を崩すと、ゴーゴンの首を掲げた旗印である“ペルセウス”の者達が空を駆けていた。

翼の生えた空駆ける靴を装着した騎士風の男達であり、その数はかなりのものだった。

男「いたぞ！吸血鬼はまだ石化出来ない！ただちに捕獲しろ！」

男「例の“ノーネーム”もいるようだがどうする!？」

男「邪魔するようなら構わん、斬り捨てろ！」

その言葉を聞いた十六夜と士は不機嫌そうに、かつ獰猛に笑って咳く。

十六夜「まいったな、生まれて初めておまけに扱われたぜ。手を叩いて喜ばいいのか、怒りに任せて叩き潰せばいいのか」

士「俺もおまけに扱われるのは初めてだ。それにここに勝手に入つて来たんだ、礼をしないとな」

黒ウサギ「はい？」

黒ウサギがキョトンと士を見れば、士はまたベルトにカードを差し込んでいた。

ATTACK RIDE! GRAVITY!

ベルトがそう告げると、魔法陣が男達の下に現れ、男達は地へ落ちた。

男達は何が起こったのか分からない様子であったが、体を起こそうにもかなりの重力がかかっているようで全く起き上がる事が出来なかった。

士「この世界にも不法侵入くらいはあるだろう」
十六夜「ハハッ。確かにこれは正当防衛だな。ていうかお前まじで
何でも出来るんだな」

士「ま、世界の破壊者だからな」

黒ウサギ「何やってくれてんですか!？」

2人「正当防衛」

黒ウサギ「このお馬鹿さん達!」

黒ウサギは何処からかハリセンを取り出し、士と十六夜の頭を叩いたが、2人とも全くダメージを受けていないようでケロっとしている。

男達は憎しげに士達の方を見る。

男「貴様ら、何をしたか分かっているのか!」

士「飛んでいた蠅を落とすだけだ」

男「我々、ペルセウス”を蠅扱いだど!」

男「余程命が惜しくないらしいな!」

士「この程度か、”ペルセウス”ってのは」

男達は意地でも立ち上がろうとする。

その時、大樹が白夜叉とルイオスを連れて帰って来た。

*

ルイオス「一体、どういう事か説明してくれるかな」

士「不法侵入してきた蠅を落とすだけだ。そうカツカするな、

あー、ルイボス?」

ルイオス「ルイオスだ!それに蠅だど?僕達 ”ペルセウス”を蠅だど?」

士「ん？礼儀も知らず人の敷地に入ってくる時点でそれは虫や鳥と一緒にだろ」

ルイオス「〃名無し〃 風情が、つけ上がるのもいい加減にしろよ！」
ルイオスは自分を侮辱され、それが〃ノーネーム〃にされた事に怒り心頭であった。

かたや大手コミユニティ〃サウザンドアイズ〃の幹部。かたや名も旗も奪われた〃名無し〃。圧倒的な格下に侮辱され、怒らないわけがなかった。

それに、部下は百人近くいたはずなのに、そのどれもがやられていくこともルイオスを怒らせる原因であった。

白夜叉「双方落ち着け。まずは状況の整理と行くべきじゃろ」

白夜叉がそう告げ、2人は渋々黙る。

白夜叉「まず、ギフトゲームを開催しようとしていた〃ペルセウス〃はそのギフトゲームを中止にした。その理由が金を積まれたから。合っておるな？」

ルイオス「まあね。言い方は気に食わないけどその通りだし」

白夜叉は少し睨むが、ルイオスはまた素知らぬ顔をする。

白夜叉「じゃが、ギフトゲームの商品の予定であったレティシアは自身がかつて所属していた〃ノーネーム〃が気にかかり、わしが手伝い逃した」

レティシア「ああ」

白夜叉「それに気づいたおんしらはレティシアを取り返そうとして、〃ノーネーム〃を襲撃した」

大樹「だけどそこへ返り討ちに合うどころかまさかの惨敗をしたと。ほんと面白いよ士」

大樹は愉快だと言うように笑う。

士は少し不機嫌になるが気にしない様子である。

ルイオス「確かに勝手に君達の所へ侵入したのは悪かったよ。だけど、君達は完全に僕ら〃ペルセウス〃に喧嘩を売ったんだ。その意味が理解出来るよね？」

黒ウサギ「そ、それは……………」

十六夜「喧嘩なら大歓迎だぜ。それを買い取ってくれるなんて、ありがたくてしょうがねえ。ちなみに利子はトイチだぜ？」

大樹「元々そのつもりだったし、理解が早くて助かるよ」

黒ウサギ「お2人とも！」

ルイオス「そうか。だけどね、僕も『サウザンドアイズ』の幹部という立場なんだよ。『名無し』の提示する物なんてたかが知れている」

十六夜「それ相応の物が必要だったか？」

ルイオス「ああ。そして、それは今ここにいるよね」

ルイオスの言葉にレティシアと黒ウサギはハツとする。ルイオスの狙いが、『箱庭の騎士』ではなく、『箱庭の貴族』たる黒ウサギであるとその目は語っていた。

士「なんだ。元々お前さんもそのつもりだったんじゃないか。いいだろう。その条件を呑んでやる」

黒ウサギ「つ、士さん!？」

ルイオス「上からなのも気に入らないし、あつさりとしているのもつと気に入らない。何様のつもりなの？」

士「俺様」

大樹「僕様」

十六夜「十六夜様だ！」

黒ウサギ「なんでこんなシリアスな時にネタに走ってるんですか！」

ハリセンにて3人の頭を叩く黒ウサギ。

十六夜「いやだつてな。『ペルセウス』のリーダーがこんなんだぜ？ちよつとどころかかなり名前負けしてるのがあまりにもガツカリだよ」

大樹「確かに。まあ上に立つ人間の器では無いね」

ルイオス「……………こつちが黙っていれば！」

激怒したルイオスは自分のギフトカードから大鎌を取り出した。

それを振るおうとした時、白夜叉が止める。

白夜叉「やめんか戯け共！話し合いで解決出来ぬのなら門前に放り

出すぞ！」

双方やる気満々であったが、白夜叉の一喝により矛を収めた。ルイオスは不満だったが、部下達を立たせ本拠へと帰る事にした。レティシアは白夜叉預かりとなり、レティシアの処遇は1週間後となった。

「ペルセウス」が帰った後、残された者達はどうと。

大樹「さて、僕は彼らの持つギフトが今回のお宝何だけど、彼らにふっかけれるギフトゲームとか無いかな？」

白夜叉「おんし、やはりそれが狙いか」

大樹の狙いはルイオスの持つギフト、それに「ペルセウス」の所有するギフトであった。士と大樹もペルセウスという英雄、その伝説については知っていたこともあり、大樹がギフト狙いであるという事は簡単に予想が出来た。

故に何度も喧嘩を売ろうとしていたのだ。

白夜叉「ある事にはある。じゃが、いくらおんしらでも1週間では無理——」

大樹「なら聞かせたまえ。君は僕に貸しがあるはずだよ」

白夜叉とルイオスを連れて来たのは、士が「ペルセウス」の面々を倒しているという事実を突き付けるためと、白夜叉への恩を売るためであった。

あのままでは白夜叉は本当に部下を失う可能性があり、それを失くした大樹には借りを作ってしまった。

その事を白夜叉も理解しているため、仕方ないと言わんばかりに教える。

白夜叉「「ペルセウス」の伝説になぞらえたギフトゲームがある。じゃが、それに挑戦するためには2つのギフトゲームをクリアする必要がある」

大樹「なるほど。ペルセウスの伝説から察するに、「クラーケン」と「グライアイ」の打倒ということかな」

白夜叉「そうじゃ」

理解のはやい大樹に少し驚きつつも少しばかり説明をした。十六夜もその話を聞き、まるで新しい玩具を見つけた子供のように目を輝

かせた。

十六夜「へえ？どつちも面白そうじゃねえか」

白夜叉「本気か、おんしら」

白夜叉は2人が全く危機感も抱いていない事に心配となった。黒ウサギの同志として彼らはその行動が何を意味するのか分かっていないようであったからだ。

だが、その意図を汲んだ大樹は少し怒ったように白夜叉へ忠告する。

大樹「君は僕らを舐めすぎだ、白夜叉。勝算が無い無謀な試合なんてはなからしないさ。それに、泥棒に目の前の宝を盗るなって言うのは意味ない事だと理解していると思っただけど？」

白夜叉「そうか。覚悟があるのなら止めはせんさ。その2体がおるのはこの場所とこの場所じゃ。命だけは、粗末に扱うなよ」

大樹「安心したまえ。命の大切さはこれ以上無い程に知ってるからね」

大樹はそう言って銀色のカーテンを出し、姿を消す。

十六夜もついていき、2人で手分けしてギフトゲームへ挑むようである。

事を中心人物であるレティシアはずっと黙ったままであり、それも自身が原因だと理解しているからだろう。かつての仲間をまた危険に晒そうというのだ。負い目を感じないはずがなかった。

そんなレティシアを見かねた士はレティシアへと告げる。

士「お前のすべきことは1つだけだ」

レティシア「……………何？」

士「信じる。アイツらは、必ず勝つ。心配しても疲れるだけだ」

レティシア「しかし……………」

士「あんな雑魚に負ける程、俺達が弱く見えるなら、その曇りきつた目はしっかりと磨いておけ」

士はポンポンっとレティシアの頭に手を当て、本拠へと戻っていった。

その会話を聞いていた黒ウサギと白夜叉も、“ペルセウス”を雑魚

と言った『世界の破壊者』と規格外な少年、そして泥棒の彼に希望を抱いた。

*

飛鳥「で、そんな面白そうな事を私には黙ってしていたのね？」

黒ウサギ「いえ全く面白くなど無いのでございますヨ!？」

士「実に面白かったぞ」

飛鳥「なら私も呼びなさいよ!」

士「まあ次のギフトゲームは十中八九『ペルセウス』のギフトゲームだ。楽しみに待っておけ」

飛鳥「そうさせてもらうわ」

飛鳥は外で何かあったのは感じていたが、ジンや他の子供達、それに重傷の耀を放っておいて外に出るわけにはいかなかった。

だが、帰ってきた士に広間で話を聞けばあまりに愉しそうな展開に、飛鳥は羨ましそうに士へ八つ当たりした。いや、正当な怒りかも知れない。

士「そういえば黒ウサギ。伝説になぞらえたギフトゲームってというのはどんなんだ」

黒ウサギ「……………それは」

耀「待って、私も聞きたい」

黒ウサギ「耀さん!？」

黒ウサギが説明しようとした矢先、寝ていたはずの耀が起き上がった。あと数日は安静にしておくべきなのだが、ジンも横についている事を見て耀とジンも交えて説明を始めた。

黒ウサギ「皆様は、ペルセウスのゴーゴン退治を御存じですか？」
飛鳥「ペルセウスは星座の名前しか知らないわ。ゴーゴンは蛇の髪を持つ化け物だったかしら？」

士「大体ならな。飛鳥の言うゴーゴンを倒したのが確かペルセウスっていう騎士だったはずだ」

——ペルセウスのゴーゴン退治の伝説。

ギリシヤの神々から4つの「恩恵」^{ギフト}を授かり、ゴーゴンを退治する旅に出る。

輝く翼を持つ、ヘルメスの靴。

神霊を殺す鎌、ハルパー。

死国の王の兜、ハデスの兜。

戦神アテナから授かった、アテナの盾。

ただ、アテナの盾は箱庭において消失しているようである。

それらの強大なギフトを駆使し、ペルセウスはゴーゴン退治を行うとしたが、ゴーゴンには力及ばぬ事をしり、ハデスの兜で不可視となり、ゴーゴンの寝首を搔く事に成功する。

そして皮肉な事に、ゴーゴンの生首は彼の生涯を成功へと導く最大のギフトとなる。

飛鳥「そう。それで、その伝説とギフトゲームとどう関係あるのかしら？」

ジン「力のあるコミュニティは自分達の伝説を誇示するため、伝説を再現したギフトゲームを用意することがあります。彼らは特定の条件を満たしたプレイヤーにのみ、そのギフトゲームへの挑戦を許すのです」

黒ウサギ「自らの持つ伝説と——旗印を掲げて」

飛鳥と耀は合点がいったように息を呑んだ。

士「つまり、今、十六夜と海東がそれに挑戦する資格を得るために取りに行ってるわけだ。その証しとやらを」

黒ウサギ「はい。ですが、いくらあのお2人でもあの厳しい試練にこの数日でクリアするなど、出来るはずが——」

大樹「案外簡単だったよ」

十六夜「思ったよりつまんなかったわ」

銀のカーテンから先程別れたばかりである大樹と十六夜がそこにはいた。大きな風呂敷を抱え、その中にはおそらく、目当てである物があるのだろう。

黒ウサギ「い、いくら何でも速すぎます!?!」

士「ま、これであとは春日部の回復を待てば準備は整うわけだ」

黒ウサギ「……………本当によろしいのですか?」

不意に黒ウサギは尋ねる。

これで、本当に良いのか。

レティシアというかつての仲間が帰ってくるのは嬉しい事だ。しかし、それに彼らは巻き込まれた形である。それを快く思わないのではないか。彼らの意思を尊重していないのではないか。

そういつた様々な不安が黒ウサギをおそう。

十六夜「お前、馬鹿だろ?」

黒ウサギ「へ?」

十六夜「俺は俺の好きな事、やりたい事をやってる。それがたまたまお前の目的と同じだった。それだけだろ」

十六夜は今さらだと言わんばかりに伝える。

それに他の者達も続く。

大樹「僕も好き勝手させてもらってるよ。それに、この世界のお宝はどれも良い。盗み甲斐があるよ」

飛鳥「私もこの世界に来てから楽しませてもらってるわ。普通では味わえなかった事をさせてもらってるんだもの。楽しくて仕方ないわ」

耀「ここに来て、たくさん友達出来た。それに、私はみんななんて楽しい」

彼らはハッキリと言った。

自分の意思で箱庭こゝろにいるのだと。

その言葉は黒ウサギにもジンにも響いた。

彼らを呼んで、本当に良かった。

十六夜「さて、ギフトゲームギフトゲームの準備も出来たし、俺はまた世界の果

てとか行ってみるわ」

大樹「僕もまたお宝探しに行ってくるね」

士「世界を破壊しに行くか」

飛鳥「面白そうね。今度は私も連れて行ってね？」

耀「……………みんなばかり、ズルイ」

黒ウサギ「いや、さっきまでの感動返してください！」

今日もハリセンの音が箱庭に響いたのだった。

第10話 「伝説への挑戦」

5日後

“ペルセウス”の本拠。

ルイオスは黒ウサギに熱い視線を送っていたが、それを無視して黒ウサギは切り出した。

黒ウサギ「我々 “ノーネーム” は “ペルセウス” に決闘を申し込みます！」

ルイオス「何？」

ルイオスの表情が変わる。それを無視して黒ウサギは十六夜と大樹が持ち帰った風呂敷の中から “ゴーゴンの首” の印がある紅と蒼の宝玉をルイオスだけでなく “ペルセウス” の側近達にも見えるように取り出した。

側近「こ、これは!!？」

側近「“ペルセウス” への挑戦を示すギフト……!!?まさか名無し風情が、海魔クラウケンとグライアイを打倒したというのか!？」

大樹「決闘の方式は “ペルセウス” が所持するゲームの中で最高難易度のもので構わないよ。どうせ僕達が勝つからね」

“ペルセウス” 一同が驚いているのを傍目に見ながら大樹が決闘の方法を提示しつつ “ペルセウス” を挑発する。ルイオスとしては下層のコミュニティのために設置され、 “ペルセウス” への挑戦を可能とするこの制度を撤廃しようとした矢先に今回のコレである。元々の怒りと不快感にさらに上乘せされ、ルイオスは怒り狂いそうになっっていた。

様式も整った立派なギフトゲームであるため、 “ペルセウス” 側も断れば今後の威信に響くこともあり容易に断ることができないのである。

ルイオス「ハッ………いいさ、相手してやるよ。元々このゲームは思いあがった身の程知らずなコミュニティに、僕達との間にどれ程格の差があるのか思い知らせてやる為のものなんだから。2度と逆らう気が無くなるぐらい徹底的に………徹底的に潰してやる」

華美な外套を翻して憤るルイオスに、十六夜と大樹はこれから起るであろうことを想像して、笑いを堪える事で精一杯だった。だが逆にその姿は禍々しく、映画に出てくるような悪役の様な笑いとなっていた。

それはもう、横から見ていた士、飛鳥、耀、ジンがドン引きするくらいである。

*

『ギアスロール』
契約書類” 文面

『ギフトゲーム名 “FAIRY TALE in PERSEUS”

・プレイヤー 一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

門矢 士

海東 大樹

・ “ノーネーム” ゲームマスター ジンⅡラツセル

・ “ペルセウス” ゲームマスター ルイオスⅡペルセウス

・ クリア条件

ホスト側のゲームマスターの打倒

・ 敗北条件

プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・舞台詳細・ルール

? ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

? ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

? プレイヤー達はホスト側の(ゲームマスターを除く)人間に姿を見られてはいけない。

? 姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦権を失う。

? 失格となったプレイヤー達は挑戦権を失うだけでゲームを続行する事はできる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、"ノーネーム"はギフトゲームに参加します。

『ペルセウス』印』

『契約書類』に承諾した直後、一同は間を置かず光へと吞まれた。

次元の歪みにより門前へと追いやられ、ギフトゲームの入口へと誘われる。

白亜の宮殿の周辺は箱庭から切り離された未知の空域を浮かぶ宮殿に変貌していた。

黒ウサギ「まずは宮殿の攻略が先でございます。伝説のペルセウスと違い、黒ウサギ達はハデスのギフトを持っておりません。不可視のギフトを持たない黒ウサギ達には綿密な作戦が必要です」

大樹「確かにそうだね。だけど、無いなら奪えばいいだけの話だよ」
黒ウサギは、はい? という顔で大樹へと振り向いた。大樹の手には既にハデスの兜が1つあった。

黒ウサギ「な、なんで持っていらっしゃるんですか!?!」

大樹「このゲームは少年くんが敵に見つかれば問答無用で負けだからね。それは面白くない。なら転移した瞬間に敵に奇襲を仕掛ければいいだけの話さ」

十六夜「あの銀のカーテンか」

大樹「ああ。ここでも問題なく使えるみたいだ。とりあえずはコレをつけたまえ」

ジン「は、はい……………」

ジンは大樹からハデスの兜を受け取りそれを装着した。ジンの姿は瞬く間に色を無くして姿を隠す。

黒ウサギ「ならルイオス様の所にもそれで！」

大樹「何を言っているんだい君は？」

黒ウサギ「はい？」

大樹「これはゲームだよ？ゲームは楽しまなければもつたいないじゃないか。それに、チートを使ってボスをすぐに倒しても面白くない。僕はこのゲームを楽しむと同時に、アイツの心を徹底的に潰してあげたいんだよ」

大樹のその顔は先程見せた表情よりも更にドス黒く、黒ウサギとジンはその表情に身を竦めた。

大樹「それに、僕は1人でも確実に彼らに勝てる。例えどんな事でも、神にだって勝てる自信があるよ」

十六夜「ハツ、分かっているじゃねえか。オマエとも気が合いそうだぜ」

飛鳥「同感ね。よく言うじゃない、ゲームは楽しくプレイしましようつて」

士「とりあえず、役割を分けるべきだな」

士が仕切り直し、このゲームでの役割を確認する。

大きく分けて3つ、ジンと共にゲームマスターであるルイオスを倒す役と索敵での見えない敵を撃退する役、そして失格覚悟で囮と露払いをする役割である。

大樹「士。今回は僕に譲ってくれないか？」

士「別に構わん」

大樹「感謝するよ。僕が少年くんと一緒にゲームマスターを倒すよ」

大樹がこんなにも積極的なのはルイオス達の持つギフト目当てであるという事は理解していたが、ここまで執着を見せる事に黒ウサギ

は驚いていた。彼の実力も未知数なため、正直託すことに不安なのが、待ったをかけた者がいた。

もちろんの如く、十六夜である。

十六夜「なら俺も混ぜろ。アイツのギフトにも興味がある」

大樹「分かった」

士「なら俺と春日部が索敵だな。兜は海東が1つ盗んできたやつがあるからあと1つだな」

サクサクと役割が決まっていくな中、飛鳥は不満げに全員に向けて言う。

飛鳥「あら？なら私は囷と露払いかしら？」

士「安心しろ。俺もどちらかという囷と露払いだ。ただ索敵も出来るというだけだ」

大樹「それに、君のギフトはルイオス1人に対するよりも多数相手にする方が向いている。ここは大人しく引き下がってくれないか」

飛鳥「……はあ、分かったわ。ただし、負けたら承知しないから」

十六夜「安心しろお嬢様。俺達が負けるわけねえだろ？」

士と大樹の説得にため息をつきつつも自身の至らなさも理解しているため飛鳥は引き下がる。

十六夜もヤハハと笑いつつ飛鳥に勝利を約束した。

黒ウサギは今回は審判としてしかゲームに参加できない事を言われ、それぞれの役割が決まった。

しかし、黒ウサギの表情は決して明るいものではなかった。

黒ウサギ「ですが、油断しているうちに倒さねば、非常に厳しい戦いになると思います」

士「奴の持つギフトか？」

黒ウサギ「はい。彼が所有しているギフトが黒ウサギの推測が外れていなければ——」

十六夜「隷属させた元・魔王様か」

黒ウサギ「そう、元・魔王の……え？」

黒ウサギは思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

そんな黒ウサギを気にもかけず、十六夜の言葉に続けるように大樹

も推測を述べる。

大樹「神話どおりならゴゴンの生首は戦神アテナに献上されているからこの箱庭にはない。だけど石化のギフトを所有し、使用している」

十六夜「星座として招かれたのが、箱庭の『ペルセウス』なら、さしずめ奴の首にぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔つてところか？」

士も何となくだが理解をしているようで、全く分からないというのは飛鳥と耀の2人であった。

ジンと黒ウサギも驚いていたが、黒ウサギが驚愕したのはその答えを導き出す過程とその答えに帰結することの異常さである。

黒ウサギ「まさか………お2人は、箱庭の星々の秘密に………？」
黒ウサギは信じられないものを見る目で首を振り返りながら問いかける。

十六夜「まあな。このまえ星を見上げた時に推測して、ルイオスを見た時にほぼ確信した。後は手が空いた時にアルゴルの星を観測して、答えを固めたつてところだ。まあ機材は白夜叉が貸してくれたし、難なく調べることが出来たぜ」

大樹「僕はこの世界で初めて星を見た時だね。星々の輝きとハツキリと満月が出ていることの2つに違和感を持つてね。それを前に持ってきたHAKONIW^あA^本を読んで納得したんだよ」

あまりにも当然という風に答える2人に黒ウサギは何度目か分からない驚きをした。もはや彼らが来てから驚いていない方が少ないのではないかと思いは始めるぐらいである。

大樹「それと、彼女は一応お嬢様だからね。多少なりとも護衛も必要だろう」

大樹はそう言つてシアン色の銃の形をしたドライバー、『ネオデイエンドライバー』をクルクルと回しながら出した。いつのまにか取り出した1枚のカードをそれぞれネオデイエンドライバーの読み取り装着へと差し込み、カード装填機構を前へと押した。

KAMEN RIDER! RIOTROOPER!

トリガーを引いた事で、顔はギリシヤ文字の Oオミクロン が模された兵隊の様な仮面ライダー、ライオトルーパーが3体召喚された。

その召喚された存在に飛鳥や耀はもちろんの事、黒ウサギやジンだけでなく十六夜すらも驚いた。

大樹「そのお嬢様を守ってね」

ライオトルーパーは「了解した」というように頷き、飛鳥を守る様に立った。

黒ウサギ「……………それが、大樹さんのギフトですか？」

大樹「まあ僕のギフトの一部って言った方が適切だね」

何でもないようにそう言う大樹に、黒ウサギは改めて海東大樹という存在が分からなくなった。次元を超え、あらゆる物を誰にも気づかずに盗み出す事ができ、人すらも召喚出来る事が可能である事に、もう規格外過ぎて開いた口が閉じれなかった。

士「さてと、準備も出来た事だ。乗り込むとするぞ」

十六夜「オマエら、帰ったら俺と喧嘩しようぜ」

大樹「考えておくよ」

黒ウサギ「で、どうやって乗り込むつもりで？」

この先の展開は何となく予想が出来ていた。

だから黒ウサギ以外の飛鳥、耀、ジンは自然と耳に手を置き、十六夜、士、大樹は門の前に立った。

3人「こ・も・ち・ろ・ん、こ・う・す・る・だ・ろ！」

3人揃って仲良く、白亜の宮殿の門を蹴り破った。

*

宮殿内は3人が門を蹴り破ったと同時に慌ただしく動き始めた。ルイオスのいる最奥へ至るための階段の確保、敵を監視できる位置への配置など、本拠を舞台とただけあって見事な連携が行われていた。

しかしその見事な連携は、“問題児のお嬢様”と“世界の破壊者”、そしてライオトルーパーによりすぐに崩された。

まず、入った瞬間に大樹は“インビジブル”により姿を透明化させた。

囃役の飛鳥と士はライオトルーパーを連れて正面の階段前広場へ行き、白亜の宮殿を破壊し回る。

飛鳥は十六夜から借りた水樹から出る水を操り、騎士達を圧倒した。急なギフトゲームという事もあり、本拠を保護する恩恵ギフトすらも準備不足である隙を突き、宮殿内を好き放題に荒らし回る。

ただ、どうしても水樹を操るのが精一杯な事もあり隙が生じる。が、そこはライオトルーパーが飛鳥への攻撃を弾いたり、遠距離から攻撃してくる敵を狙って攻撃するなど飛鳥のサポートをしつかりとこなしていた。

士はライオトルーパーと共に騎士達へ攻撃しつつ、不可視の兜を被った敵を探していた。

索敵能力は耀にも引けを取らない程であるため、見つけ次第ライドブツカーガンモードで撃ち落としていった。

士「大丈夫ですか、お嬢様？」

飛鳥「私なら全然大丈夫よ。それよりも貴方の方こそ、その姿で大丈夫かしら？」

士「ああ、今回の主役は譲ったからな」

飛鳥「そう。それで負けないでよ？」

士「かしこまりました、お嬢様」

*

一方、十六夜達は息を殺して状況を窺^{うかが}っていた。

宮殿の柱の陰に隠れ、耳を澄まして周囲の気配を耀は探った。やや間があつてピクリと反応を示した耀は全員に目配せをした。

大樹はその意図を汲み取り、敵の位置を探り、足音が聞こえた瞬間に静かに敵の腹を殴りつけた。

すると敵の騎士が姿を現し、兜が落ちた。

その兜はジンに渡された兜と同じ物であつた。

十六夜「ビンゴ。これで俺と御チビの分が確保できた」

兜を装着した十六夜もジンと同様に姿から色を消した。十六夜が兜を手に入れた事でジンは物陰に隠れ、耀が陽動、十六夜が耀に釣られた敵を叩き、大樹がそのサポートに回るといふ作戦を瞬時に共有した。

十六夜は耀に少し申し訳ないとは思つたが、耀は別段気にしていないうようであつた。

そうして3人は物陰から飛び出し、敵は耀だけを見つけ捕らえようとする。

だが、耀を捕らえる前に十六夜や大樹にやられて地に伏したり宮殿の外へ吹き飛ばされる。

特に十六夜の一撃は騎士達が悲鳴を上げながら幾層もの壁を突き破り、揃つて第3宇宙速度を維持したまま雲海の向こうまで吹き飛ばすのだ。相も変わらず容赦のない。

見えている敵をほぼ片付けたため、耀が索敵を始めようとした瞬間、突然壁へと叩きつけられた。

十六夜はすぐに反対側に蹴りを、大樹は辺りに銃撃を行うが何一つ手応えがなかった。

耀の五感をもつてしても感知できない敵に、十六夜と大樹はある可能性が思い浮かぶ。

十六夜達の使うレプリカではなく、本物のハデスの兜を使っている敵がいる。

姿だけでなく、臭気、熱量、物音までも消す、完全な気配消失を可能にするギフト。

神仏ですら暗殺を可能とする不可視のギフトを託された騎士が、付近で息を潜めているという事実はあまりにも十六夜達には都合が悪かった。

大樹はディエンドライバーが、十六夜は兜が取れた時、すぐに失格にされるからである。

そうになると、仮にルイオスの所まで辿りついても、戦えるのはジンだけとなってしまう。

そうになると勝ち目はゼロに等しい。

故に、最も忌避しなければならぬ敵である。

十六夜「一旦引くぞ！春日部！」

十六夜は壁に叩きつけられた耀を抱き上げる。

それを見計らった様に、姿の見えない敵は十六夜を襲う。巨大な鈍器の様な物で横薙ぎに十六夜は吹き飛ばされる。大樹も来ると分かっていた為、十六夜の近くを乱射するがどれも空振りである。

十六夜「あぶけえなオイ！兜が本当に取れるところだったぞクソツタレ！つかカウンターでも入れてやろうかと思ったのに、ホントに感知出来ねえ。いつそ手当たり次第に殴ってみるか？」

大樹「それは得策じゃない。それに、彼女は何かを思いついた様だ」
どこからともなく聞こえてきた大樹の声に少し驚きつつも抱えている耀の方を見る。

耀「聞かれるかもしれないから、今は一度逃げて」

十六夜「オーケー。期待してるぜ」

十六夜は再度耀を抱き上げる。直後、また背後から鈍器の様な物で殴られるが、蛇神の力でさえ傷を負わない十六夜には致命になりやうがなく、カウンターの蹴りをいれると今度こそ鈍器らしいものを弾い

た。

その鈍器は人間大の大きさを誇る鉄槌であり、兜を確実に壊す事が出来るものであった。

不可視の騎士はその鉄槌を拾い、また気配を潜め、機会を窺う。

耀は十六夜に指示をし、十六夜は指定された位置まで耀を運んだ。

大樹は不可視の騎士を牽制し、十六夜達に相談する時間を与える。

耀「次に、私が合図したらそこに攻撃して」

十六夜「別に構わないが、感知出来るのか？」

耀「出来る。相手は、透明であって透過じゃないから」

十六夜「なるほどな」

耀の考えを理解した十六夜はすぐ近くで待機する。

息を整え、集中する。

すると十六夜と大樹の耳には僅かながら耳鳴りのようなものを感じ、大樹も耀が行おうとしている事に得心する。

耀が使っているのは『音波』である。

幾ら神仏すらも暗殺できる兜であっても、透明になるだけであるならば、イルカやコウモリのようにソナーとして音波を使えばその位置を把握する事が出来る。

十六夜と大樹は一般人よりも発達した五感を持っているからこそ感じ取る事が出来るのであって、普通の人では恐らくどうか確実に無理だ。

耀は不可視の騎士を見つけろ。

右、左、正面の3方向の内の、左。

不可視の騎士も耀が探知する事が可能であるという事も気づいていよう。

柱の陰に隠れ、様子を窺っている。

静寂がその場を支配する。

狩る側と狩られる側。

その立場は、耀という存在がいなければ全くの逆となっていたであろう。

不可視の騎士は駆け出し、耀を襲撃する。

速く、すぐに横に迫って来たのを感じた耀はすぐさま声を出す。

耀「左方向、今すぐ！」

騎士は鉄槌を振り下ろそうとした瞬間、十六夜の先程と同程度の一撃を脇腹に喰らった。

騎士「ぐっ………！」

僅かな呻き声を上げ反対側の壁まで叩きつけられた。

大樹はすぐさま騎士の兜を取る。

姿を現したのは、ルイオスの側に仕えていた側近であった。

大樹「ハデスの兜、いただいたよ」

騎士「仕方あるまい。実力で負けたのだ、持って行くが良い」

大樹「そうさせてもらうよ。しかし、彼の一撃を加減していたとはいえ、よく耐えたね」

騎士「それは、我等の鎧が優れていたのだろう。何より、無鉄砲な一撃で負けたのならともかく、ギフトを真正面から打ち破られての敗北だ。——見事。お前達には、ルイオス様に挑むだけの資格がある」

歴戦の騎士が自身の敗北を潔く認め、敵の実力を認めるあたり、ルイオスよりも騎士として“ペルセウス”を率いる者として相応しい大樹は思う。

とにかく、最も厄介な本物の兜をつけた騎士を倒した大樹達は一旦ジンに本物の兜を被せ、大樹もインビシブルの効果も切れたのか姿を現したため、ジンの被っていたレプリカの兜を被る。

十六夜、ジン、大樹、耀の4人はそのままルイオスの待つ、最奥である最上階まで目指した。

第1話 「悪魔は泣き、英雄は嘆く」

十六夜、大樹、ジンは最奥の最上階にたどり着いた。

耀は十六夜達を最奥まで送り届けると土と飛鳥に合流するため別れた。

最奥には天井はなく、まるで闘技場のような簡素な造りになっている。イタリヤにあるコロッセオを想像してもらえば分かりやすいだろう。

最上階には審判としてついてきている黒ウサギが先におり、上空には膝までを覆う翼の付いたロングブーツを着用している男、ルイオスが十六夜達を見下ろしていた。黒ウサギは十六夜達を見るや安堵したようにため息をもらす。

ルイオス「——ふん。ホントに使えない奴ら。今回の一件でまとめて肃清しないと」

大樹「おや、随分と彼らの事を見下しているんだね」

ルイオスは十六夜達の前に降り立ちながら、大樹の言葉にさも当然というように返答する。

ルイオス「当然だろ？このコミュニティが存続出来ているのは僕のおかげなんだから。自分達の無能っぷりを省みてもらうにはいい切っ掛けだったよ」

大樹「君のような傲慢な人間は嫌いじゃないよ。でも、その傲慢さは後悔する事になるよ」

ルイオス「フン。なにはともあれ、ようこそ白亜の宮殿・最上階へ。ゲームマスターとして相手をしましょう。……あれ、この台詞を言うのってはじめてかも」

ルイオスは形式通りの挨拶をする。

ゲームマスターであるルイオスがその挨拶を今までしてこなかったのは全て部下である騎士達が優秀であったからである。今回のように準備が整わない突然の決闘でさえなければ、ここまで十六夜達の日論見通りに事が進む事は無かつただろう。

十六夜「ま、不意を打つての決闘だからな。勘弁してやれよ」

ルイオス「フン。名無し風情を僕の前に来させた時点で重罪さ」
ルイオスは翼を羽ばたかせ空へ上がる。

自身の懐から「ゴーゴンの首」の紋が入ったギフトカードを取り出し、光と共に燃え盛る炎の弓を取り出した。

大樹「ペルセウスの武器で戦うつもりはない、ということでもいいのかな？」

ルイオス「当然。空が飛べるのになんで同じ土俵で戦わなきゃいけないのさ」

ルイオスは小馬鹿にするように天へと舞い上がり、壁の上まで飛び上がると、首にかかったチョーカーを外し、付属している装飾を掲げた。

ルイオス「メインで戦うのは僕じゃない。僕はゲームマスターだ。僕の敗北はそのまま「ペルセウス」の敗北になる。そこまでリスクを負うような決闘じゃないだろ？」

慢心のしないルイオス。

それがどういうことが黒ウサギは理解した。彼の使うギフトが黒ウサギの想像通りならば、ギリシヤ神話の神々に匹敵するほど凶悪なギフトであるからだ。

ルイオスの掲げたギフトが光り始める。星の光のようにも見間違えう光の波は、強弱をつけながら1つ1つ封印を解いていく。

十六夜と大樹はとっさに構える。

ジンと黒ウサギを背後に庇い、いつでも戦えるように臨戦態勢をとる。

ルイオス「目覚めろ——「アルゴールの魔王」!!」

ルイオスが獰猛な表情で叫ぶと、光りは褐色に染まり、4人の視界を染めていく。

白亜の宮殿に共鳴するかのような甲高い女の声が響き渡った。

アルゴール「ra……Ra、GEYAAAAaaaaa!!」

それは最早、人の言語野で理解できる叫びではなかった。

冒頭こそ謳うような声であったが、それさえも中枢を狂わせるほどの不協和音だ。

現れた女は体中に拘束具と捕縛用のベルトを巻いており、女性とは思えない乱れた灰色の髪を逆立たせて叫び続ける。女は拘束するベルトを引き千切り、半身を反らせて更なる絶叫を上げた。黒ウサギはたまらず耳を塞ぐ。

アルゴール「ra、GYAAAAAaaaaa!!!」

黒ウサギ「な、なんて絶叫を」

十六夜「避ける、黒ウサギ!!」

えっ、と硬直する黒ウサギを十六夜が、ジンを大樹が抱き抱えるように跳び退いた。

直後、空から巨大な岩塊が山のように落下してきたのだ。2度3度、と続く落石を避ける2人を見て、ルイオスは高らかに嘲った。

ルイオス「いやあ、飛べない人間って不便だよねえ。落下してくる雲も避けられないんだから」

黒ウサギ「く、雲ですって……………!?!」

全員がハツと外に眼をやる。

雲が落下しているのはこの闘技場の上だけではなく、このギフトゲームに用意された世界全てに対して、"アルゴールの魔王"は石化の光を放ったのだ。

黒ウサギ「星霊・アルゴール……………! 白夜叉様と同じく、星霊の悪魔……………!?!」

"アルゴル"

ペルセウス座で"ゴーゴンの首"に位置する恒星であり、アラビア語のラス・アル・グルを語源とする"悪魔の頭"という意味の持つ星のこと。

ゴーゴンの魔力である石化を備えているのはそういう経緯があるからだろう。

1つの星の名を背負う大悪魔であり、箱庭最強種の一角"星霊"である"アルゴール"がペルセウスの切り札である。

外は敵味方関係なく石化の光を浴びているはずである。黒ウサギは外から士達を探すが、その姿が見つからず焦る。

もしも先程の雲が石化した士達に当たっていたとしたら……………そ

う考えてしまうのは仕方なかった。

大樹「僕らを石化させなかったのは、君なりの優しさかい？」

ルイオス「そうさ。なんせ初めての挑戦者なんだ。すぐに終わらせ
ちや勿体ないだろ？」

十六夜「それは感謝しねえとな」

十六夜はジンを下げさせ、ルイオスと向き合う。

ルイオスはアルゴールと炎の弓を。

十六夜はその拳を。

大樹は、ダイエンドライバーを。

戦闘準備は完了した。

十六夜「さ、それじゃいかよゲームマスター」

大樹「君のお宝、全部いただよ」

ルイオス「はっ。名無し風情が、精々後悔するがいいツ!!」

アルゴール「ra、GYAAAAAaaaaa!!」

“ノーマーム”と“ペルセウス”の、命運をかけた戦いの火蓋が
切って落とされた。

*

アルゴールが石化を使用する少し前

士達は騎士達との戦闘を行っていた。

十六夜達は既に最奥にたどり着いているため、もう戦闘はしなくて

もいいのだが、大手コミュニティとしての意地とプライドがある騎士達はノーネームには負けられなかった。

十六夜に倒された騎士長も再び立ち上がり、騎士達を指揮し自身も戦闘に参加して、士達を統率のとれた動きで追い詰めようとしていた。

だが士達も負けておらず、3人で連携を取りつつもライオトルーパーによる援護によって敵の統率も崩せているのであった。

士「それにしても数が多いな」

耀「それに、みんな強い」

飛鳥「ああもう！本当にしつこいわね！」

士「そうイライラするな」

飛鳥「アンタが落ち着きすぎているのよ！」

耀「飛鳥、抑えて抑えて」

士達は戦場で軽口を叩ける位には余力を残していた。そのため戦闘でもお互いの様子を把握しながら戦うことが出来ていた。

士「そろそろキツいんじゃないか、お嬢様」

飛鳥「フン。誰に言っているのかしら？私はまだまだいけるに決まってるじゃない」

耀「士こそどうなの？」

士「そうだな。ま、これくらいならまだまだイケるさ」

直後、士は嫌な予感を感じた。

すぐさま後ろにいた飛鳥を背負い、耀と目の前にて戦闘をしていた騎士長を抱えて近くの窓ガラスへと飛び込んだ。

3人は急な事に慌てたが、窓ガラスは割れず、そのまま彼らはミラーワールドへと入っていった。

そのすぐ後、もとの世界は光に包まれ、光が収まったそこには、石となった騎士やライオトルーパー達が佇んでいた。

飛鳥「ちよつと！急に何するの……………」

耀「何、これ……………」

窓ガラスからは戦闘をしていた広場が見え、先程までいた場所には石化した雲が落ちてきていた。

あと少し遅ければ、そんな想像を3人はする。

士「おそらく、アルゴールの悪魔とやらが石化を使っただらう」

騎士長「そのようだ。：それにしても、ここは？」

周囲はもとの世界とは何もかも反対となった風景。騎士長は思わず士へと尋ねる。飛鳥と耀もその答えを知る為、士の方へと視線を向ける。

士「ここはミラーワールド。簡単に言えば鏡の中の世界だ」

飛鳥「鏡の中の世界って、まるで御伽噺のアリスね」

士「ま、ここはそんなにいいものじゃないがな。とりあえずこの世界まで石化は及んでいないらしい。が、もとの世界は何もかも石化されてしまったから出るにはゲームが終わってからだ」

飛鳥「そう、仕方ないわね」

飛鳥は驚きつつも納得し、近くにあつた瓦礫に腰掛ける。先程まで行っていた戦闘での疲労がドツと押し寄せたのだ。彼女だけでなく、耀や騎士長も疲労を感じその場へ腰を下ろす。

しかし士だけは辺りを警戒していた。

飛鳥「どうしたのよ？ここは安全なのでしょう？」

士「安全……とは言い切れないな」

飛鳥「え？」

耀「……………何か、来る！」

??? 「GYAAAAaaaaa!!」

耀のその言葉と同時に、明らかに人ではない存在の叫び声が聞こえた。その叫び声は士達へと突進し、士は飛鳥を、耀と騎士長はそれぞれ躲す。

その突進をしてきた叫び声の方をに目を向けると、そこには鳥賊いかを逆さまにしたような顔をした槍を持つモンスター、バクラーケンとウイスクラーケンがいた。

飛鳥「何よアレ!？」

士「ミラーモンスター。このミラーワールドに存在する人を喰らうモンスターだ」

耀「ガルド、みたいなもの？」

士「その認識で合ってる」

士はバクラーケンとウイスクラーケンに向き合い、デイケイドライバーをギフトカードから取り出し、自身の腰にあてる。

士「お前達は休んでおけ。俺が相手してやる」

飛鳥「舐めないでもらえるかしら？」

耀「私も、戦える」

騎士長「これでも『ペルセウス』の騎士長をしているんだ。お前達にばかり任せてられんさ」

そう言つて3人も構える。

士も仕方ないと思ひカードを取り出しながら別の事を考える。

士(ジンの話ではミラーモンスターはいないはずだ。それはアイツらが認識していなかったのか、それとも別の理由があるのか。調べないとな)

KAMEN RIDER! DECADE!

士はデイケイドへと変身し、2体のモンスターと対峙する。

*

ルイオス「押さえつけろ、アルゴール!!」

アルゴール「R a A A a a a!! L a A A A A!!」

十六夜「ハッ、いいぜいいぜいいなオイ!! いい感じに盛り上がってきたぞ……………!」

ルイオス「チツ！」

大樹「彼にだけ意識を向けていいのかな！」

ルイオスがアルゴールへ指示を飛ばし、十六夜を押さえつけるが、十六夜は真正面からアルゴールと組み合う。普通ではあり得ない事なのだが、それを可能にするのが十六夜という男なのである。

その様子に苛立ちを見せるが、大樹からの銃撃を躲しつつ大樹の方にも炎の矢を放つ。

大樹はその炎の矢を撃ち落とし、さらにルイオスへ追撃する。

アルゴール「GYA A A a a a a a!!」

十六夜「ハハ、どうした元・魔王様！今のは本物の悲鳴みたいだぞ！」

十六夜は一瞬だけアルゴールと押し合いとなるが、すぐにアルゴールが耐えきれずに押し切られ、その場でねじ伏せる。

獐猛な笑顔を見せ、アルゴールの腹部を幾度も踏みつける。十六夜の足踏みはそれだけで闘技場全体に亀裂を発生させ、白亜の宮殿を砕くほどの力があつた。

ルイオス「図に乗るな、名無し風情が！」

大樹「それはそっくり君に返そう」

ルイオスは炎の弓からハルパーへと持ち替えて大樹を襲うが、下半身を捻った勢いで蹴りあげる大樹により空へと吹き飛ばされる。

辛うじて柄で受け止めるが、その衝撃に思わず嘔吐感が込み上げてきた。

さらに大樹はルイオスが怯んでいる隙にさらに銃撃を放ち、ルイオスに見事命中させ墜落させる。落ちるルイオスはちようど十六夜に叩きのめされたアルゴールに重なるように落ちた。

ルイオス「ガッ！」

アルゴール「GYA……！」

あまりにもデタラメな2人に、ルイオスは体を起こしながら狼狽して叫ぶ。

ルイオス「き………貴様ら、本当に人間か!? 一体、どんなギフトを持っている!?!」

“星霊”を力でねじ伏せ、その“星霊”を圧倒する者と、人を空高く蹴りあげ、天駆けるヘルメスの靴を履いているにも関わらずそれを撃墜する者。

そんな存在がいるはずがない。

それがルイオスの認めたくない現実として突きつけられている。

十六夜と大樹は楽しそうに自身のギフトカードを見せる。

十六夜「コード・アンノウン“正体不明”——ん、悪いな。これじゃ分からないか」

大樹「通りすがりの泥棒さ。大したギフトなんて持ってないよ」

飄々とし余裕を見せつける十六夜と大樹に陣も黒ウサギも勝利を感じていた。

ルイオスのはつきり言えば限界は近く、立ち上がる姿も初めて見た時と比べとても弱弱しいものである。足取りはおぼつかず、余裕を見せていた表情は苦痛と屈辱により歪み、小綺麗だった服はいたるところがボロボロでその間からは白い肌とは対照的な赤い擦り傷が見えている。

ルイオス「もういい。お遊びは終わりだ！アルゴール、宮殿の悪魔化を許可する！奴らを殺せ！」

アルゴール「R a A A a a a!! L a A A A A!!」

謳うような不協和音が世界に響く。途端に白亜の宮殿は黒く染まり、壁は生き物のように脈を打つ。宮殿全体にまで広がった黒い染みからは、蛇の形を模した石柱が数多に襲う。

十六夜と大樹は軽々とそれを避ける。

ルイオス「もうお前達は終わりだ！ここから生きてなんて帰さないッ!!この宮殿はアルゴールによって新たな怪物となった！お前達の相手は魔王とこの宮殿だ！このギフトゲームに貴様らの逃げ場は無いものと知れッ!!」

ルイオスの叫びに呼応する様にアルゴールと宮殿は叫び声を上げる。

最早十六夜達に逃げ場は無く、このゲームはそれこそお互いの命が散るまで戦い続けなければならない戦場と化した。

魔王が、ゲームの舞台が十六夜達へと牙を向ける。

十六夜達は避けるでもなく、逃げるでもなく、ただその顔には笑みを浮かべているだけであった。

*

一方、士達は場所を本来ならルイオスがいるはずの最奥まで移動し、2体のミラーモンスターであるバクラーケンとウイスクラーケンを倒していた。

飛鳥や耀、騎士長の援護によりそれ程苦戦する事も無く倒すことに成功し、一息ついているところであった。

士「さてと、ミラーワールドがあるならとは思ったが、お前達も認識していなかったようだな」

騎士長「まあな。我々も伝え聞いている限りでは、鏡の中の世界やその中に住むモンスターも聞いたことがない。それに、貴様が『世界の破壊者』ということもな」

士「そうか。なら、もつと他のやつに詳しく聞く必要があるな。あと、お前達の言うデイケイドは俺とは別の存在らしい」

騎士長「どうだかな。まあ今は置いておくでしょう」
軽口を叩きつつも確かめたい情報を士は確かめる事にした。

士「お前達がレテイシアを売ろうとしたのは誰か、お前は知ってるんだろ？」

その質問に騎士長は眉をしかめる。

ここで知らないと答えることは簡単だ。しかし、士にはこのミラーワールドに連れて来てもらった為にアルゴールの石化を逃れたという借りがある。

それは武人として気が引けた。

騎士長「……相手は、箱庭の外にある、一国規模の大型コミュニティだ」

それがどういう意味か分からないほど飛鳥達は鈍くはなかった。顔を見る見るうちに怒りに染め、今にも掴みかからんとする。

飛鳥「貴方ね！それが彼女にとってどういう意味か分かっているわけ!？」

騎士長「もちろん」

飛鳥「だったら!」

耀「飛鳥、落ち着いて」

飛鳥を何とか宥める耀に気にする様子もなく騎士長は自身の手を握りしめ、話を続ける。

騎士長「私だって鬼ではない。それに、彼女は優れたプレイヤーであった。だからこそ敬意を持って真摯に対応するべきだと私も思っただ。今回の件もルイオス様に掛け合ったがそれも意味はなかった」

士「まあそうだろうな」

騎士長「それに、ルイオス様は相手方から何か受け取っていた。もしかすると先程のアレはそれかもしれない」

どこか自嘲気味に笑う。

ルイオス自体、世襲によって現在の地位であるためどこまでも傲り、相手には敬意などほとんど示さないその在り方には騎士長も責任を感じているようである。

士は話を聞き、何か違和感を感じていた。

士「それだけか？」

騎士長「それだけとは？」

士「他に何か無かったか？それこそ、ルイオスだけでその相手と話していたのかな」

果たして、レテイシアという箱庭の中でしか生きる事の出来ない純

血の吸血鬼に対して、たったそれだけだろうか。

取り引き自体はその場で行う可能性もあるが、相手は必ず前払いでそれなりに払うはずである。ならその前払いがたったのミラーモンスター2体というのはあまりにも純血の吸血鬼とは釣り合わない。

前払いがそれならばルイオスもわざわざこんな取り引きには応じないはずである。利益を優先するあのボンクラお坊ちゃんの事だ。前払いがそれだけとしても欲を掻いて更に求めているはずだ。

騎士長は顎に手を当て考える仕草を見ると、思い出したようです達にその時のことを語る。

騎士長「そういえば、少しだけだが席を外した。まあ数分後には話も終わって帰ったが」

士「その内容は？」

騎士長「ルイオス様は『役に立つ物』としかおっしやられていなかった」

士「そうか、大体分かった」

飛鳥「本当？」

士「ああ」

士の予想が合っていれば、おそらくミラーモンスターと同様の類、怪人や怪物を受け取っているはずである。さらに、星座、怪人、ペルセウス、アルゴールなどとヒントがちりばめられている。答えは出た様な物だが、士達はミラーワールドから出られず、出られたとしても大樹達に伝えることはできない。故に、大人しく待つしか出来ない状況である。

取ってきた窓に映る大樹達の戦闘を見ながら、ぼんやりと考えることにした。

*

十六夜「——そうかい。つまり、この宮殿ごと壊せばいいんだな？」

ジンと黒ウサギ「「え？」」

問題ないと言わんばかりに自信満々に応える十六夜。

その十六夜に嫌な予感を感じ、すぐさま避難体勢をとるジンと黒ウサギ。

その予感は的中し、十六夜は無造作に拳を上げ、それを黒く染った魔宮へと振り下ろした。

十六夜の周囲にいた千を超えるもの達は一斉に砕け、霧散する。直後に宮殿全体が震え、闘技場が崩壊し、瓦礫は四階を巻き込み三階まで落下した。

ジンと黒ウサギは早めに避難体勢を取っていたこともあり、崩壊には巻き込まれなかった。

ルイオスとアルゴールは上空に逃げていたのだが、黒ウサギ達と同じようにその惨状に息を呑んだ。

ルイオス「馬鹿な。どういう事なんだ!? 奴の拳は、山河を打ち砕くほどの力があるのか!」

大樹「これが『コード・シンノウン正体不明』の一端か。正しく規格外のギフトだ。実に手に入れたくなるお宝だ」

ルイオスはすぐに顔を真横に向けた。

そこにはさつきから姿が見当たらなかった筈の人物、海東大樹の姿があった。それも、赤紫色の謎の戦士とその戦士と同じ色をしたエイの様なモンスターの上に乗って。

大樹「さて、まだ君の手札は残っているんだろう? ならそれを見せ

トを破壊するなんて!?”

天地を砕く恩恵ギフトと恩恵ギフトを砕く力。

相反する二つをその身と魂に宿すなど、絶対にあり得ないのだ。

“箱庭の貴族”も、“白き夜の魔王”も、“ラプラスの紙片”ですら分からない、出所不明・効果不明・名称不明の三拍子揃った真正銘コード・アンソウンの“正体不明”。

奇跡を身に宿しながら、奇跡を破壊する矛盾したギフト。

そんな存在に、ルイオスだけじゃなく黒ウサギとジンも呆然とする。

十六夜「さあ、続けようぜゲームマスター。『星霊』の力はそんなものじゃないだろう?」

軽薄そうに笑う十六夜。

その様子にルイオスは悪魔を見た。

戦意は涸かれ、最早戦う力などほとんど残っていないなかったルイオスに對し、大樹が答える。

大樹「残念だがここまでだよ」

十六夜「何?」

大樹は地面へと降り、これまで見ていた戦局から分析し、推察した答えを告げる。

大樹「アルゴールが拘束具に繋がれていた。それはつまり、ルイオスという存在は星霊を支配するには未熟過ぎたのさ」

ルイオス「っ!？」

ルイオスからは射殺さんばかりの視線を大樹に向けるが、否定する声は上がらない。否、上げられなかった。それが、何よりも真実であつたから。

自身の拳を強く握りしめ、歯を食いしばる。

こんなはずではなかった。

数多のギフトで身を固め、更には世界を石化出来るほど凶悪な星霊を従えた自分が、“名無し”に負けるなど、ルイオスだけではなく誰も予想できなかった。

あまりの屈辱にルイオスは力なく膝をつきながら、拳を地面に叩き

つける。もつと力があれば。もつと圧倒的と思えるほどの強さがあれば、負けなどしなかった。

そんなルイオスの想いに応えるように、ギフトカードが妖しく光り始めた。

それを見た十六夜は失望から期待へと変え、大樹は先程よりも警戒し、召喚したライアを盾にしながらカードとディエンドライバーを準備した。

妖しい光はどんどんと強くなり、ギフトカードは一人で宙へと浮いた。

ジン「な、何がどうなっているんですか!？」

黒ウサギ「ルイオス様のギフトはもう無いはず!なのになに?どうして!？」

十六夜「知るかよ。だが、まだ終わりじゃないってのは面白いじゃないか!」

大樹「そうも言っていられないようだ。全く、落ちるところまで落ちていたようだね」

大樹はディエンドライバーでギフトカードを撃つが、妖しい光によつて当たらない。ルイオスはまだ残っていたギフトを思い出し、今度こそ勝ちを確信した。

ルイオス「は、ははははは!!!まだ負けていない!そうだ!まだこの力が残っていた!お前達を地獄に落とすギフトが、まだ残っていた!」

そう言つてルイオスは、ギフトカードから禍々しいスイッチのような物を取り出した。

それを見た大樹はとある推測が確信へと変わった。

ルイオス「僕は負けない!負けたりなどするものか!!!これで貴様らは終わりだ!!!」

ルイオスはスイッチを押すと、禍々しいオーラに包まれた。

だがルイオスはそれを知らなかったようで、叫び声を上げる。

ルイオス「な、なんだこれは!?!僕には害がないんじゃないのか!?!う、うわああああ!!!」

黒いモヤのようなものがルイオスを覆い、赤い光と共に怪物になり果てた姿のルイオスが現れた。

右手に大剣。左腕にはアルゴールの様な顔。

凶暴な顔は二枚目だったルイオスとは全く異なっており、まさしく怪物のそれだった。

十六夜「へえ、あれも怪人ってやつか」

大樹「まあね。詳しい事は省くが、ゾディアーツスイッチを使って変身する怪物、ゾディアーツだよ。あれはペルセウス・ゾディアーツ。右手の大剣がオラクル。左腕のあれはアルゴールと同じ石化の能力を持っていて。それでもやるかい？」

大樹の問いに、十六夜は鼻を鳴らしながら答える。

未知の敵との戦闘。人でありながら人ならざるもの。前回ではお預けとなったが、今回はここまで戦える。そのことに胸を躍らせていた。

十六夜「ハツ。当然だろ！こんな楽しそうなイベントは見逃せねえだろ！」

大樹「思っていた通りだよ。それじゃ僕も」

大樹はゾディアーツライバーにカードを差し込み、銃口をルイオスへと向ける。

大樹「変身！」

K A M E N R I D E ! D I E N D !

その掛け声と共にトリガーを引く。

するとゾディアーツの変身と同じように無数のカードが大樹の身を包んだ。そして、シアン色のライダー、仮面ライダーゾディアーツとなった。

十六夜「何だよ、やっぱり変身できるんじゃねえか」

ゾディアーツ「僕は一度も変身できないとは言っていないさ」

ルイオス「この俺様を無視して話をするとは、余裕だな！」

二人「ああ、余裕だとも」

二人は怒るルイオスとアルゴールに対し、楽しげに笑いながら戦闘へと突入した。

第12話「英・雄・退・治」

ルイオス「うがああああ!!やれえ、アルゴール!!」

ルイオスの叫びと共にアルゴールは二人へと向かって行った。先程の戦闘のダメージを感じさせないことに、二人は違和感を覚えた。だが、すぐに意識を戻し、十六夜は先程と同じ様にアルゴールを殴り付けた。が・

十六夜「おいおい、どういうことだこりや。あいつ、強化されてんじやねえか」

デイエンド「ゾディアーツスイッチの力だろうね。あのゾディアーツスイッチはペルセウスの力を有していた。つまり、ペルセウスの血を引くルイオスとの相性は悪くないわけがないんだよ。そして、ルイオスが強化された事で彼の持つギフトも強化された。その証拠にルイオスは『星霊』をさつきよりも支配出来ている」

大樹の言う通り、ルイオスがペルセウス・ゾディアーツへと変身してからというもの、十六夜も大樹も徐々に押されていた。

ルイオスとペルセウス・ゾディアーツの相性は悪くないどころか最高レベルの適合をしている。故にルイオスの強化と共にアルゴールの強化もまた最大限まで引き上げられている。

先程の戦闘のダメージだけでなく、攻撃した瞬間から回復し、それよりもダメージを負うごとに『星霊』アルゴールは強くなっていた。ここまで来ると最悪の想定をせざるを得なくなってしまう。

デイエンド「このままでは、彼はホロスコープスに至ってしまう」
十六夜「ホロスコープス?なんだそりや」

デイエンド「簡単に言っただけで仕舞えば、今よりももっと強くなるってことだよ。それも、桁違いにね」

十六夜「へえ、めっちゃ面白そうじゃねえか!」

デイエンド「ま、それはそれで面倒なんだけどね」

少し含みのある言い方をしながらもデイエンドライバーで銃撃をルイオスに放つ。しかしルイオスは剣によってその銃撃をいとも簡単に叩き落とす。

十六夜は十六夜でアルゴールを殴るが、アルゴールは少し後退するだけで大したダメージは与えられていない。

ルイオス「クハハハハハハ!!もう諦めろ！お前達が勝つ事など不可能なんだよ！」

ルイオスはアルゴールと共に大樹の召喚したライアを撃破し、ライアの契約モンスターであるエビルダイバーも石化した後、粉々に砕いた。

そんな光景を見ていた黒ウサギとジンは驚きと共に絶望を感じていた。

ジン「あ、あれに勝って言うんですか？そんなの、そんなの無理ですよ」

黒ウサギ「いくら大樹さんと十六夜さんが強いと言っても、いくらなんでも無理があります。もうゲームは——」

十六夜「おい黒ウサギにおチビ」

黒ウサギが棄権を提案しようとしたその時、十六夜が黒ウサギへと声をかける。

十六夜のその顔には、悲哀も、後悔も、苦痛も、絶望も一切なく、ただ「楽しい」という感情だけで溢れていた。

十六夜「お前ら、何か大切なことを忘れてるんじゃないのか？」

黒ウサギ「な、何を」

十六夜は獯猛に、かつ無邪気に告げる。

それは、元の世界では何事にも退屈していた彼に、この世界が与えたもの。化物だと言われていた彼をこの世界は否定する。逆廻十六夜を恐怖の象徴から仲間の人として迎え入れた。

そんな彼だからこそ、絶望などしない。

何故か。

決まっている。

十六夜「こんなおもしろおかしい状況は、俺は好物なんだってことをな!!!」

そう言っつて十六夜は先程よりも何倍もの強さでアルゴールを殴る。アルゴールは今まで感じたことのない衝撃に怯え、そして吹き飛ば

された。 . . . !

爆弾が爆発した音よりも何倍もの轟音が宮殿に響き渡る。

ルイオス「なっ。」

黒ウサギ「嘘、でございますよね？」

ジン「箱庭最強種の1つである『星霊』を、それも魔王時にも引けを取らない、いやそれを超えている今のアルゴールを、吹き飛ばした？」

十六夜「あ？んなことはどうでも良い。俺が言いたいのは、今のこの状況を勝手に終わらせようとしてんじやねえよ。俺達の目的を忘れたのか？」

魔王を打ち倒せしコミュニティ。

それが彼ら『ノーネーム』が掲げ、そして今まさにこのゲームがその初陣なのだ。故に敗北は許されない。

勝利以外など眼中には無く、端から負けるつもりなど毛頭無い。

絶望などとうの昔に経験した。

歩みを止めようとしたことは山ほどあった。

しかし、いつ仲間達が帰って来ても良いように。そう思つて前を向き続けた。

目の前の敵は、そんなかつての絶望に値するか？否！

今のこの状況は敗北が濃厚か？

否！

仲間を信じ、託す。

それが今ジン・ラツセルに出来る、唯一の『ノーネーム・リーダー』としての役割である。

十六夜「言えよ、『リーダー』。その命令を、今だけは聞いてやるよ」

暗き闇は、圧倒的な光には勝てない。

眩しいほどの彼に、彼らにジンは告げる。

ジン「十六夜さん。大樹さん。このゲーム、勝ってください！」

十六夜「ヤハハッ。ああ、やってやるよ!!!」

ディエンド「美味しいところは全部持っていかれてしまったが、任

せたまえ。確実に「勝利」を盗みだしてみせよう！」
ギフトゲーム第2戦。
改めて火蓋が、切って落とされる。

*

一方ミラーワールド。

そんな彼らを見ていた飛鳥達はホツと安堵する。

士「ま、あいつらが負けることはないだろ」

飛鳥「そうね。私達にはどうすることも出来ない訳だし」

耀「そうだね。でも、そうものんびりしていられないかも」

飛鳥「え？」

飛鳥が耀の言葉に疑問を持つと同時に、先程と同じようなモンスターの声が響いた。

士は腰にベルトを当て、カードを準備した。

騎士長「まだいたのか」

士「ここは奴らのホームだからな。ルイオスが何体か持っていたか、それとも野良のやつなのかどうでも良いが。来たやつをぶっ飛ばすだけだ」

飛鳥「その意見には賛成ね。やってやろうじゃない！」

それぞれが戦闘態勢を取る中、耀は何かを感じ取った。

動物達と言葉を交わせる耀だからこそ感じ取れたナニカ。

それは思わぬ形で彼らの目の前へと現れる。

*

K A M E N R I D E ! S p e c t e r !

K A M E N R I D E ! N e c r o m !

デイエンド「英雄には英雄の力つてね」

大樹はスペクターとネクロムを召喚する。

そしてスペクターはノブナガアイコンを、ネクロムはサンゾウアイコンをそれぞれのベルトへセットし姿を変える。

それを見た十六夜は戦闘中にも関わらず興味深そうに観察する。

十六夜「なるほどな。そいつらは過去の偉人の力を使える訳だ」

デイエンド「正解。ま、その使える偉人にも限りはあるけどね」

十六夜「マジでこのゲームが終わったら付き合えよ。そいつらともやり合いてえ！」

デイエンド「君が僕よりも早くそいつを倒せたら良いとも」

十六夜「言ったな？言質はしつかりとったぜ」

確認をとった十六夜はすぐさまアルゴールへと向かった。

何度も殴る音とアルゴールの悲鳴が聞こえ、大樹は少し失敗したと言わんばかりにため息をついた。

ルイオス「よそ見ばかりしてるんじゃないやねえ!!!」

突然来たルイオスの剣撃を大樹は何事もなく避け、銃撃を放つ。がそれは先程と同じように剣で叩き落とされる。

デイエンド「口調がさつきよりも怖くなっているよ？化けの皮が完全に剥がれちゃったね」

ルイオス「ハッ！貴様らを皆殺しにすれば何も問題なんてねえんだよ！」

デイエンド（ふむ、これは早くしないと取り返しのつかないことになりそうだ。早めに決着をつけるとしよう）

デイエンドが後ろに下がり、ルイオスは追撃をかけようとすればネクロムが立ちほだかり、さらにスペクターの銃撃を喰らった。

ルイオスは鬱陶しそうに剣を振るうが、それをネクロムもスペクターも躲す。それがさらにルイオスを腹立たせた。

ルイオス「がああああ!!!鬱陶しいハエどもめ!」

デイエンド「そのハエはどっちかな?」

大樹が銃撃を放つ。

ルイオスはまたかと苛立ちをさらに募らせながら剣を振るう。

ルイオス「何度も何度も同じことしてるんじゃないやねえよ!いい加減無駄だって学習しろ!」

大樹「ああ、何度も同じ手なんてやると思っている君がね!」

ルイオスが銃撃を叩き落とすことに集中している間に、大樹はルイオスの背後へと立ち、反撃も出来ないほどの至近距離に迫っていた。

そして大樹はこれでもかと言うほどの銃撃をルイオスに浴びせる。

ルイオス「ぐあああああ!!!」

大樹「よく言うだろ?三度目の正直ってさ」

ルイオス「クソがああああ!!!」

ルイオスの怒りの一振りを大樹はサラッと躲し、追撃をかける。そこへスペクターの銃撃とネクロムの援護もありルイオスにダメージは蓄積されていった。

ルイオスは一度変身が解かれ、元の姿へと戻った。

しかしすぐにスイッチを押し再度ペルセウス・ゾディアーツへと姿を変える。

デイエンド「まだやるのかい?」

ルイオス「当たり前前だ!貴様ら如き〃名無し〃風情に負けたなんてことになったら、〃ペルセウス〃の名は地に落ちる!そんなこと、させてなるものか!例えどんな手を使ってでも、僕は勝たなくちゃいけないんだよ!!!」

ルイオスのそれは、今までの我がままで自分勝手な姿とは違い、コミュニケーションを、そして英雄である先祖の名を守る為のリーダーとして見えた。その姿に少し感心したが、すぐさまルイオスの口調は先程までの乱暴な口調へと戻った。

ゾディアーツスイッチの副作用か、と考えすぐに戦闘態勢をとる大

樹。

ルイオス「骨も残らずに殺してやるよ!!!」

先程よりも速い動きで大樹に襲いかかる。

適合率がまた上昇したことによいよ油断ならぬ状況で、大樹は
デイエンドドライバーを構える。

と、その時。

十六夜「俺も混ぜろやああああ!!!」

アルゴールとの戦闘を終えた十六夜がとんでもない速度でルイオスを殴り飛ばした。あまりの出来事に流石の大樹ですらポカンとしてから苦笑いをする。

デイエンド「全く、下手をすると土以上の化け物だね」

十六夜「あ？喧嘩ならいつでも売ってるぜ。買うか？」

デイエンド「今はまだ遠慮しておくとするよ。君がこっちに来たってことは、アルゴールは倒した訳だ」

十六夜「ああ。多分もう立ち上がれねえだろうよ。『星霊』ってのも大したことなくて不完全燃焼なんでね。こっちに混ぜさせてもらうぜ」

デイエンド「構わないさ。さて、決着をつけるとしようじゃないか」

2人の会話が終わったと同時にルイオスは再度立ち上がった。あまりの衝撃にまたも変身が解かれたようだが、ルイオスは勝つ為にスイッチを押す。

すでにボロボロだというのに、ルイオスは未だ勝つことを諦めていなかった。

ルイオス「負けない！ボクハ！オレハ！負けナドシナイ！」

言葉すら覚束ないルイオスに、2人は確実に倒す意志を固めた。

そこには全力で戦おうとするルイオスに対する、ほんの僅かな敬意が込められていた。それを知るのは、大樹と十六夜の2人だけなので。

デイエンド「決めるよ。君に合わせる。好きなように戦いたまえ」

十六夜「ああ、これで終わらせてやるよ！」

十六夜はさつきルイオスを殴った速度よりもさらに速く駆け、ルイ

オスに打撃を与える。そのダメージはしっかりと効いているようで、殴られ、蹴られ、また殴られと防戦一方であった。

そしてルイオスがダメージに耐えかね膝をついた時、大樹はディエンドライバーに決着をつけるカードを差し込む。

ATTACK RIDE! CROSS ATTACK!

FINAL ATTACK RIDE!

DI・DI・DI・DIEND!

スペクターとネクロムはそれぞれ必殺技を放つ態勢をとり、ディエンドライバーからは青緑色に光るカードが無数に現れ、渦を巻くようにルイオスへと狙いを定める。

ディエンド「それなりに楽しめたよ。さらばだ!」

大樹が引き金を引くと同時に無数のカードと同じ色の光線がルイオス目掛けて発射された。スペクターとネクロムもそれぞれのライダーキックを放ち、ディエンドのFINAL ATTACK RIDEとそれぞれのライダーキックがルイオスに直撃した。

ルイオス「ぐあああああ!!」

ドオオオオン!!!

ルイオスの叫びの後に爆発音が辺りへと響き渡った。

*

ルイオス「うつ」

大樹「おや、お目覚めかい? 思ったよりも早いね。箱庭の人間だからかな?」

ルイオス「こ、ここは。ハッ、ゲームはいや、そうか。負けたんだな」

大樹「ご名答。君達『ペルセウス』の完全敗北だよ」
変身を解いた大樹がルイオスの言葉に返答する。

ルイオスが気を失っていた間、ゾディアーツスイッチは電流が走ると共に破壊され、辺りの石化は解かれた。

黒ウサギはミラーワールドから帰還した土達を見つけ、無事な姿に泣きながら喜び、その姿は土にバツチリと撮られていた。

『ペルセウス』の面々は自分達の敗北を知り、膝から崩れ落ちる者や嘆き悲しむ者で埋め尽くされた。しかし騎士長の言葉により、自らが為すべきことを理解し、そのための行動を始めた所である。

十六夜は少し不完全燃焼であったようで、土や大樹にひたすらちよつかいをかけ、痺れを切らした大樹によって召喚された数人のライダー達と戦闘中である。

それらのことを聞き、ルイオスは己の未熟さ、不甲斐なさ、その他諸々を感じた。

ルイオス「全く、あんなだけ大口を叩いてこの様とは。情けないな」
大樹「しかも奥の手のスイッチを使つてもボロ負けするなんて、笑えてくるよ」

ルイオス「くっ！まあ良いさ。負けは負けさ。素直に認めるよ」

大樹「そうか。なら敗者である君達から何を戴いたこうかな」

ルイオス「吸血鬼じゃないのか!？」

大樹「それは彼らの欲している物であつて、僕の欲しい物じゃない」
あまりのことにルイオスは痛む傷を忘れ立ち上がる。

そして1つの考えに辿り着く。

大樹はルイオスの持つギフトを欲していた。
つまりそれが狙いかと考える。

だがその考えを見透かした大樹から否定される。

大樹「もう君のギフトには興味が無いよ」

ルイオス「なら、何を」

大樹「辺りを見てみなよ。特に君の部下達をさ」

大樹に促され辺りを見渡すルイオス。

破壊され尽くされた宮殿。泣き喚き、嘆き悲しむ部下達。そして、

彼らの立てていた御旗。

そうして理解した。

自分達には、もう何も残されていないのだと。

大樹「『ペルセウス』の名も、御旗も戴いたよ。君の最後に見せたプライドに敬意を示して、名を貶めることだけはしないと約束するよ」

ルイオス「そ、そんな」

大樹「ま、これから頑張りましたまえ。それじゃあね」

大樹は項垂れるルイオスに興味を無くし、その場を去っていく。徹底的に打ちのめされたルイオスに優しい言葉をかけるつもりは毛頭なく、ただトドメを刺した者としての責務を果たしただけである。

こうして、『ペルセウス』と『ノーネーム』の戦いは、『ノーネーム』の完全勝利によって幕を閉じたのであった。

*

『ペルセウス』とのギフトゲームの翌日の夜。

『ノーネーム』本拠屋外にて。

『ペルセウス』に勝利したことによる祝勝会が行われることになつており、セツティングはすでに『光写真館』の面々と子供達で色とりどりに飾り付けがなされていた。

レテイシアは『ペルセウス』から無事に取り戻し、正式に仲間として迎え入れられた。まあメイドとして問題児達は扱うのだが。

メイドレテイシアの所有権は士と大樹が辞退したことで、十六夜が4、飛鳥と耀が3ずつという取り決めになり、そのことに黒ウサギがハリセンでツツコミを入れたの言うまでも無いだろう。

黒ウサギ「えーそれでは！新たな同志を『ノーネーム』及び『光写

真館“の歓迎会を始めます！”

ユウスケ「イエーイー！」

子供達「「「「「イエーイー！」」」」」

栄次郎「さ、ジャンジャン作るからジャンジャン食べていってよ」

飛鳥「あらこのお肉、中々柔らかくて食べやすいし美味しいわ」

耀「こつちのソーセージも、モグモグ、中々」

十六夜「ヤハハッ！肉は速い者勝ちだよな！」

子供「あ、十六夜お兄ちゃんズルイ！」

子供「野菜も食べなきや駄目だよ！」

夏海「こつちにはおにぎりもありますよ〜」

小夜「ハムハム、うん、美味しい」

各々が笑顔で溢れ、とても楽しんでいる様子に黒ウサギは思わず涙を溢しそうになってしまう。

こうして歓迎会が出来るのも“光写真館”の面々のおかげであり、感謝しても仕切れなかった。久々のご馳走に子供達やジン、それに飛鳥達も歳相応の表情を見せていた。

だからこそ、問題児達と“光写真館”の面々を喜んでもらおうと白夜叉発案でのサプライズがあった。

黒ウサギ「それでは本日の大イベントが始まります！皆さん、箱庭の天幕に注目してください！」

黒ウサギの掛け声と共に全員が一斉に天幕を見上げる。今宵も満点の星空が広がり、空に輝く星々は燦然と輝きを放っていた。

そんな中、変化が訪れる。

輝く夜空に星の線が何本も引かれる。

そう、流星群である。

子供達も、“光写真館”の面々も、問題児達も感嘆の声を漏らす。あまりにも幻想的なその光景に皆目を奪われていた。

黒ウサギ「この流星群を起こしたのは他でもありません。我々の新たな同志、異世界から来た彼らがこの流星群のきっかけを作ったのです」

黒ウサギの説明に思わず異世界から来た面々は驚きの声をあげる。

だが黒ウサギは気にせず説明を続ける。

曰く、箱庭の世界は天動説のように箱庭中心にルールが回っているのだと。そして、「ペルセウス」はサウザンドアイズから敗北により追放され、この星々からも旗を下ろしたのだと。

こればかりは普段驚くことが少ない十六夜ですら驚きを隠せないでいた。

何せ、この星空の全てが箱庭の為だけに作られているというのだから、驚かない方が無理な話である。

ペルセウス座があつた場所は流星群と共に跡形もなく消滅し、「サウザンドアイズ」からの祝福に彼らは茫然としていた。

黒ウサギ「ふっふーん。驚きました？」

十六夜「やられた、とは思つてる。世界の果てといい、水平に廻る太陽といい、色々と馬鹿げたのを見たつもりだったが、まだこれだけのショーが残っていたなんてな。おかげ様、いい個人的な目標もできた」

黒ウサギ「おや？なんでございましょう？」

十六夜は天高くペルセウス座のあつた所へ指を掲げ、告げる。

十六夜「あそこに、俺達の旗を飾る。どうだ？面白そうだろうか？」

黒ウサギは絶句し、そして弾けるような笑い声を上げる。

黒ウサギ「それは、とてもロマンが御座います」

十六夜「だろ？」

黒ウサギ「はい♪」

新たな希望達は燦然と輝く夜空にも負けない輝きを強く、そして美しく放っていた。

それは泡沫の夢では無い。

それは取り戻せない過去の栄光ではない。

それは彼らが創り出す、まだ誰も知らない未来へと続く物語。

彼らの道は茨だろうと何だろうと、目の前の障害を打ち碎き進む。それが彼らが歩む彼らの在り方である。

*

大樹「で、そっちの世界はどうなんだい？」

本拠から離れた場所にて、大樹はとある人物と会っていた。

???「今回のレイオス氏のゾディアーツ化、それに前回のガルド氏のファンガイア化とオルフェノク化。どちらも少しばかりはこっちでも影響があつたさ」

大樹「だけど大した影響ではない、ということかな」

???「ああ。引き続きよろしく頼むよ」

大樹と謎の人物が会話を終えようとした時、そこへ土が現れた。

土「なるほどな。海東を呼び出したのはやはりお前か、黒ウオズ」

ウオズ「その呼び方は辞めてくれるかな、門矢土」

そこにいたのは、仮面ライダージオウである常盤ソウゴに仕える青年、仮面ライダーウオズことウオズであった。

ウオズはフツと笑い、土へと顔を向ける。

土「始めから違和感があつた。黒ウサギは俺達を呼んだ時、海東がないことに何もおかしいとは思っていなかった。まあここだけならアイツが抜けているってことでまだ納得出来るが、だがアイツは海東を呼び出した張本人であるにも関わらず反応が無さすぎた。そこから海東を呼び出したのは別にいると考えにいたったわけだ。そしてそんな芸当が出来るのは、おそらく俺達を除けばお前だけだろう？」

ウオズ「長々と説明をどうも。まさしくその通りだとも」

ウオズは土の推測を肯定する。

続けて土は大樹をこの箱庭に呼んだ理由について推測を伝える。

土「海東を呼んだのは、お前達の世界が歪み始めたか？」

ウオズ「ああ。我が魔王の世界だけではなく、様々なライダーの世界に異変が起き始めた。ブレイドの世界にファンガイアが現れたり、ウィザードの世界にミラーモンスターが現れたりとしている。今はまだ落ち着いているが、近いうちに大量のモンスターが世界を覆い尽くすのは確実だ」

士「その原因が、この箱庭ってわけか」

いち早く異変を感じ取ったウオズは大樹と共に原因を探り、そして原因が箱庭であるということ突き止めた。

そして今回と前回の怪人化による影響は元の世界でもあり、ファイズの世界にタイガーファンガイアが現れ、キバの世界にはタイガーオルフェノクが出現した。またペルセウス・ゾディアーツが何故か令和ライダーの世界にも現れたとのことである。

ウオズ「箱庭に出現したモンスターがこちらの世界にも現れる。それも別のライダーの世界に。過去に来た魔王『アナザーディケイド』の置き土産が間違いなく原因だろう。そして、その『アナザーディケイド』もいずれ現れると、この本には書かれている」

士「つまり、俺達に『アナザーディケイド』を倒して異変を解決しろって訳か」

ウオズ「その通り。我が魔王はまだ完全には力も記憶も取り戻していない。だからこそ、今、解決に動けるのは君達だけというわけさ」

士「そういうことか。まあ仕方ない。引き受けてやる」
ウオズ「感謝するよ、門矢士。こちらも何か動きがあれば知らせよう。それでは私はこれで」

ウオズはそう言ってマフラーを使い、いつものように姿を消した。

元の世界での異変。

箱庭での魔王復活の兆し。

それぞれが絡み合う中で、世界の破壊者、ディケイドは星が降る夜の下、その瞳に何を映すのか。